



* 0038902001 *

0038902-001

14. 5-345

大亜細亞協会年報

大亜細亞協会・編

大亜細亞協会

昭和8年3月至昭和11年3月、昭和11年
4月至昭和15年3月

昭11至15

AGH

欠

MISSING

14.5

345

×

複写

大亞細亞協會年報

大亞細亞協會事務局編

自昭和十一年四月
至昭和十五年三月

14,
34

昭和十五年四月

大亞細亞協會年報

(自昭和十一年四月
至昭和十五年三月)

大亞細亞協會事務局發行

昭和十五年四月



大亞細亞協會年報

(自昭和十一年四月
至昭和十五年三月)



大亞細亞協會事務局發行

14.5
345

目次

一 大亞細亞協會創立趣意書並規約……………五

二 昭和十一年度大亞細亞協會總會記錄……………三

三 昭和十四年度大亞細亞協會總會記錄……………四

四 大亞細亞協會の諸會合……………二

(一) 講演會及び講習會……………二

昭和十一年度之部

△各地に於ける大亞細亞主義運動遊説經過概要：(△大阪市講演會懇談會：△福
岡市講演會懇談會：△熊本市講演會懇談會：△神戸市講演會懇談會：△京都市懇談會：△名古屋市
懇談會：△金澤市講演會懇談會：△仙臺市懇談會：△札幌市講演會懇談會)：△昭和十一年度總會
記念大講演會：△大阪、京都、福岡市對支問題講演會

昭和十二年度之部

△福岡、大阪、京都市歐洲事情講演會：△大阪市時局問題講演會：△京都市時局
問題講演會

昭和十三年度之部

△福岡市時局講演會：△京都市時局講演會：△名古屋支部結成記念講演會：△金
澤市對支問題講演會：△京都市對支問題講演會：△南京陥落一周年記念大亞細亞主義講演會：△京
都市大亞細亞主義講演會：△大阪市大亞細亞主義講演會：△名古屋市時局大講演會

昭和十四年度之部 △大亞細亞主義夏季講習會：△神戸市興亞大講演會：△小倉市大亞細亞主義講演會：△福岡市時局大講演會：△京都支部春季講演會：△金澤市時局大講演會：△神戸市時局大講演會：△大阪市大亞細亞主義講演會：△昭和十四年度大亞細亞協會總會記念「世界動亂と大亞細亞主義」講演會

(二) 懇談會及び歡送迎會

昭和十一年度之部 △川越大使桑木、近藤少將、笠原、秦大佐歡迎會：△南雲少將歡迎懇談會：△比律賓ピオ・デユラン博士歡迎會：△高木評議員、中谷幹事歡迎會：△建川中將慰勞、今田少佐歡迎會：△加來、中瀬中佐、大石、守屋少佐歡送迎會：△長、小野田中佐、杉森理事送別會：△同人亡年懇談會：△高木評議員、白鳥、栗原公使、柴山大佐歡送迎會

昭和十二年度之部 △杉森、半田理事歡迎懇談會：△比律賓ラウレル博士歡迎會：△樋口大佐送別會 △河相情報部長歡迎會：△同人歡迎懇談會：△高木評議員、飯村少將歡迎懇談會：△同人慰勞晚餐會：△比島ヘラルド紙主筆M・フアロラン氏歡迎會：△同人懇談會：△中谷理事歡迎懇談會：△末次大將內閣參議就任祝賀會：△鹿子木理事送別懇談會：△松井大將外歸還同人歡迎、末次大將內務大臣就任祝賀會：△北京新民學院學生視察團歡迎會

昭和十三年度之部 △同人歡迎懇談會：△鹿子木理事歡迎會：△松井會頭內閣參議就任祝賀會：△佐藤理事歡迎午餐會：△半田理事歡迎懇談會：△白鳥大使送別會：△蒙古聯盟自治政府德王主席一行歡迎茶話會：△栗原東亞局長歡迎懇談會：△維新政府梁行政院長一行歡迎會：△南京入城一周年記念招待會：△興亞院關係者招待懇談會：△學生問題懇談會

昭和十四年度之部 △長谷部少將、眞方中佐歡迎會：△橋本大佐外同人歡迎懇談會：△小磯拓相、太田書記官長就任祝賀會：△新民會指導部長歡迎會：△雜誌「大亞細亞主義」執筆者懇談會：△武藤少將、有末、岩畔大佐歡迎會：△田中少將歡迎懇談會：△白鳥大使、須磨情報部長歡迎會：△陸軍會員招待懇談會：△大島大使、栗原公使歡送迎會：△興亞團體聯合會發會式

(三) 役員會及び研究會

昭和十一年度之部 △蒙古、イラン、阿富汗事情研究會：△評議員、理事、幹事會：△評議員會：△支那問題研究會：△役員會：△時局委員會：△時局委員會：△佛印、暹羅事情研究會

昭和十三年度之部 △西亞細亞事情研究會：△支那問題研究會：△上海經濟事情研究會：△役員懇談會：△役員懇談會：△中支事情研究會

昭和十四年度之部 △伊蘭、緬甸事情研究會：△本部、支部連絡會議：△時局委員會：△小學校教職員亞細亞研究會：△本部、支部連絡會議：△比律賓事情研究會：△常任役員懇談會：△常任役員會

五 大亞細亞協會各地支部發會式並に事業概況

△福岡支部：△大阪支部：△京都支部：△金澤支部：△名古屋支部：△神戸支部：△熊本縣大亞細亞協會

六 臺灣大亞細亞協會の事業概況	五
七 中國大亞細亞協會の事業概況	八一
八 大亞細亞協會發行機關誌及パンフレット	八三
九 機關誌「大亞細亞主義」總目次	八四
一〇 大亞細亞協會役員及會員氏名	一一
一一 大亞細亞協會各支部役員及會員氏名	一三四
一二 臺灣大亞細亞協會役員及會員氏名	一五〇

大亞細亞協會創立趣意書

一

滿洲事變を契機として、世界政治は今や劃期的なる變化と轉向とを遂げやうとしてゐる。世界最新の國家としての滿洲國の自立は既に大戰後の國際政治史に於ける一大驚異である。然も獨立滿洲國の出現は、相踵いで生起せしめらるべき世界史的變化の僅かに序幕に過ぎぬ。東亞の自主が滿洲の自立に次いで確立されねばならぬ。文明の母亞細亞の自由と光榮が、王道新國家の建設に踵を接して再建されねばならぬ。曾て滿洲は歐人の世界征服に對する東亞最後の防塞であつた。今や滿洲はそれ自體一個の國家として強化され統整せられた。全亞細亞の團結と再組織への工作が此の極東の新事態を前提として着手せられねばならぬ。

二

惟ふに、亞細亞は、文化的にも、政治的にも、經濟的にも、地理的にも、はた、人種的にも明らかに一個の運命共同體である。亞細亞諸民族の眞の平和と福祉と發展とは、一體としての亞細亞の自覺とその有機的結合の上のみ可能である。亞細亞に關するもの相互の反目と抗争とは外來の干渉に對して好箇の機會を供するものであ

り、現に亞細亞の上に加へられつゝある重壓を自ら加重する所以に外ならぬ。而して亞細亞諸國相互の抗争の機會を杜絶し、外來の干渉と離間とを排絶するためには現在分散亂離の状態に在る亞細亞諸民族をして一個の聯合體にまで組織し統整するの努力が絶対に必要である。加之、亞細亞の混沌と亂離とはひとり亞細亞自らの不幸たるのみならず、それが常に歐羅巴または亞米利加の野心と貧婪とを刺戟するに於て、世界平和のための至大の障害であらねばならぬ。東方の不安と動搖は、直ちに世界の不安と動搖である。亞細亞人の自律自強による亞細亞の秩序化は實に世界政治を不動の根基の上に安定せしむる前提である。

三

然り而して、亞細亞の再建と秩序化の重責は、職として皇國日本の双肩にかゝる。我等は曾つて四半世紀前、國運を賭して露西亞帝國による東亞侵略の狂瀾を既倒に回し、全亞細亞覆没の運命を救ひ、よく有色諸民族擡頭の氣運を醸成し得た。今や滿洲事變を契機として人類史は復た一大轉換の潮頭に臨んで居る。皇國日本はよろしく日露戦争の世界史的意義を擴充し、その一切の文化力、政治力、經濟力、組織力を傾倒して、亞細亞の再建と統一に向つて進一步を劃すべき時である。蓋し、亞細亞諸民族の自強と團結の指導として歐羅巴偏局の現國際機構を改善し、人種平等資源衡平の原則の上に新世界秩序を創建することこそ、我が建國の理想を恢弘し皇道を四海に扶植するの一路である。大亞細亞聯合の結成は、今日の日本國民が當面する歴史的任務である。

四

大亞細亞聯合の結成は、今日の國際政治の進化過程より見るも極めて自然の途である。地域的、文化的若くは人種的類縁によりて諸國民が一個の政治的並びに經濟的聯合體を組織せんとすることは人類社會の必然の行程である。民族國家より世界國家に飛躍することは不自然であり不可能である。偶々歐洲大戰なる異常なる機會に於て、歴史的要因の熟成を待たず早期に出現したる汎世界聯合としての國際聯盟が、汎大陸主義汎民族主義によりてその原則的修正を受くることは、蓋し當然の歸結でなければならぬ。その加盟諸國の誠意ある努力にもかゝらず、國際紛争の解決と民族闘争の緩和に國際聯盟が殆ど無力にして紛争解決の努力が却つて紛争を激成しつゝあるの憾を免れざる所以のものは、上述の如き國際政治必然の進化過程を無視して觀念的世界主義の上に立脚する國際聯盟の本質的缺陷に出づるものである。今明日の國際政治並びに國際經濟は、恐らくは歐羅巴聯合、亞細亞聯合、亞米利加聯合、サウエート聯合或はアングロサクソン聯合等の汎大陸的乃至汎民族的諸集團の對立と協力の交錯によりて運籌せらるべき動向に在り、新なる世界平和の機構は、まさに斯くの如き諸集團並立の態勢を基調として樹立せられざるべからざるを知るのである。

五

かくて、大亞細亞聯合の結成は、今日の亞細亞にとりて必要なのみならず、眞乎の世界平和確保の上にも最善且つ絶對の途である。吾人が茲に相圖つて大亞細亞協會を創立し、亞細亞諸國に於ける文化、政治、經濟、諸事情の調査研究・皇國と亞細亞諸國との親和誘掖關係の増進・之等の諸國に對する皇國文化の紹介普及等の努力を遂じて、やがて全亞細亞諸民族を打つて一丸とする亞細亞聯盟の實現に向つて拮据せんとする所以のものも、亦實に此の途が人類文化の進運に貢獻し世界平和を確保する最善絶對の途なることを確信するが故に外ならぬ。大方の識者諸賢の御賛同と御協力を賜はるを得ば幸甚である。

昭和八年三月一日

大亞細亞協會創立委員會

大亞細亞協會規約

第一章 總 則

- 第一條 本會ハ大亞細亞協會ト稱ス
- 第二條 本會ハ亞細亞諸國ノ文化、政治、經濟、社會諸事情ヲ調査攷究スルト共ニ、皇國ト亞細亞諸國相互間ノ親和誘掖關係ノ増進並ニ之等ノ諸國ニ對スル皇國文化ノ普及流汎ヲ圖リ、ヤガテ全亞細亞ヲ打ツテ一丸トスル亞細亞聯盟ノ實現ニ向ツテ拮据スルモノトス
- 第三條 本會ハ本部ヲ東京ニ置キ、必要ナル地ニ支部又ハ連絡所ヲ設ク
- 支部ハ當該地名ヲ冠シ某大亞細亞協會ト稱スルコトヲ得
- 第四條 本會ハ本會ノ趣旨ニ賛同スル個人又ハ團體ヲ以テ構成ス

第二章 事 業

- 第五條 本會ハ本會ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ
- 一、日本國民ニ對スル亞細亞意識ノ鼓吹、亞細亞諸國ノ國情ノ紹介
 - 二、他ノ亞細亞諸民族ニ對スル皇國文化及ビ滿洲國ノ國情ノ紹介並ニ宣傳

- 三、日本ト亞細亞諸國特ニ近東中央亞細亞方面トノ通商ニ關スル調査、連絡、紹介
- 四、亞細亞諸國トノ間ニ於ケル教授及ビ學生ノ交換、研究員及ビ情報員ノ派遣、經濟調査團、新聞記者團ノ招待並ニ派遣
- 五、汎亞細亞會議ノ開催
- 六、亞細亞會館ノ設立
- 七、本協會附屬ノ學校及ビ研究所ノ設立
- 八、機關新聞雜誌、圖書、パンフレット等ノ發行

第六條 本會ハ右ノ事業ヲ行フタメ左ノ部門ヲ設ク

總務部、調査研究部、情報部、宣傳部、文化事業部、出版部、連絡部、會計部等

第三章 役員

第七條

副 會 頭	會 頭	總 裁	評 議 員
二 名	一 名	一 名	若 干 名
一 名	一 名	一 名	若 干 名
一 名	一 名	一 名	若 干 名

第八條 會頭ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理ス
顧問ハ會頭ニ協力シテ會務ヲ指導シ必要アル場合會頭ニ代ル
副會頭ハ會頭ヲ補佐ス
會頭、顧問、副會頭ハ總會ニ於テ之ヲ推舉ス

第九條 評議員ハ本會ノ重要事項ヲ審議裁決ス
評議員ハ會頭之ヲ推薦ス、會頭ハ評議員中ヨリ當任評議員若干名ヲ依囑ス、當任評議員ハ本會ノ機務ニ參畫シテ會頭ノ諮問ニ應ズ

第十條 理事ハ理事會ノ合議ヲ以テ本會ノ機務ヲ處理ス
理事ハ評議員會之ヲ推薦ス、理事會ハ互選ヲ以テ理事長ヲ定ムルコトヲ得

第十一條 會頭ハ理事中ヨリ當任理事若干名ヲ囑託ス、當任理事ハ會頭ノ指示ヲ受ケ本會ノ常務ヲ執行ス

第十二條 監事ハ會計監督ノ責ニ任ス

監事ハ評議員會之ヲ推薦ス

第四章 會員總會及役員會議

第十三條 會員總會ハ毎年一回會頭之ヲ召集ス、但シ評議員會ニ於テ必要ト認メタル時ハ臨時總會ヲ召集スルコトヲ得

第十四條 會頭ハ評議員會ノ申請ニヨリ臨時役員會議ヲ召集ス、役員會議ハ評議員、理事及ビ監事ノ全員ヲ以テ構成シ重要會務ノ協議ヲナス、役員會議ハ役員ノ三分ノ二以上ノ出席ヲ以テ成立シ多數ヲ以テ決ス

第五章 經 理

第十五條 本會ノ經費ハ會員ノ納入スル會費及ビ特志家ノ寄附ヲ以テ之ニ充ツ

第十六條 本會々員ハ會費年額參圓ヲ納入スルモノトス、但シ特別會員ハ會費年額拾圓トス

第六章 入會及ビ退會

第十七條 本會々員ヲラントスルニハ會員二名以上ノ紹介アルヲ要ス

第十八條 一度本會々員トナリシモノハ理由ナクシテ退會スルヲ得ス

昭和十一年度大亞細亞協會總會記錄

大亞細亞協會第一回總會を昭和十一年十一月十六日午後三時半より東京會館に於て舉行、西原理事開會の辭を述べ、次いで一同起立して皇居遙拜、國歌奉唱の後、主宰者として松井評議員より挨拶あり、下中理事より事業報告、會計報告を爲し、菊池評議員より規約改正案につき一同にはかり満場異議なく決定、會頭副會頭の推舉に關しては菊池評議員の發言により全員一致を以て松井大將を會頭に、矢野文學博士、村川文學博士を副會頭に推舉す。同大將受諾の上、會頭就任の挨拶あり、次いで各支部及び姉妹團體代表の挨拶及報告に移り、比島大亞細亞協會顧問ピオ・デュラン博士、臺灣大亞細亞協會幹事佐藤佐氏より比島大亞細亞協會並に臺灣大亞細亞協會の活動狀況につき説明あり、次いで滿洲國協和會代表中村寧氏の挨拶、大阪支部常任理事山上治三郎氏、福岡支部長西川虎次郎氏、金澤副支部長辰村米吉氏の諸代表よりそれぞれ支部創立經過及び現況に關し報告あり、次いで松井新會頭より役員推舉の披露あり満場拍手

晚 餐 會

總會終了後午後六時より晚餐會を開催、松井大將より會頭就任の挨拶並協會今後の運動に關する意見の披露あり、是れに對して芳澤謙吉氏より祝辭あり、其他滿洲國謝大使、比律賓國立大學教授ピオ・デュラン博士、林銑十郎大將、本多熊太郎前大使、築田欽次郎氏よりそれ／＼祝辭並感想を述べられ、種々懇談を交へて八時半散會した。

斯くて大亞細亞協會創立以來第一回の總會は來會者百三十餘名學界、實業界、軍部、外交界、操觚界等の有力者並びに此の方面の志業に盡瘁せられたる先覺者を網羅して盛會裡に終了した。當日の出席者左の如し。

近衛文麿、松井石根、末次信正、菱刈隆、林銑十郎、阿部信行、杉

山元、山本英輔、謝介石、芳澤謙吉、小山松吉、本多熊太郎、太田爲吉、矢田七太郎、内田定雄、加藤敬三郎、西川虎次郎、菊池武夫、石光眞臣、兩角三郎、井戸川辰三、坂西利八郎、和田龜治、等々力森藏、貴志彌次郎、奥平侯藏、高田豊樹、上原平太郎、二子石官太郎、室兼次、松井七夫、齋藤恒、廣瀬壽助、渡邊良三、建川美次、小林省三郎、小野寺長治郎、高木陸郎、築田欽次郎、相馬半次、中島知久平、アルデシル(イラン)、ピオ・デュラン(比島)、干靜遠(滿洲)、松井退藏、ボース(印度)デス・パンデイ(印度)南一雄(安南)、スカルジョ(印度ネシア)、曹秉森(滿洲)、楊雲竹(支那)、趙雷(冀東)、許丙、佐藤安之助、角田政之助、黒澤圭一郎、若澤敬策、野田清、久世庸夫、尾崎敬義、栗原正、大志麻孫四郎、大山卯次郎、平塚廣義、松岡正雄、堀義貴、内藤智秀、安達房治郎、橋本増吉、田

鍋安之助、五百木良三、田代重徳、中山優、今岡十一郎、橋本欣五郎、前田稔、犬塚惟重、中村寧、宮田光雄、今牧嘉雄、井上靖、加來止男、梅崎卯之助、大石堅志郎、齋藤次郎、胡國華、佐藤佐、五郎丸保、磯海國敏、神尾茂、由上治三郎、辰村米吉、神田正雄、稻原勝治、西田卯八、櫻木俊一、宇治田直義、角岡知良、高橋利雄、茂森唯士、高木富五郎、村田孜郎、飯泉良三、半澤玉城、松崎雄三郎、平野銀治、山口和一、綾川武治、黄揆文、中原謙司、竹井十郎、立野儀光、梶原勝三郎、谷口五郎、小堀寅次郎、江野澤恒、中保興作、殿田孝次、神田孝次、徳富雪夫、齋藤桂助、近藤義晴、佐藤伊兵、今村忠助、堀米康太郎、熊谷安太郎、井上寅雄、永原外清、太田耕造、西原矩彦、下中彌三郎、中谷武世

昭和十四年度大亞細亞協會總會記録

昭和十四年度大亞細亞協會總會を十二月十二日午後三時より丸ノ内東京會館に於て舉行、本部會員、各地支部代表者及び來賓約百名參會、開會に先だつて、皇居遙拜、英靈並びに出征將兵に感謝黙禱を捧げたる後、司會者中谷理事の開會の辭を以て總會開會、風邪缺席の松井會頭に代つて末次大將挨拶を述べられ(別項會頭挨拶參照)、續いて村川副會頭を議長に推薦して議

事に入る。下中理事より事業報告(別項參照)、を西原理事より庶務會計報告をなし、次で大阪支部代表下地玄信氏、神戸支部代表今井嘉幸氏、京都支部代表稻垣孝照氏、名古屋支部代表宅間重太郎氏、福岡支部代表里屋武夫氏等より夫々支部の報告あり、滿支友誼團體を代表して新民會東京事務所長樊友實氏より挨拶あり、各方面よりの祝電披露に次いで規約改正、顧問推戴役員推薦

を別掲の如く可決、末次顧問及び新役員代表として、建川常任評議員並びに下中理事長より夫々就任の挨拶をなし、今岡理事の朗讀により聲明(別項參照)を發表、萬場拍手を以て之れに賛同、最後に末次顧問の發聲にて 聖壽萬歳を奉唱、午後五時閉會

晩餐會

引き続き同日午後六時より會頭招待の晩餐會を開催、別掲諸氏出席、席上末次顧問の挨拶ありて後、來賓を代表して築田欽次郎氏より謝辭あり、續いて高橋三吉、太田耕造、山崎清純、ボース、鹿子木員信の諸氏よりそれぞれ所懐の披瀝あり盛會裡に八時半散會す。

當日の出席者左の如し

(五十音順)

赤井春海、安達房次郎、淺野甚七、若澤敬策、秋山昱禎、青山源七郎、天川信雄、稻垣孝照、今井嘉幸、今岡十一郎、石川信吾、井上雅二、今牧嘉雄、伊藤斌夫、今村忠助、岩崎良能、飯沼莊一郎、小川郷太郎、大谷登、大淵三樹、太田耕造、大島一郎、尾崎敬義、大西齊、太田宇之助、大島豊、鹿子木員信、鎌田彌彦、加藤辰彌、金澤冬三郎、菊池武夫、清藤秋子、木野廣三、黒澤圭一郎、熊谷千代丸、後藤七郎、近藤英次郎、小林順一郎、駒井徳三、近藤義晴、阪谷芳郎、佐藤安之助、櫻木俊一、佐々木勝三郎、里屋武夫、佐久間利平、下中彌三郎、下村正太郎、下地玄信、志田勝、鹽見清、柴田義彦、

會頭挨拶

此處に昭和十四年度の總會を開催するに當り、會員諸君並びに各位の前に一言挨拶を申述ぶる機會を得ましたことは、私の大に欣快とするところであります。先づ、各位が公私御多忙中のところを、殊に地方の同志諸君には態々御參集下さつた御熱意に對し、本部同人を代表して感謝申上げるものであります。思ふに、支那事變勃發以來既に二年有半、南京攻略より數へ

まして満二ヶ年に相當し、這の間十萬の將兵は大陸の野に護國の鬼と化し、銃後國民の犠牲も亦決して尠少なからざるものがあります。然も事變の解決、新東亞建設前途なほ甚だ容易ならざるを思はしめられるのであります。前線銃後を連ねての國民總力戦は、却つて今後こそ愈々本格化し來るものと覺悟しなければなりません。偶々今夏勃發したる歐洲動亂は、歴史の必然に於てやがて第二次世界大戰に發展すべく豫想せられ、これが直接間接我が東亞の局面に深大なる影響を持ち來ることは論を俟たないのであります。茲に於て私共は、歐洲の動亂と東亞の變局とが、既に一體不可分の相互關係に在り、支那事變解決の途は即ち世界的變局拾收の途に連ることを知るのであります。東亞新秩序建設の努力は、かくて、とりもなほさず、世界新秩序建設の努力に外ならないのであります。吾人は年來亞細亞の復興、東亞建設の原理として大亞細亞主義を唱導し來つたのであります。今や大亞細亞主義は單に東亞建設の原理たるのみならず、延ひて世界の新しき平和機構を決定すべき重要な要素となり來つたことを知るのであります。

顧みれば協會創立以來、七年、同人の努力、その效の未だ大に見るべきものと云ふを得ないのであります。然もに生かし、また事變に忠死したる幾萬將兵の英靈に應ふる所以であると信ずる次第であります。一言以て所懐を述べ、御挨拶に代へる次第であります。

下中理事長の事業經過報告

私より簡單に事業の經過竝に本會活動の現況について御報告申し上げます。

創立以來滿七年、専ら大亞細亞主義思想の普及、組織の擴大に力めて参りましたが、事變以來本會の活動が一段と、會の内外に亙つて、又國の内外に亙つて痛切に要求せられて参りました。本會の創立當初には、大亞細亞主義の提唱そのことが一部の先覺者の間には理解せられても一般には稍縁遠い感を抱かせてゐましたが、今日では新聞雜誌にも漸く散見するやうになり、外國でも Daijishungai ト云ふ語が新しい言葉として一流雜誌、新聞紙等の評論に登壇して参りました。また新支那中央政權樹立を準備しつつある汪兆銘氏の如きも大亞細亞主義を鼓吹してをります。孫文に還れ、孫文の大亞細亞主義に還れ、孫文自らによりて修正せられたる三民主義は取りも直さず大亞細亞主義であるとまで申してをります。最近決定致されました興亞委員

國民の間に於ける大亞細亞主義的思潮の擡頭昂揚には、協會同人の運動も與つて聊か貢獻するところあつたと申しても、必ずしも自負の咎めを受けないであらうと信ずるのであります。殊に本年度に於ける當協會の活動としては、或は同人を派して現地の思想工作に協力せしめ、或は各地に講演會または座談會を催して新東亞建設の基本思想の闡明に努め、或は特に講習會を催して國民教育に携る人々の間に大亞細亞主義の思想を鼓吹し、或は他の友誼團體に呼びかけて興亞團體聯合會の結成に協力する等、協會の活動も頗る活潑となり來つたのであります。偶々、新支那中央政權樹立の機運の熟すると共に汪兆銘氏等孫文の衣鉢を繼ぐ純正國民黨の人々が、恰も吾人に呼應するが如くに大亞細亞主義を以て支那再建の指導原理となすべきことを表明する所あり、吾人の大亞細亞主義運動も漸く軌道に乗り來つたことを感ぜしめられるのであります。従つて、我が大亞細亞協會の使命も益々重且つ大を加へ來つたものと申さなければなりません。同人互に相督勵して、協會の陣容を強化し、事業を擴大し、更に同愛諸團體との提携連衡を緊密にして名實共に東亞建設の國民運動の主體勢力たるべきを期せねばならぬと思ひます。斯くすることが實に興亞先覺の志を繼承して之を今日

會の對支基本綱領の中にも、大亞細亞主義の思想が盛られておると聞いてをります。かやうに事變解決の思想的方向が大亞細亞主義の外にはないといふことが明かになつて参りました。

事變の勃發に際し、本會の中谷理事は現地の要求に應じて天津に参られました。支那側の有力者と共に大亞細亞主義が事變解決の根本義たる事を新聞を通じて發表せられました。當時出征中の松井大將はこれを新聞切抜きによつて見られ、この活動を喜ばれました。

松井大將の出征中は、松井大將自ら末次大將に會頭として本會を統率されるやうに依頼せられ、末次大將を中心として會務を進めて参りました。當時會内に時局委員會を設けて時局解決の決議案を當路に具申し、同時に全國の各支部にも働きかけ、支部の活動も次第に活潑となつて参りました。

昨年三月、松井大將歸還せられて後は、各地に轉々講演せられ、事變意義の徹底に盡せられ、殆んど席の暖まる暇もない有様でありました。此の間又新支部の結成にも盡力せられました。本年夏季には甲州山中湖畔に於て、盛なる大亞細亞主義道場が開かれ、兼て支部連絡會議が開かれました。席上盛んな論議が戦はされた中に最も私どもを刺戟したのは、この非常時局、

而も大亞細亞主義こそ時局解決の思想的本流たるべき時代にあって、本部は一體何をしてをるか、研究会、講演會位でお茶を濁してゐてそれでよいのか、と云ふ詰責的質問でありました。それによつて、本部のものは大に意を強うすると同時に、安閑としてはをられなくなりました。最近革新諸團體と相携へて、東亞建設の力強い國民運動を展開しようとするに至つたのも實はその爲であります。

ポーランド問題から歐洲戰が始まり獨ソ不可侵條約となり、我が國の内閣更迭となり、世をあげて方途に迷はざるを得なくなつた際、逸早く本會は五ヶ條の時局對處案を立て、之を要路に提出してこれが實現を望みました。その全部はまだ實現には至つてゐませぬが、ある部分はその方針の幾らかが事實となつて現はれて來てをると思ふのであります。

其後興亞委員會が出来まして、本會から松井大將が委員に、中谷理事が常任幹事になられ、また興亞團體聯合會が出来まして、松井大將は顧問に、下中理事は常務理事に、中谷理事は常任幹事となられました。何れも本會の建言が與つて力あつたのではないかと存じてゐます。

世界的大動亂の勃發は、生命的、地域的、亞細亞協同體の結

成を不可避に運命づけてゐます。この傾向に掉して、我が大亞細亞協會は、益々その存在の意義を明確にし、その活動を有効にせねばなりません。各地の支部もまたそれを要求せられ、國民またそれを切望してをる次第であります。最近各地に於ける講演會、座談會が非常な盛況で、殊に神戸大阪の會の如き前古未曾有の活況で、文字通り滿場立錫の餘地なく、場外に數千の大衆があふれ、兩大將の挨拶によつて始めて退散を見たといふやうな有様でありました。これみな本會に對する國民の期待を物語つてをるものであると信じます。

本會の明日の活動は、國外的には支那始め亞細亞の諸地域へ大亞細亞主義思想の普及徹底を計るために人を派するなり、連絡するなりすることであります。國內的には各地に支部を結成すると共に、革新諸勢力と相提携して、その連絡を密にし、この未曾有の時局に最善の活動を盡すことにあると存じます。なほ庶務事項會計事項については、次に西原理事から御報告があります。簡單ながら以上を以て、本會の事業の經過並に本會活動の現狀報告と致します。

大亞細亞協會總會聲明

聖戰ここに二年有半、皇軍百萬大陸の野に轉戦し、一億國民銃後の護りを固むと雖も、事變の解決、新東亞の建設、前途尙ほ甚だ容易ならざるを思はしむるものあり、偶々勃發したる歐洲の動亂は、やがて第二次世界大戰に發展すべき歴史的必然を孕み、これが直接間接東亞の局面に深く相影響し來ることは論を俟たざるところなり、從て支那事變解決の鍵は即ちまた世界史の動向を決定するの鍵たり、東亞新秩序建設の努力は直ちにいかかつて世界新秩序の努力に外ならざるなり。斯くの如くして、我が協會同人の年來唱導し來りたる大亞細亞主義の思想は、單に東亞建設の基本原理解たるに止まず、實にまた世界の新秩序化を推進すべき決定的要素たるを知るなり。恰も此の時に方りて支那新中央政權樹立の機運熟し、孫文の正しき傳統を繼承する後進が、先師の大亞細亞主義を以て支那再建の指導原理となすべきことを宣明するあり、内外の要望今や期せずして大亞細亞主義を以て時局拾收と新秩序建設の基本的動力たらしむることに歸一しつつあるを見るは、吾人の欣快措かざるところなると共に、大亞細亞協會の使命愈々重且つ大を加ふるものあるを自

覺し、同志益々發憤奮勵、陣容を強化し、事業を擴大し、また汎く天下の同憂と提携を緊密にし、以て眞に東亞新秩序建設の國民運動の主體勢力たらんことを期す。
昭和拾四年拾貳月

大亞細亞協會總會

大亞細亞協會規約改正事項

- 第三條ニ次ノ一項ヲ加フ
- 支部ハ當該地名ヲ冠シ某大亞細亞協會ト稱スルコトヲ得
- 第七條 會頭ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ
- 顧問 一名
- 第八條 全文ヲ次ノ通り改正ス
- 會頭ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理ス
- 顧問ハ會頭ニ協力シテ會務ヲ指導シ、必要アル場合會頭ニ代ル
- 副會頭ハ會頭ヲ補佐ス
- 會頭、顧問、副會頭ハ總會ニ於テ之ヲ推舉ス
- 第九條 第三項ニ左ノ一項ヲ加フ

會頭ハ評議員中ヨリ常任評議員若干名ヲ依囑ス
常任評議員ハ本會ノ機務ニ參畫シテ會頭ノ諮問ニ應ス
註「但シ創立當初ニ於テハ發起人會之ヲ推薦ス」ヲ削除ス

役員ハ全部重任ヲ御願シ更ニ左ノ通り推薦ス

顧問 末次信正

新評議員 追加 大谷光瑞

白鳥敏夫

増田次郎

松江春次

稻垣孝照

松尾忠二郎

新理事 追加

今井嘉幸

駒井徳三

加藤辰彌

里屋武夫

新規約ニヨル常任評議員

菊池武夫

建川美次

白鳥敏夫
高木陸郎
鹿子木員信

橋本増吉

根岸信

内藤智秀

太田耕造

今岡十一郎

中山優

牧次郎

西原矩彦

中谷武世

下中彌三郎

理事長

二〇

大亞細亞協會の諸會合

講演會及び講習會

自昭和十一年四月
至昭和十五年三月

昭和十一年度之部

大亞細亞主義運動遊説經過概要

本協會評議員松井石根閣下、同理事下中彌三郎氏は大亞細亞主義運動の爲め五月十八日東京を出發せられ關西、九州の各地に於て懇談會、講演會を開催し同三十日歸京せられた。猶七月二十日金澤市、九月二十九日より東北、北海道各地に於て懇談會講演會を開催した。

各地に於ける大亞細亞主義講演會、懇談會の經過概要は次の如くである。

大阪市講演會並懇談會

五月十九日 清交社の午餐招待會に臨む。百餘名出席、松井評

議員より滿洲、北支、廣東、上海、南京方面の近情に於いて説明あり。終りて、懇談會に移り、松井評議員、矢野評議員、下中理事より當協會の趣旨並びに現狀に就き説明す。夜支那會遊同人會の晚餐招待に臨む。約四十名出席、松井評議員より當協會の趣旨、設立の経緯並びに現狀に就き説明あり、岩井、今井兩氏同會を代表して大阪に大亞細亞協會支部の設立を進捗實現することを提議し之を決議せり。

五月二十日 午後三時清交社に於て懇談會開催、出席者三十餘名、松井評議員より當協會の趣旨に就いて述べ、下中理事よりは協會の事業並に將來の計畫に就て述ぶるところあり、腹藏なき意見を交換し、支部設立に關し一致快諾せられたり。夜七時より朝日講堂に於て講演會開催、由上氏より開會の辭ありたる後下中理事よりは「亞細亞の産業及貿易」と題し、

矢野評議員よりは「大亞細亞主義と日支問題」に就いて、松井評議員よりは「大亞細亞主義運動に就いて」と題して、それら講演あり、十時盛會裡に散會す。

五月二十一日 午後五時、有恒俱樂部の晚餐招待會に出席約四十名參集、松井評議員より協會の趣旨、創立の経緯、將來の抱負に就いて詳細なる説明あり、次いで下中理事より協會の現在並將來に於ける事業に關して述ぶる所あり、種々懇談を交換した。

福岡市講演會並懇談會

五月二十二日 正午、有志諸氏の招待會に臨む、出席者約四十名、星村少將より歓迎の辭ありたる後松井評議員の謝辭並に感想談を披瀝し、歡を交へて散會。午後三時、懇談會開催、松井評議員より協會の趣旨並創立の動機、経緯、將來の抱負等に就いて説明ありたる後、下中理事より協會の事業並に將來の計畫に關して詳述す。西川中將、久世市長より支部の創立案の提出あり、滿場一致の賛同を得、支部創立準備委員としては星村市平、鹿子木理事、柴山兼四郎、里屋武夫の諸氏に依頼する事に決定した。出席者六十餘名。
午後七時、西中洲公會堂に於て講演會開催、鹿子木理事の開

會の挨拶に次いで下中理事より「亞細亞の經濟」と題し、鹿子木理事よりは「皇亞細亞」の演題下に、松井評議員よりは「我等の大亞細亞主義」と題してそれら講演あり、盛會裡に散會せり。

熊本市講演會並懇談會

五月二十三日 午後三時、懇談會開催、松井評議員より協會の趣旨並に創立の動機、経緯、將來の抱負に關する説明あり、次いで下中理事より實施中の事業、將來の計畫等に就いて詳述する所あり。種々意見を交換す。續いて參會者一同の歓迎晚餐會に臨む。臨山縣會議長より支部創立の實現に就き動議の提出あり。滿場一致の賛成を得て、支部創立準備委員の指名は藤岡知事に一任することに決す。
午後七時公會堂に於て講演會開催、三浦少將の開會の挨拶ありて後下中理事よりは「亞細亞の經濟」と題し、松井評議員よりは「列強の情勢と亞細亞民族の躍起」と題する講演あり、聴衆三千餘盛況裡に九時散會。翌二十四日 午前十時半松井評議員は熊本教導學校に於て現役將校に對し、支那の近情に就き講演、午後零時三十分、偕行社に於て谷師團長以下部隊長の會食招待に臨む。

神戸市講演會並懇談會

五月二十六日 正午、神戸商工會議所並に同地日華實業俱樂部の午餐招待會に臨む。
松井評議員より協會の趣旨、創立の動機、將來の抱負に就て説明あり、懇談を交換し、大阪支部結成の際神戸及其の附近の有志は大阪支部と合流協力することに決定す。
午後二時、神戸商工會議所講堂に於て講演會開催、岡崎會頭より開會の辭ありて後、松井評議員より「我等の大亞細亞主義」と題して約一時間半に亘る講演を行つた。

京都市懇談會

五月二十七日 午前十一時より、懇談會開催、大谷光瑞師、稻垣中將、廣瀬少將、矢野博士等十一名出席松井評議員より協會の趣旨、創立の動機、將來の抱負に就いて説明あり、種々意見を交換して散會す。

名古屋市懇談會

五月二十八日 午後二時、懇談會開催、松井評議員より協會の趣旨並創立の動機、経緯、將來の抱負等に就いて説明あり。腹藏なき意見を交換し、岡谷氏より支部創立につき動議の提出あり、滿場の賛意を得、支部結成準備を爲す事に決定、出

席者三十餘名。

金澤市講演會並懇談會

七月二十日 午後三時、金谷館に於て大亞細亞主義運動懇談會開催、牧少將、石川縣經濟部長、金澤市助役等其の他有力者六十餘名出席、松井評議員より當協會の趣旨及び將來の抱負に就て説明、下中理事より協會の事業に就て述ぶる所あり、松倉市會議員より支部創立の動議を提出、協議の結果設立に決定し、準備委員其他は同地滿洲會長久保豊四郎氏一任に決定す。
午後五時半より同館に於ける歓迎會に臨む、出席者前記六十餘名、久保助役の挨拶に對し松井評議員より謝辭あり種々懇談を交して散會した。

同七時より石川縣滿洲會主催北國新聞社、北陸毎日新聞社後接の下に市公會堂に於て大亞細亞主義講演會開催、久保助役開會の辭を述べ、櫻木理事より「亞細亞の更生」と題し、下中理事は「亞細亞の經濟」に就いて松井評議員は「大亞細亞主義に就て」と題し講演す。盛會裡に散會した。

仙臺市懇談會

九月三十日 午後一時、仙臺偕行社に於て懇談會開催、出席者

菊山知事、櫻田控訴院長、田村旅團長、島本參謀長外六十餘名松井評議員より當協會の趣旨並に創立の経緯に就て、西原理事より協會の事業並に將來の計畫に就て説明あり、該運動につき種々意見を交換し、梅津市議長より支部設立に關する動議の提出あり一同賛意を表し、之が結成準備に就ては小野寺縣會議長、中村商工會議所會頭、梅津市會議長協議の上立案することに決し散會した。

札幌市講演會並懇談會

十月十一日 午後三時、札幌市豊平館に於て懇談會開催、出席者荻原遞信局長、岡田拓殖銀行頭取、内山聯隊區司令官、和田法學博士、外約四十名、松井評議員より當協會の趣旨並に創立の経緯に就き、西原理事より協會の事業並に將來の計畫に就き述ぶるところあり、該運動につき種々意見を交換し、岡田信氏座長となり支部結成につき協議したが、後日各方面を網羅せる會合を催し、熟議決定することとした。尙同夜六時半より札幌市公會堂に於て大亞細亞主義講演會を開催、松井評議員より「我等の大亞細亞主義に就て」と題する講演あり、聴衆約千名盛會であつた。

所に市會議長、議員、各専門學校、中等學校長、實業有志等約五十名參集、午後二時より懇談會開催、松井評議員より大亞細亞主義並に支那の現状に就き述ぶるところあり、五時散會した。

大亞細亞協會總會記念大亞細亞主義講演會

大亞細亞主義講演會は總會に引續き十一月十七日午後六時より明治神宮外苑日本青年館に開催、下中理事の挨拶に次いで臺灣大亞細亞協會幹事臺北高商教授佐藤佐氏より「臺灣を基調とせる大亞細亞主義運動に就て」と題し、早大教授本協會理事杉森孝次郎氏よりは「國際現勢と明日」の演題下に滿洲國大使館參事官干靜遠氏は「滿洲建國と大亞細亞主義」に就いて、遠路比律賓大亞細亞協會を代表して出席せられたる比島國立大學教授ピオ・デュラン博士は中谷理事の通譯にて「大亞細亞主義と比律賓」と題し、それ／＼大亞細亞運動に關する熱意を披瀝せられ、多數聴衆者に深き感銘を與へ、松井會頭より挨拶ありて後、滿洲國教育映畫協會より特に本協會講演會の爲めに提

供の映畫「亞細亞の曉」を映寫し、下中理事の閉會の辭ありて午後十一時終了した。

福岡市

大阪、京都、福岡講演會

大阪、京都、福岡の協會各支部では左の如き日程にて講演會を開催することとなり東京本部より前南京總領事須磨彌吉郎氏を講師として派遣「中國の現状と日支の將來」の演題下に巡回講演會を開催した。

京都 二月廿二日 午後四時 於京都商工會議所
 大阪 同 廿三日 正 午 於堂ビル清交社
 福岡 同 廿五日 午 後 於福岡市公會堂

昭和十二年度之部

福岡、大阪、京都、歐州事情講演會

大阪、京都、福岡支部の希望により歐州事情講演會を開催、當協會理事全權公使白鳥敏夫氏は講師として講演に巡回された各地の講演會日程及び概要は次の如くである。

京都市

當協會京都支部に於ては七月十四日午後四時より京都市京都商工會議所に本協會理事全權公使白鳥敏夫氏を迎へて歐羅巴事情講演會を開催、支部理事稻垣中將の開會の挨拶について白鳥公使より最近に於ける歐州の諸事情に就いて講演あり會員一般

當協會福岡支部では七月八日午後五時より福岡市教育會館に當協會理事全權公使白鳥敏夫氏を迎へて歐羅巴事情講演會を開催、支部長西川中將の開會の辭について白鳥公使より歐州外交の裏面史竝に日滿の不可分關係に就き講演され、聴講者一同に深き感銘を與へ講演會を終了。午後七時より新三浦旗亭に於て白鳥公使を中心に支部會員並有志者の懇談會を開催、交驛を盡して午後九時半散會した。

大阪市

當協會大阪支部では七月十三日正午より堂ビル清交社に當協會理事全權公使白鳥敏夫氏を迎へて歐羅巴事情講演會を開催、今井博士の挨拶について白鳥公使より最近に於ける歐州情勢に就いて講演され、會員竝に一般參會者に多大の感銘を與へ盛會であつた。

聴衆に多大の感銘を與へ盛會であつた。

大阪市時局問題講演會

當協會大阪支部主催の時局問題講演會は十月一日午後二時より大阪市堂ビル清交社に於て開催、本部評議員高木陸郎氏並に本部理事下中彌三郎氏より時局に關する講演あり、來會者に多大の感銘を與へ盛會であつた。

京都市時局問題講演會

十月二日午後二時より當協會京都支部主催の下に京都商會議所に於て時局問題講演會を開催、本部評議員高木陸郎、本部理事下中彌三郎の兩氏より「支那事變を中心とする支那の動き」に就いて講演あり午後五時半閉會した。

昭和十三年度之部

福岡市時局講演會

五月二十五日午後四時より福岡市縣公會堂に於て會頭松井石

二六

根大將の當地陸軍病院傷病將兵並に戰歿遺家族慰問の爲め來福せられたるを機會に福岡支部主催の下に時局講演會を開催、聴衆は開會前既に會場外に溢れ外に擴聲機を設備して開會、支部長西川中將の開會の挨拶に次いで、鹿子木博士より「支那事變の本質と其の對策」伊藤公使より「支那事變を繞る國際情勢」に就いて詳述、續いて松井大將起ち銃後の支援を謝し猶一層の後援を懇望したる後時局の重大性と長期戦に對する國民の決意を促がし絶大の感銘を與へて降壇、星村理事の閉會の辭、西川支部長の發聲にて萬歳三唱し午後六時盛會裡に講演會を終了。

京都市時局講演會

五月二十八日午後二時半より京都市商會議所に於て當協會京都支部主催の下に時局講演會を開催、會員並に學界、實業界の有力者等百五十餘名出席、京都支部稻垣孝照中將の開會の挨拶に次いで鹿子木博士より「支那事變の真相とその對策」伊藤述史公使より「現下の國際情勢」に就いて論述、松井大將より挨拶を兼ねて支那事變と大亞細亞主義に就いて講話あり、會員並に一般聴衆に多大の感銘を與へ午後六時終了した。

名古屋支部結成記念講演會

當協會名古屋支部結成記念講演會は松井會頭、白鳥公使、鹿子木員信博士、牧少將を迎へて五月三十日午後七時より名古屋市公會堂に於て開催、會員並に一般聴衆等約三千、宮城遙拜、國歌齊唱、皇軍武運長久祈願、戰歿將士の英靈に默禱を捧げた後、名古屋支部大塚堅之助中將の開會の辭に次いで鹿子木博士より「支那事變の本質と其の對策」白鳥公使より「外交一般」と題してそれ／＼講演、最後に松井大將より挨拶を兼ねて支那事變と大亞細亞主義に就いて講話あり、午後十時散會した。

金澤市對支問題講演會

當協會金澤支部の對支問題講演會は本部派遣の文學博士鹿子木員信氏並に陸軍少將松室孝良閣下を迎へて、六月二十四日午後七時より金澤市高岡町高等小學校講堂に於て開催、星野理事の開會の挨拶に次いで、鹿子木博士は「支那事變の本質と其の對策」松室少將は「支那の動向」の演題の下にそれ／＼論述せられ聴衆に多大の感銘を與へ午後十時盛況裡に閉會した。

京都市對支問題講演會

當協會京都支部の對支問題講演會は十月二十六日午後四時半より京都市京都商會議所に於て開催、京都支部稻垣中將の挨拶に次いで、本部派遣講師陸軍少將松室孝良閣下より「武漢攻略後に於ける情勢の見透と皇國の對策」と題する講演あり會員一般聴衆に多大の感銘を與へて午後六時半閉會した。

南京陥落一周年記念大亞細亞

主義講演會

十二月十三日南京陥落一周年記念日を卜し、支那再建の指導原理の確立を要望せられ居る折柄、協會同人年來の素懐たる大亞細亞主義の理想を江湖に問ふべく、同日午後六時より日比谷公會堂に於て本協會主催のもとに大亞細亞主義大講演會を開催、開會に先立ちて戰歿將士の英靈並に皇軍將士の奮闘に對して一同感謝の默禱を捧げたる後、村川副會頭司會の下に左記の諸氏こも／＼立ちて、支那再建の指標、新東亞建設の大亞細亞主義の理想に就いて獅子吼され無慮三千の聴衆に多大の感銘を與へ最後に松井會頭の發聲にて 天皇陛下の萬歳を奉唱して午

二七

後十時盛會裡に散會した。

- 一、開會の辭 村川 堅 固
- 一、回教民族の動きと大亞細亞主義 今岡 十一郎
- 一、支那再建の方向と東亞聯邦の構想 中谷 武 世
- 一、新東亞の經濟建設 下中 彌三郎
- 一、無 題 松 室 孝 良
- 一、大亞細亞主義と國內改造 建 川 美 次
- 一、支那事變の意義と大亞細亞主義 松 井 石 根
- 一、閉會の辭 西 原 矩 彦

京都市大亞細亞主義講演會

京都市大亞細亞主義講演會は大亞細亞協會會頭松井石根閣下、同協會理事今岡十一郎氏を迎へて、十一月二十五日午後四時より京都ホテルに於て開催、會員七十餘名出席、京都支部稻垣中將の開會の辭に次いで今岡理事より「ツラン回教徒問題と大亞細亞主義」の演題の下に回教問題の重要性を説かれ松井會頭より「一時局所感」と題して挨拶に代へて時局に對する所懐を披瀝せられ多大の感銘を與へて講演會を終了した。

十一月二十六日午後六時半より中の島中央公會堂に會頭松井石根閣下、評議員芳澤謙吉氏並に理事今岡十一郎氏を迎へて大阪支部主催のもとに大亞細亞主義講演會を開催、山上理事司會の下に、武田博士「支那の經濟建設」今岡理事「ツラン回教徒問題と大亞細亞主義」芳澤元外相「國際的時局感」松井會頭「支那事變の意義と大亞細亞主義」の演題下にそれ／＼大亞細亞主義の理想を披瀝され満堂二千有餘の聴衆に多大の感銘を與へ、午後十時散會した。

大阪市大亞細亞主義講演會

名古屋市時局大講演會

當協會名古屋支部主催の時局大講演會は一月二十日午後六時より、陸軍大將小磯國昭閣下、會頭代理協會理事西原少將並に協會理事下中彌三郎氏を迎へて名古屋市公會堂に於て開催、名古屋支部櫻木幹事の開會の挨拶に次いで西原理事より「支那事變の意義と大亞細亞主義」下中理事より「長期建設經濟體制」と題し最後に小磯大將起つて「日本精神に生きよ」の演題の下にそれ／＼獅子吼され満堂二千七百の聴衆に多大の感銘を與へ

て午後十時盛會裡に散會した。

昭和十四年度之部

大亞細亞主義夏季講習會

當協會主催大亞細亞主義夏季講習會を八月九日より十五日迄一週間富士山麓山中湖畔旭ヶ丘こなや旅館に於て開催、講習會第一日(九日)正午受講者一同参集、午後二時より松井會頭、村川副會頭、建川評議員、中谷、西原、牧各理事臨席のもとに開講式を舉行、一同宮城遙拜、國歌齊唱、皇軍將士に感謝の黙禱を捧げたる後、村川副會頭の開講の辭に次いで受講者を代表して静岡縣藤枝女學校長小倉隆藏氏の答辭、牧理事より一般指導に講習會中の諸事項に關して訓示あり開講式終了後、松井會頭の特別講演ありて第一日を終り第二日(十日)より第七日迄毎日午前五時起床、山中湖畔に集合、一同水浴を行ないたる後、宮城遙拜、體操等團體訓練を行ひ午前六時半朝食、午前八時より各講師のそれ／＼専門的見地よりする講演を左記日程の如くに行ひ第七日(十五日)午前十一時閉講式を舉行、受講者

一同に紀念として松井會頭揮毫の色紙一葉宛贈りたる後、村川副會頭の閉講の辭について、天皇陛下の萬歳を三唱し奉り意義深き一週間の講習を終了した。

- 第一日(午後二時開講式)
 - 今次事變と大亞細亞主義 松井 石 根
 - (夜) 座 談 會 建 川 美 次
- 第二日(午前)
 - 世界史の轉換と大亞細亞主義 村 川 堅 固
 - 大亞細亞主義の基本的認識 中 谷 武 世
 - (夜) 座 談 會 牧 次 郎
- 第三日(午前)
 - 大亞細亞主義と東亞聯邦の構想 中 谷 武 世
 - 世界史の轉換と大亞細亞主義(二) 村 川 堅 固
 - (午後) 現代支那語概論 秋 山 昱 禧
 - 國際情勢と我が國防 末 次 信 正
- 第四日(午前)
 - 東亞新秩序の建設と三民主義の検討 鹿 子 木 員 信
 - ツラン民族と大亞細亞主義 今 岡 十 一 郎
 - (午後)

天津事件並ノモンハン事件に就いて 松村 中 佐
最近に於ける國際政局の動向 林外務事務官
(夜) 座談會 高木 陸 郎

第五日(午前)

教育の使命と大亞細亞主義 今村 完 道
東亞新秩序の建設と三民主義の檢討(一) 鹿子木員信

(午後)

支那に於ける世界紅十字會に就いて 松 井 七 夫
新東亞建設の諸工作に就いて 眞方興亞院調査官
(夜) 座談會 松 井 石 根

第六日(午前)

回教問題と大亞細亞主義 松 室 孝 良
大亞細亞主義と經濟國策 下 中 彌 三 郎
(午後) 緬甸の現状の就いて 國 分 正 三
對支問題と大亞細亞主義 中 山 優

第七日(午前)

海南島の現状と大亞細亞主義 佐 藤 佐
閉講式

講習會受講者氏名

東京市	宇井利一	東 岩 美	高橋作榮
	若林勤治	國分正衛	山里昌英
	高垣國松	矢 島 豪	飯沼莊一郎
	岩崎良能	瀧口高司	關口健次
	岩壁三郎	津村卓郎	
横濱市	長山總一郎	佐 野 孝	桐ヶ谷政次
静岡縣	山内彦太郎	白井安彦	北島忠平
	皆見錄次	小花藤平	近藤好雄
	大 橋 清	小倉隆藏	小野高德
	飯塚謙三	清水治兵衛	杉 本 茂
埼玉縣	村田茂市	吉田久平	
山梨縣	丸茂胤晴	林 芳 雄	窪澤貞次
	古谷三郎	望月久三	志村重光
	堀口 守	有 賀 茂	志村幸雄
金澤市	井上文藏	岩井隆盛	
名古屋市	志良以 環	渡邊一夫	服部左馬吉
	神山重三		
大阪市	水上義光		
	前田三四郎	山口敏夫	前川晃一
	高尾國男	毛利徳太郎	白須賀雅司
福岡市	下地玄信		
鳥取縣	平賀衛太郎	西 田 廣	里屋武夫
	三上 慎 博	松川 勝 喜	種 佐 二 一

神戸市 中野 藤 作 法橋廣三郎 岡田重義
 榊田吉兵衛 平田角右衛門 中村秀吉
 長濱 禮 藏 木村 政 雄
 廣島縣 青山源七郎 岡田義勇
 朝鮮 早崎 悟 郎

神戸市興亞大講演會

大亞細亞協會神戸支部にては四月十八日午後五時より神戸市海員俱樂部に於て、本協會々頭松井石根大將並に協會常任理事中谷武世氏の歓迎晚餐會を開催、神戸支部松尾理事の歓迎の挨拶ありて後松井會頭より謝辭あり、種々懇談を交して午後六時四十分散會、續いて午後七時より同市海員會館に於て神戸支部主催、兵庫縣、神戸市、同商工會議所、神戸新聞社、大毎社支局後援のもとに興亞大講演會を開催、參集者約五千、神戸市未曾有の大會衆にて、會場に入り得ざる聽衆約一千場外に溢るる盛況にて之がためにマイクホンの設備をなし、一同起立國歌齊唱、皇軍將士に感謝の默禱を捧げたる後、松尾常務理事開會の辭を述べ次いで神戸支部常務理事今井博士は「日本を軸として舞臺は廻る」と題して防共日本の躍進を讃へ、次いで協理理事中谷法大教授は「支那事變と大亞細亞主義」と題して熱辯を

揮ひ、最後に會頭松井大將登壇「時局に對する國民の覺悟」の題下に熱情あふるる論辯を揮はれ、聽衆に一大感銘を與へて大拍手裡に降壇、松井大將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り松尾理事の閉會の挨拶ありて盛會裡に散會した。

小倉市大亞細亞主義講演會

神戸支部主催の興亞大講演會に臨席された松井大將は、翌十九日夜下關市山陽ホテルに一泊、翌二十日午前八時半より掘鑿本部鐵道省改良事務所長の案内にて關門海底トンネルを視察、午前十一時五十九分小倉市着、同市々長島中將の歓迎を受けて午後一時半市公會堂に於て同地今次事變戰病死者遺族を弔問されし後、松井大將並に協理理事佐藤安之助少將、同理事下中彌三郎氏を迎へて同所に有志懇談會を開催、島中將の挨拶に次いで、松井大將、佐藤少將、下中理事より支那問題、事變經濟等と關連してそれ々々大亞細亞協會の趣旨に就いて述べられ、參會者一同に今後嚮ふべき新なる認識と指標を與へ、續いて松井大將、佐藤少將、下中理事は午後七時より同市米町小學校に於て大亞細亞協會小倉支部準備會主催の時局講演會に臨まれ、時局下當面の諸問題につきそれ々々論述され八百餘名の聽衆に多大

の感銘を與へ最後に松井大將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り盛會裡に散會した。

福岡市時局講演會

大亞細亞協會福岡支部では四月二十一日午後一時半より、本協會々頭松井石根大將並に協會理事佐藤安之助少將、同理事平凡社長下中彌三郎氏を迎へて、同市縣公會堂に於て福岡支部主催の下に時局講演會を開催、一同起立皇軍將士に感謝の黙禱を捧げたる後、支部長西川中將の開會の辭に次いで松井會頭より「時局に對する國民の覺悟」佐藤少將より「支那問題について」九大學生主事前田稔靖氏より「比律賓問題と東亞新秩序體制」下中理事より「事變經濟の新動向」の演題下にこれら論辯を揮はれ、滿堂の聽衆に多大の感銘を與へ 聖壽萬歳を奉唱して盛會裡に散會した。猶松井會頭は同夜下關市長の歡迎會に臨まれ午後八時三十分下關發特急富士にて歸京された。

京都支部春季講演會

大亞細亞協會京都支部では五月三日午後三時より京都商工會議所に協會本部會頭松井石根大將並に陸軍省情報部長谷川宇一

後十時盛會裡に散會した。

神戸市時局大講演會

當協會神戸支部主催の時局大講演會は十一月十二日午後七時より同市海員會館に會頭松井石根閣下、評議員末次信正閣下、理事下中彌三郎氏を迎へて開催、鹽見主事司會の下に皇居遙拜皇軍將士の武運長久祈願の黙禱を捧げたる後、進藤理事の開會の辭に次いで下中理事より「大陸經濟建設に就いて」末次大將より「世界的動亂と皇國の使命」松井大將より「時局所感」の演題下にこれら講演、會員一般聽衆參千餘名に非常な感銘を與へ最後に末次大將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り盛況裡に午後十時散會した。

大阪市大亞細亞主義大講演會

當協會大阪支部では十一月十三日午後五時より大阪市大手前軍人會館に會頭松井石根閣下、評議員末次信正閣下、理事下中彌三郎氏理事中谷武世氏を迎へて大阪支部主催の下に大亞細亞主義大講演會を開催、白衣の勇士七百五十餘名を交へて會員一般聽衆五千餘名今井理事司會の下に一同起立皇居遙拜、皇軍將士に感謝の黙禱を捧げたる後支部理事中山太一氏の「興亞日本

少佐を迎へて支部主催のもとに春季講演會を開催、一同起立東方遙拜、黙禱を捧げたる後、支部長稻垣中將の開會の挨拶に次いで長谷川少佐より「今次事變の意義—世界史的に觀たる—」と題して熱辯を振はれ、松井會頭より「時局に對する國民の覺悟」の題下に熱誠溢る講演あり、支部會員及一般參會者二百有餘名に多大の感銘を與へ午後五時半講演會を終了した。

金澤市時局大講演會

大亞細亞協會金澤支部では五月四日午後四時一分金澤驛に協會本部陸軍大將松井石根閣下並に陸軍省情報部々員陸軍砲兵少佐長谷川宇一氏を迎へて午後七時より同市公會堂に於て金澤支部主催、第九師團、縣、市後援の下に時局大講演會を開催、常岡師團長はじめ幕僚、縣市吏員、衛戍各部隊將兵に一般聽衆を合して三千有餘名、全員起立東方遙拜、戰歿將士に黙禱を捧げたる後、支部長横山隆良男の開會の辭に次いで金澤醫大教授岡本規矩男博士は「ドイツ民族に就いて」長谷川少佐は「今次事變の意義」と題してこれら熱辯を揮はれ、最後に松井大將登壇「時局に對する國民の覺悟」の演題下に現下の歐洲情勢より説き起し滿堂に異常の緊張を漂はせ一大感銘を與へて降壇、午

の責務」と題して講演あり次いで松井大將より挨拶を兼ねて時局に對する所感を述べられ、次に中谷理事より「東亞新秩序と大亞細亞主義」下中理事より「大陸經濟建設に就いて」最後に末次大將登壇「世界的動亂と皇國の使命」の題下に世界動亂に處する我が國の立場を闡明され滿場の聽衆に多大の感銘を與へ、天皇陛下の萬歳を奉唱して大盛會裡に午後十時散會した。

大亞細亞協會總會記念

「世界動亂と大亞細亞主義」講演會

十二月十三日午後六時より日比谷公會堂に大亞細亞協會昭和十四年度總會記念講演會を「世界動亂と大亞細亞主義」の標幟の下に開催、一般聽衆約二千最後迄謹聽多大の成果を收めた。當日の講師並びに演題は左の如くである。

- | | | |
|-----------------|-------------|------|
| 開會 | 司會者 | 中谷理事 |
| 東亞の明日と孫文の大亞細亞主義 | 今井理事 | |
| 世界動亂の史的考察 | 村川副會頭 | |
| 東亞經濟建設の諸問題 | 下中理事長 | |
| 挨拶 | 松井會頭(牧理事代讀) | |
| 世界的動亂と皇國の使命 | 末次顧問 | |
| 閉會 | 中谷理事 | |
| 聖壽萬歳 | 奉唱 | |

懇談會及び歡送迎會

自昭和十一年四月
至昭和十五年三月

昭和十一年度之部

川越大使、桑木、近藤少將 笠原、秦大佐歡送迎會

(六月十三日 於大阪ビル)

駐支大使川越茂閣下並びに最近榮轉せられたる參謀本部第一部長桑木崇明少將閣下、軍令部第一部長近藤信竹少將閣下、參謀本部第四課長笠原幸雄大佐、陸軍省新聞班長秦彦三郎大佐の歡送迎會を六月十三日午後五時大阪ビルに於て開催、松井評議員より歡送迎の挨拶ありたる後、川越大使より謝辭並び感想の披露あり、次いで川本少佐、吉野少佐より最近の西南事情に關し、犬塚理事よりは支那の經濟問題に就き説明あり、種々懇談を交換して九時半散會した。當日の出席者左の如し。

川越茂、桑木崇明、近藤信竹、笠原幸雄、秦彦三郎、松井石根、菊池武夫、村川堅固、栗原正、小野寺長治郎、内藤智秀、杉森孝次郎

南雲少將歡送迎懇談會

(六月十七日 於九段軍人會館)

聯合艦隊入港中を機とし、第一水雷戰隊司令官南雲少將閣下の歡送迎懇談會を六月十七日午後五時九段軍人會館に於て開催、松井評議員より歡送慰勞の挨拶ありたる後、南雲閣下より謝辭あり、種々懇談を交へて九時散會した。當日の出席者左の如し。

南雲忠一、松井石根、菊池武夫、小野寺長治郎、内藤智秀、前田稔、犬塚惟重、今岡十一郎、加來止男、大石保、小野田捨次郎、西原矩彦、下中彌三郎

比律賓P・デュラン博士歡送迎會

(六月二十五日 於京橋中央亭)

比律賓國立大學教授ピオ・デュラン博士の歡送迎會を六月二十

秀、橋本増吉、前田稔、犬塚惟重、今岡十一郎、今牧嘉雄、日高震作、江口穂積、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦

建川中將慰勞今田少佐歡送迎會

(九月七日 於京橋中央亭)

今回豫備役となられたる建川美次中將閣下の慰勞の意味と滿洲國軍政顧問より參謀本部に榮轉せられたる今田新太郎少佐の歡送を兼ねて同人懇談會を九月七日午後五時半より京橋中央亭に於て開催、松井評議員より挨拶ありたる後、建川閣下、今田少佐よりは滿洲國に於ける民族問題につき講話あり種々懇談を交へて九時散會した。當日の出席者左の如し。

建川美次、今田新太郎、松井石根、菊池武夫、村川堅固、高木陸郎、栗原正、内藤智秀、杉森孝次郎、橋本増吉、山下知彦、犬塚惟重、今岡十一郎、今牧嘉雄、加來止男、福島喜三、岸井壽郎、太田耕造、西原矩彦、下中彌三郎、中谷武世

加來、中瀬中佐、大石 守屋少佐歡送迎會

(十一月二十四日 於大阪ビル)

今期海軍異動にて大湊航空隊に榮轉の當協會理事加來止男中

五日午後六時より京橋中央亭に於て開催、松井評議員より歡送迎の挨拶ありたる後、ピオ・デュラン博士より謝辭並に感想談あり、種々懇談を交換して十時散會した。

當日の出席者左の如し。

P・デュラン博士、バグワン、松井石根、橋本増吉、犬塚惟重、今岡十一郎、岸井壽郎、角岡知良、今牧嘉雄、福島喜三、加來止男、井上靖、佐藤安之助、西田卯八、中原謹司、里屋武夫、下中彌三郎、西原矩彦

高木評議員中谷幹事歡送迎會

(八月六日 於鮫洲川崎屋)

支那視察旅行より歸朝せられたる當協會評議員高木陸郎氏並びに北支に於ける近情の視察及び天津に於ける中國大亞細亞協會との連絡を終へ歸朝せられたる常任幹事の中谷武世氏の歡送の意を兼ねて同人懇談會を八月六日午後五時半より鮫洲川崎屋に於て開催、松井評議員より歡送の挨拶ありたる後、高木評議員より最近の支那情勢につき、中谷幹事より北支事情並びに中國大亞細亞協會の近況につき説明あり、種々懇談を交へて十時散會した。當日の出席者左の如し。

高木陸郎、中谷武世、松井石根、村川堅固、小野寺長治郎、内藤智

佐横須賀鎮守府に榮轉の大石保少佐の送別と蘇聯駐在武官より軍令部に榮轉せられたる中瀬浜中佐、暹羅國駐在武官より陸軍大學校兵學教官に榮轉の守屋精爾少佐及目下上京中の青島商工會議所理事松崎雄二郎氏の歡送迎會を十一月二十四日午後六時より大阪ビルに於て開催、松井會頭の歡送迎の挨拶に對し加來中佐より謝辭あり、次いで松崎氏より北支近情に就き、守屋少佐より最近の暹羅事情、中瀬中佐より蘇聯の内容に關しそれぞれ説明あり、種々懇談を交して十時散會した。當日の出席者左の如し。

- 加來止男、中瀬沂、大石保、守屋精爾、松崎雄二郎、松井石根、菊池武夫、高木陸郎、内藤智秀、前田稔、犬塚惟重、中山優、今岡十一郎、山口和一、西原矩彦、下中彌三郎、中谷武世

長、小野田中佐、杉森理事送別會

(十二月五日 於大阪ビル)

支那漢口駐在武官として轉出されたる本協合理事長中佐並に日比交換教授として渡比される理事杉森孝次郎氏、軍令部より第十二戰隊參謀に榮轉の會員小野田中佐の送別の意を兼ねて懇談會を十二月五日正午より大阪ビルに於て開催、松井會頭より三氏送別の挨拶ありて後、それら謝辭あり、種々懇談を交

へて三時散會した。當日の出席者左の如し。

- 杉森孝次郎、長勇、小野田捨次郎、松井石根、村川堅固、高木陸郎、犬塚惟重、今岡十一郎、淺野甚七、菅忠三郎、下中彌三郎、太田耕造、西原矩彦、中谷武世

同人忘年懇談會

(十二月二十四日 於銀座延壽春)

同人忘年懇談會を十二月二十四日午後五時半より銀座延壽春に於て開催、當日の出席者左の如し。

- 松井石根、村川堅固、矢野仁一、建川美次、小林省三郎、小野寺長治郎、高木陸郎、犬塚惟重、石川信吾、馬奈木敬信、今岡新太郎、太田耕造、西原矩彦、中谷武世

高木評議員、白鳥、栗原公使

(三月十五日 於京橋中央亭)

最近ルーマニア公使として赴任される當協合理事栗原正氏並にスエーデンより歸朝中の白鳥公使、支那視察より歸京の評議員高木陸郎氏、久留米輜重隊より陸軍省へ榮轉の理事柴山兼四郎大佐、支那視察より歸朝の佐藤安之助氏の歡送迎の意を兼ねて

同人懇談會を三月十五日午後五時京橋中央亭に於て開催、松井會頭より挨拶ありて後、白鳥、栗原兩公使並柴山大佐より謝辭挨拶あり、佐藤氏よりは支那旅行の感想談ありて、支那問題其他に關し隔意なき意見の交換をなし九時半散會した。當日の出席者左の如し。

- 白鳥敏夫、栗原正、高木陸郎、佐藤安之助、柴山兼四郎、松井石根、末次信正、村川堅固、内藤智秀、根岸信、橋本増吉、今岡十一郎、前田稔、犬塚惟重、今牧嘉雄、守屋精爾、福島喜三、稻原勝治、岩田愛之助、山口和一、太田耕造、中原謹司、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

昭和十二年度之部

杉森、半田理事歡迎懇談會

(四月十二日 於京橋中央亭)

曩に交換教授として渡比されたる杉森教授の歸朝並びに滿洲國より大同學院滿人學生を引率來朝されたる半田教授を迎へて四月十二日午後六時より京橋中央亭に於て歡迎懇談會を開催、村川副會頭の歡迎の挨拶ありたる後杉森教授より謝辭あり、次

いで半田教授より最近の滿洲國事情に就いて、杉森教授よりは比律賓、羅運の近情についてそれら講話あり、種々意見を交換して十時散會した。當日の出席者左の如し。

- 杉森孝次郎、半田敏治、松井石根、村川堅固、内藤智秀、今岡十一郎、中山優、鈴木宗作、于長運、岩田愛之助、山口和一、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

比律賓ラウレル博士歡迎會

(四月十九日 於京橋中央亭)

比律賓國立大學校教授、前比島内務長官ラウレル博士の來朝を機とし歡迎の意を兼ねて同人懇談會を四月十九日午後六時京橋中央亭に開催、松井會頭の歡迎の挨拶に對しラウレル博士より謝辭あり、種々懇談を交へて九時散會した。出席者左の如し

- ラウレル博士、松井石根、白鳥敏夫、鹿子木員信、佐藤安之助、酒井武雄、半田敏治、今岡十一郎、西田卯八、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

樋口大佐送別會

(五月十三日 於日比谷陶々亭)

當協合理事樋口季一郎大佐は今回歐洲へ視察旅行をさるゝこ

ととなり五月十三日午後六時日比谷陶々亭に於て送別懇談會を
開催した。出席者左の如し。

樋口季一郎、松井石根、高木陸郎、馬奈木敬信、中原謹司、下中彌
三郎、西原矩彦、中谷武世

河相情報部長歓迎會

(五月二十五日 於日比谷陶々亭)

上海總領事より外務省情報部長に榮轉されたる河相達夫氏の
歓迎を兼ねて同人懇談會を五月二十五日午後六時日比谷陶々亭
に於て開催、松井會頭より歓迎の挨拶あり、これに對し河相情
報部長より謝辭並に挨拶あり、種々懇談を交へて九時散會し
た。當日の出席者左の如し。

河相達夫、松井石根、菊池武夫、内藤智秀、根岸信、橋本増吉、佐
藤安之助、中山優、今岡十一郎、田代重徳、鈴木宗作、中瀬沂、稻
原勝治、今牧嘉雄、秋山昱禧、許丙、太田耕造、下中彌三郎、西原
矩彦、中谷武世

同人歡迎懇談會

(六月十六日 於京橋中央亭)

曩に滿洲支那方面を視察歸朝せられたる末次大將、阿部大將

小野寺主計總監、白鳥公使、天羽公使及び來朝中の川越支那大
使、松岡滿鐵總裁、入港中の聯合艦隊第一水雷戰隊司令官南雲
少將、知床艦長石川大佐並び比島大亞細亞協會々長望月普五郎
氏等の歓迎の意を兼ねて同人懇談會を六月十六日午後六時京橋
中央亭に於て開催、松井會頭より歓迎の挨拶ありて後、川越大
使より謝辭並挨拶あり、末次大將、白鳥公使、阿部大將、天羽
公使、小野寺總監の諸氏より視察談及び感想の披瀝あり、望月
普五郎氏より比島大亞細亞協會の實情につきそれ〴〵講話あ
り、種々懇談を交へて十時散會した。當日の出席者左の如し。

末次信正、阿部信行、川越茂、松岡洋右、小野寺長治郎、白鳥敏夫
天羽英二、南雲忠一、石川信吾、望月普五郎、松井石根、菊池武夫
建川美次、小林省三郎、佐藤清勝、松井七夫、橋本増吉、佐藤安之
助、橋本欣五郎、秦彦三郎、鈴木宗作、前田稔、犬塚惟重、今岡十
一郎、中山優、稻原勝治、井上靖、大石堅志郎、田代重徳、今牧嘉
雄、村田孜郎、山口和一、今村忠助、太田耕造、下中彌三郎、西原
矩彦、中谷武世

比島M・フアロラン氏歓迎會

(六月三十日 於丸ノ内會館)

比律賓大亞細亞協會顧問、比島ヘラルド紙主筆モデスト・フ

アロラン氏の歓迎の意を兼ねて六月三十日正午丸ノ内會館に於
て午餐會を催す。出席者左の如し。

モデスト・フアロラン、松井石根、佐藤安之助、犬塚惟重、稻原勝
治、江ノ澤恒、中谷武世

同人慰勞晚餐會

(七月二十一日 於品川洲崎館)

同人慰勞晚餐會を七月二十一日午後六時より品川洲崎館に於
て開催、食事を俱にし懇談を交へて九時散會した。出席者左の
如し。

松井石根、高木陸郎、建川美次、根岸信、依田四郎、佐藤安之助、
犬塚惟重、神尾茂、山口和一、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦

同人懇談會

(八月十八日 於品川洲崎館)

同人懇談會を八月十八日午後六時より品川洲崎館に於て開
催、出席者左の如し。

松井石根、加藤敬三郎、小野寺長治郎、高木陸郎、白鳥敏夫、建川
美次、小林省三郎、松井七夫、飯村穰、鹿子木員信、佐藤安之助、
牧次郎、橋本欣五郎、鈴木宗作、前田稔、犬塚惟重、中山優、櫻木
俊一、秋山昱禧、今牧嘉雄、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦

中谷理事歓迎懇談會

(九月二十七日 於大阪ビル)

曩に支那事變勃發と同時に渡支二箇月に亘りて北支方面の事

約一箇月に亘り中支北支を視察して歸朝されたる當協會評議
員高木陸郎氏並に陸軍大學へ榮轉されたる理事飯村穰少將、寄
港中の會員小野田海軍中佐の歓迎の意を兼ねて同人懇談會を七
月二十日午後六時より大阪ビルに於て開催、松井會頭より歓迎
の挨拶ありて後、高木評議員より謝辭並に北支事變直前の支那
事情に關する講話あり、種々質疑應答、懇談を交へて十時過ぎ
散會した。

高木陸郎、飯村穰、小野田捨次郎、松井石根、村川堅固、菊池武夫
建川美次、佐藤安之助、根岸信、内藤智秀、橋本増吉、犬塚惟重、
今岡十一郎、稻原勝次、今牧嘉雄、岩田愛之助、山口和一、中原謹
司、佐藤伊兵、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦

情を視察、歸朝せられたる當協會常任理事中谷武世氏の歡迎の意を兼ねて懇談會を九月二十七日午後六時大阪ビルに於て開催、末次大將より歡迎の挨拶ありて後、中谷理事より現地報告感想及び今後のこれに處す可き諸工作に對する方針に就き詳細なる意見の披瀝あり次いで參謀本部影佐大佐よりは戰況について説明あり、種々質疑應答、懇談を交へて九時散會した。當日の出席者左の如し。

中谷武世、影佐禎昭、末次信正、村川堅固、芳澤謙吉、菊池武夫、建川美次、白鳥敏夫、小野寺長治郎、佐藤安之助、内藤智秀、今岡十一郎、前田稔、犬塚惟重、今牧嘉雄、太田耕造、山口和一、下中彌三郎、西原矩彦

末次大將内閣參議就任祝賀會

(十一月一日 於日比谷陶々亭)

今回豫備役となられ内閣參議に就任されたる末次信正大將閣下の慰勞並に祝賀の意を兼ねて同人懇談會を十一月一日午後五時より日比谷陶々亭に於て開催、下中理事より挨拶ありたる後末次閣下より謝辭並に今次事變に關する所見の披瀝あり、加藤評議員、白鳥公使、芳澤評議員、杉森早大教授、建川評議員、小林評議員、下中理事の諸氏より九國條約、對英問題等に就き

それ〴〵所見を述べられ、種々懇談を交へて九時散會した。當日の出席者左の如し。

末次信正、村川堅固、芳澤謙吉、菊池武夫、建川美次、小林省三郎、白鳥敏夫、加藤敬三郎、高木陸郎、小野寺長治郎、松井七夫、佐藤安之助、鹿子木員信、根岸信、内藤智秀、橋本增吉、今岡十一郎、杉森孝次郎、山下知彦、犬塚惟重、今牧嘉雄、秋山昱禧、岸井壽郎、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

鹿子木理事送別懇談會

(二月七日 於日比谷陶々亭)

今回北支〇〇軍司令部付として赴任さるゝ事となつた當協會理事鹿子木員信博士の送別の意を兼ねて一月七日午後五時半より日比谷陶々亭に於て同人懇談會を開催、菊池評議員より送別の挨拶ありて後鹿子木理事の謝辭あり、次いで菊池評議員より過般時局委員會の決定に基き近衛首相に決議文手交懇談されたる経過の報告あり、更に中谷理事より協會同人上海總領事館付書記官たる清水董三氏より時局に關して寄せられたる書翰の紹介あり、種々懇談を重ねて九時散會した。

鹿子木員信、村川堅固、菊池武夫、小林省三郎、高木陸郎、内藤智

秀、中山優、今岡十一郎、櫻木俊一、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

松井大將外歸還同人歡迎、末次大將内相就任祝賀會

(三月八日 於日比谷陶々亭)

三月八日午後六時より日比谷陶々亭に於て松井大將歸還の歡迎を機會に同じく支那事變に出勤して歸還せられたる横須賀水雷學校長南雲少將、艦政本部末澤中佐、軍令部小野田中佐、松井大將副官角少佐、軍令部江口少佐の歡迎及び末次評議員の内務大臣就任と加藤評議員の貴族院議員就任の祝賀の意を兼ねて同人懇談會を開催、菊池評議員より挨拶ありて食事を共にしたる後、松井大將より謝辭並に出征中の感想を述べられ、末次閣下より支那事變と國策問題に就いて個人的立場より感想を述べられ、次いで建川中將、下中理事等よりそれぞれ感想を披瀝され、種々懇談を交して九時半散會した。當日の出席者左の如し。

松井石根、末次信正、加藤敬三郎、南雲忠一、横山正衛、末澤慶政、小野田捨次郎、角良勝、江口穗積、村川堅固、菊池武夫、佐藤清勝、建川美次、高木陸郎、内藤智秀、根岸信、橋本增吉、中山優、今岡十一郎、柴山兼四郎、影佐禎昭、鈴木宗作、今田新太郎、今牧嘉雄

秋山昱禧、稻原勝治、岸井壽郎、櫻木俊一、由上治三郎、宇治田直義、山口和一、中原謙司、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

北京新民學院學生視察團歡迎會

(三月二十二日 於上野精養軒)

三月二十二日午後六時より上野精養軒に於て日本内地視察の爲來朝の北京新民學院學生視察團一行の歡迎會を對滿支關係諸團體共同主催の下に開催し、本協會より村川副會頭、内藤、橋本、今岡、中山、下中、中谷の各理事が出席した。

昭和十三年度之部

同人歡迎懇談會

(四月二十八日 於虎ノ門霞山會館)

四月二十八日午後六時より虎ノ門霞山會館に於て、最近北支中支を視察し歸朝せられた松井中將、白鳥公使、佐藤少將、犬塚大佐、下中理事並びに支那事變に出征歸還せられたる牧少將の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井大將の挨拶に次い

で、櫻木理事より名古屋支部設立の経過報告ありて一同食事を共にしたる後、白鳥公使、佐藤少將、犬塚大佐、江藤豊三氏、下中理事よりそれ／＼對支問題、視察談等披瀝され、更に時局問題に就いて種々懇談、午後十時散會した。當日の出席者左の如し。

松井七夫、白鳥敏夫、佐藤安之助、牧次郎、犬塚惟重、下中彌三郎、松井石根、村川堅固、芳澤謙吉、加藤敬三郎、佐藤清勝、小野寺長治郎、建川美次、小林省三郎、高木陸郎、内藤智秀、根岸信、橋本增吉、今岡十一郎、杉森孝次郎、小野田捨次郎、江口種積、今牧嘉雄、稻原勝治、秋山昱禧、西田卯八、櫻木俊一、江藤豊二、神尾茂由上治三郎、宇治田直義、中原謹司、太田耕造、西原矩彦、中谷武世

鹿子木理事歡迎會

(五月十三日 於水交社)

五月十三日午後六時より水交社に於て最近北支より歸還されたる當協會理事鹿子木員信博士の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井大將の挨拶、鹿子木博士の謝辭あり、別室に於て東洋映畫協會製作映畫「日本人よ日本を識れ」の試寫を觀賞、次いで鹿子木博士より北支の近情に就いて講話ありて後、支那問題に對し種々懇談を交し午後十一時散會した。當日の出席者

左の如し。

鹿子木員信、松井石根、村川堅固、小林省三郎、加藤敬三郎、十河信二、白鳥敏夫、佐藤安之助、牧次郎、根岸信、今岡十一郎、犬塚惟重、中瀬沂、小野田捨次郎、江口種積、今牧嘉雄、稻原勝治、神尾茂、中原謹司、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

松井會頭内閣參議就任祝賀會

(七月二十七日 於鮫洲川崎屋)

七月二十七日午後六時より品川鮫洲川崎屋に於て、内閣參議に就任された會頭松井大將の祝賀と今期の陸軍異動により中央部の某要職に榮轉された當協會理事樋口季一郎少將の歡迎並に最近某地に轉出さるることになつた當協會理事柴山兼四郎大佐の送別の意を兼ねて同人懇談會を開催、菊池評議員の挨拶、松井大將、樋口少將、柴山大佐より夫々謝辭あり、種々懇談を交はして午後九時半散會した。當日の出席者左の如し。

松井石根、樋口季一郎、柴山兼四郎、末次信正、村川堅固、菊池武夫、小野寺長治郎、松井七夫、高木陸郎、伊藤達史、佐藤安之助、鹿子木員信、松室孝良、内藤智秀、根岸信、橋本增吉、今岡十一郎、犬塚惟重、日野水忠作、秋山昱禧、今牧嘉雄、中原謹司、稻原勝治、高田郷徳、多田武郎、宇治田直義、太田耕造、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

佐藤理事歡迎午餐會

(八月十六日 於大阪ビル)

最近中北支の視察旅行を終へて上京された當協會理事臺北高商教授佐藤佐氏の歡迎午餐會を八月十六日正午大阪ビル、レインボーグビルに於て開催、松井石根、高木陸郎、鹿子木員信、牧次郎、西原矩彦、中谷武世の諸氏出席、種々懇談を交して午後一時半散會した。

半田理事歡迎懇談會

(九月十七日 於麴町寶亭)

歐洲各國並びに近東回教諸國の視察旅行より最近歸朝せられた當協會理事半田敏治氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を九月十七日午後五時より麴町區平河町寶亭に於て開催、松井會頭より歡迎の挨拶ありて後、半田理事より歐洲國際情勢並に回教諸國の實狀に就いて報告あり、種々懇談を交して九時半散會した。當日の出席者左の如し。

半田敏治、松井石根、村川堅固、芳澤謙吉、高木陸郎、小野寺長治郎、松井七夫、佐藤安之助、鹿子木員信、松室孝良、内藤智秀、根岸信、橋本增吉、今岡十一郎、末澤慶政、角良勝、今牧嘉雄、中原

白鳥大使送別會

(十月十九日 於麴町寶亭)

曩きに駐伊全權大使に親任された當協會理事白鳥敏夫氏の送別の意を兼ねて十月十九日午後五時半より麴町區寶亭に於て同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで白鳥大使の謝辭あり一同食事を共にしたる後、別席に於て白鳥大使より歐洲情勢及び對支問題に就いて私見の披瀝あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

白鳥敏夫、松井石根、末次信正、村川堅固、菊池武夫、加藤敬三郎、高木陸郎、建川美次、小林省三郎、松井七夫、佐藤安之助、松室孝良、根岸信、瀧山興、橋本增吉、今岡十一郎、稻原勝治、秋山昱禧、西田卯八、高田郷徳、多田武郎、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

蒙古聯盟自治政府德主席一行

歡迎茶話會

(十月二十九日 於東京俱樂部)

十月二十九日午後四時より東京俱樂部に於て目下來京中の蒙

古聯盟自治政府德主席一行の歓迎の意を兼ねて茶話會を開催、松井會頭の歓迎の挨拶に對して德主席の謝辭あり、種々懇談を重ねて午後六時散會した。當日の出席者は左の如し。

德王主席、李守信副主席、吉爾嘎朗財政部長、橫山大佐、松井石根、村川堅固、高木陸郎、松井七夫、松室孝良、鹿子木員信、渡左近、笹目恒雄、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

栗原東亞局長歡迎懇談會

(十一月十七日 於麹町寶亭)

最近歐洲より歸朝され、外務省東亞局長に榮轉された當協會理事(前羅馬尼公使)栗原正氏の歓迎の意を兼ねて十一月十七日午後五時半より麹町區寶亭に於て同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで栗原東亞局長の謝辭あり、一同食事を共にしたる後、別席に於て栗原東亞局長より歐羅巴から觀たる支那事變に就いて私見の披瀝あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

栗原正、松井石根、建川美次、小林省三郎、松井七夫、松室孝良、佐藤安之助、瀧山興、内藤智秀、若澤敬策、橋本增吉、今岡十一郎、今牧嘉雄、稻原勝治、宇治田直義、近藤義晴、久保豊四郎、今村忠助、山口和一、下中彌三郎、牧次郎、中谷武世

日を迎へて、入城記念と出征當時に於ける各方面よりの援助に對する感謝の意を表する意味に於て陸海軍の將星及び大亞細亞協會關係の人々を招待して同日午後六時より九段の軍人會館に於て晚餐會を催され、松井大將より歸還以來胸奥に秘められて居た心境と今後の支那再建の重要性を披瀝されて挨拶に代へられ、次いで永井運相、徳富猪一郎氏、林權助男等も立ち上りて今次事變の意義と松井大將の武勳について感想を述べられ、後國民運動の方面に大將の健闘を囑望され、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

永井柳太郎、安保清種、前田米藏、林權助、本庄繁、阿部信行、川島義之、林仙之、菊池武夫、柳川平助、徳富猪一郎、小笠原長生、中野直枚、小泉六一、山室宗武、松井七夫、建川美次、三宅光治、稻垣孝照、加藤敬三郎、緒方竹虎、高木陸郎、唐澤俊樹、村川堅固、飯村稔、田邊盛武、上村利道、大川内傳七、井上雅二、岡本武三、福島喜三、佐藤安之助、三並貞三、西原一策、河野恒吉、小川關治郎、西原矩彦、牧次郎、清水盛明、松田千秋、大川周明、影佐禎昭、前田稔、根岸信、西田正雄、中村勝平、秋山昱禧、今井嘉幸、橋本增吉、岸井壽郎、櫻木俊一、日野水忠作、草鹿龍之助、川本芳太郎、永井八津次、本郷忠夫、鈴木京、角良晴、村田孜郎、鷲澤與四二、下中彌三郎、中谷武世、由上治三郎、中保與作、今岡十一郎、太田耕造、宇治田直義、宅間重太郎、薩摩雄次、今村忠助

維新政府梁行政院長一行 歡迎午餐會

(十一月十九日 於日比谷陶々亭)

今回來朝された中華民國維新政府梁行政院長一行並に同じく日滿支經濟東京懇談會に出席の爲來京中の維新政府王實業部長一行の歓迎午餐會を十一月十九日午前十一時より日比谷陶々亭に於て開催、松井會頭の挨拶に次いで一行を代表して梁、王兩氏より夫々謝辭あり、一同食事を共にしつゝ、懇談を盡して午後一時散會した。當日の出席者左の如し。

梁鴻志、李宜側、張秉輝、黃溥、黃遠、野村直邦、濱田弘、清水董三、伊藤便一、孫澁、岡田尙、白田寛三、王子惠、蘇錫文、盛小愚、謝芝庭、竺綬卿、梅詒經、卜立夫、李谷源、松井石根、建川美次、小野寺長治郎、松井七夫、加藤敬三郎、佐藤安之助、橋本增吉、犬塚惟重、今岡十一郎、千田勘兵衛、秋山昱禧、今牧嘉雄、宇治田直義、山口和一、江藤豊二、今村忠助、牧次郎、中谷武世

南京入城一周年紀念招待會

(十二月十七日 於軍人會館)

當協會會頭松井石根大將は十二月十七日南京入城一周年記念

興亞院關係者招待懇談會

(二月十日 於麹町寶亭)

一月十日午後五時より舊臘興亞院部長に就任された日高信六郎氏、鈴木貞一少將、課長に就任の鹽澤清宣大佐及び陸軍省兵務局付に榮任の田中隆吉大佐の祝意を兼ねて新年同人懇談會を麹町寶亭に於て開催、松井會頭の挨拶に次いで日高經濟部長より謝辭あり、一同食事を共にしたる後別席に於て、鈴木少將より對支工作に對する興亞院の方針に就いて、田中大佐より正勇山事件の實情に就いて披瀝あり、種々懇談を交して午後八時半散會した。當日の出席者左の如し。

日高信六郎、鈴木貞一、田中隆吉、鹽澤清宣、松井石根、末次信正、村川堅固、建川美次、小林省三郎、松井七夫、加藤敬三郎、大塚惟精、高木陸郎、飯村稔、神田正種、若澤敬策、小川喜一、白田寛三、根岸信、内藤智秀、福島喜三、千田勘兵衛、秋山昱禧、日野水忠作、金澤冬三郎、橋本增吉、今岡十一郎、稻原勝治、角良晴、今牧嘉雄、岩田愛之助、西田卯八、近藤義晴、高田郷徳、宇治田直義、多田武郎、今村忠助、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

學生問題懇談會

(二月二十日 於大阪ビル)

二月二十日午後四時より大阪ビルに於て學術の研鑽と學生教

養の方面に盡粹されつゝある當協會關係の諸氏出席のうへ懇談會を開催、村川副會頭の挨拶に次いで時局と青年學徒の使命に就いてそれ〴〵意見の開陳あり、種々懇談を交して午後七時散會した。

當日の出席者左の如しである。

村川堅固、根岸信、松室孝良、内藤智秀、橋本増吉、西田卯八、浦本政三郎、天川信雄、村瀬武比古、今村忠助、下中彌三郎、西原矩彦、牧次郎

同人歡迎懇談會

(五月十七日 於日比谷陶々亭)

五月十七日午後六時より日比谷陶々亭に於て、今次事變に出征され北、中支の戦野に赫々たる武勳を樹てられ過般歸還され陸軍大佐橋本欣五郎氏に目下來朝中の比津賓大學教授、比津賓大亞細亞協會顧問ピ・オ・デュラン氏、滿洲國建國大學教授中山優氏、比津賓大亞細亞協會望月音五郎氏、同今村榮吉氏、同浦上與一郎氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶について橋本大佐より謝辭あり一同食事を共にしたる後、橋本大佐より出征中の感想を披瀝され、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

橋本欣五郎、ピ・オ・デュラン、中山優、望月音五郎、今村榮吉、浦

昭和十四年度之部

長谷部少將、眞方中佐歡迎會

(五月一日 於麴町寶亭)

五月一日午後五時より麴町寶亭に於て、最近歐洲(主として波蘭に滞在)より歸朝された陸軍少將長谷部照悟氏に興亞院調査官陸軍中佐眞方勳氏の歡迎を兼ねて同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで長谷部少將より謝辭並に最近に於ける蘇聯邦情勢の報告あり、一同食事を共にしたる後、眞方中佐より

上與一郎、松井石根、村川堅固、加藤敬三郎、松井七夫、神田正種、松室孝良、若澤敬策、橋本増吉、今岡十一郎、櫻木俊一、福島喜三、次、稻原勝治、秋山昱禧、岩田愛之助、今牧嘉雄、神尾茂、西田卯八、高田邦徳、多田武郎、瓜生喜三郎、今村忠助、影山知二、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

小磯拓相、太田書記官長就任

祝賀會

(五月二十九日 於麴町寶亭)

五月二十九日午後六時より麴町區寶亭に於て、曩に拓務大臣に親任された陸軍大將小磯國昭閣下並に内閣書記官長に榮任された當協會理事太田耕造氏の就任祝賀及び目下來京中の臺灣大亞細亞協會理事長河村徹氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで小磯拓相の謝辭あり、一同食事を共にしたる後、太田書記官長より時局に對する政府の方針に就いて説明あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

小磯國昭、太田耕造、羽富好平、河村徹、松井石根、村川堅固、菊池武夫、建川美次、小林省三郎、松井七夫、佐藤清勝、栗原正、佐藤安之助、松室孝良、若澤敬策、橋本欣五郎、内藤智秀、橋本増吉

新民會指導部長歡迎會

(六月二十一日 於麴町寶亭)

六月二十一日午後五時より麴町區寶亭に於て、來京中の中華民國新民會指導部長長繆斌氏一行並に最近緬甸より歸朝された當協會々員國分正三氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶について國分正三氏より最近に於ける緬甸の政情に就いて講演あり、一同食事を共にしたる後、繆指導部長より新民會の指導方針の説明並に今後の日支關係等に就いて意見の開陳あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

繆斌、柯政和、伊藤三郎、樊友實、國分正三、松井石根、村川堅固、末次信正、建川美次、小林省三郎、高木陸郎、佐藤安之助、橋本増吉、今岡十一郎、神田正種、秋山昱禧、日野水忠作、今牧嘉雄、宇治田直義、野口正藏、高田邦徳、柴田義彦、多田武郎、今村忠助、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

「大亞細亞主義」執筆懇談會

(七月二十五日 於大阪ビル)

七月二十五日午後六時より大阪ビルに於て雑誌「大亞細亞主義」執筆懇談會を開催、中谷理事の挨拶ありて一同食事を共にしたる後、下中理事より天津租界問題の現地報告あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者は左の如くである。

村川堅固、長野朗、今岡十一郎、太田宇之助、稻原勝治、千原楠藏、ラスピハリ、ボース、下中彌三郎、中谷武世。

武藤少將、有末、岩畔大佐歡迎會

(八月一日 麴町寶亭)

日英會談現地軍代表として上京中の陸軍少將武藤章閣下、並に最近伊太利國より歸朝陸軍省課長に榮任された陸軍大佐有末精三氏、同じく陸軍省課長陸軍大佐岩畔豪雄氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を八月一日午後六時より麴町寶亭に於て開催、松井會頭の挨拶ありて一同食事を共にしたる後、別席に移り有末大佐より最近に於ける伊太利國情に就いて所感を述べられ次

者左の如し。

田中久一、ベリエット、松井石根、高木陸郎、根岸信、松井七夫、栗原正、松室孝良、橋本増吉、今岡十一郎、石川信吾、太田耕造、金澤冬三郎、神田正雄、土肥一夫、龜田正、井口兼夫、今牧嘉雄、神尾茂、高田邦徳、多田武郎、柴田義彦、金ヶ江清太郎、今村忠助、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世。

白鳥大使、須磨情報部長歡迎會

(十一月四日 於麴町寶亭)

最近伊太利より歸朝された當協會理事全權大使白鳥敏夫氏同じく米國より歸朝外務省情報部長に榮任された須磨彌吉郎氏の歡迎並に大民會顧問として近く渡支される陸軍少將松室孝良氏の送別の意を兼ねて十一月四日午後五時半より麴町寶亭に於て歡送迎同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで須磨情報部長より最近に於ける米國の對日事情に就いて報告あり、一同食事を共にしたる後、白鳥大使より最近の歐洲情勢並に我が對歐策の経緯に就いて報告あり、質疑應答、種々懇談を交して午後九時半散會した。當日の出席者左の如し。

白鳥敏夫、須磨彌吉郎、松室孝良、松井石根、菊池武夫、村川堅固、高木陸郎、小林省三郎、森越太郎、今井嘉幸、大塚惟精、若澤敬策。

いで武藤少將より現地狀勢並に日英會談の經過報告ありて後、時局問題に就いて小林評議員、中山、中谷、鹿子木の各理事松井會頭等よりそれら意見の開陳あり、種々懇談を交して午後十時散會した。當日の出席者は左の如し。

武藤章、有末精三、岩畔豪雄、松井石根、小林省三郎、建川美次、高木陸郎、伊藤述史、松室孝良、鹿子木員信、若澤敬策、中山俊、今岡十一郎、金澤冬三郎、福島喜三次、永井八津次、神田正雄、鈴木京、日野水忠作、中原謹司、國分正三、龜田正、井口兼夫、今牧嘉雄、野口正蔵、神尾茂、村田孜郎、宇治田直義、高田邦徳、柴田義彦、多田武郎、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世。

田中少將歡迎懇談會

(十月五日 於日比谷陶々亭)

十月五日午後五時半より日比谷陶々亭に於て陸軍戸山學校々長陸軍少將田中久一閣下並に比律賓大亞細亞協會幹部ベリエット氏の歡迎の意を兼ねて同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶に次いで田中少將より南支及び海南島に於ける諸事情に就いて講話あり、一同別席に於て食事を共にしたる後、ベリエット氏より比島の近況並に比島に於ける大亞細亞主義運動に就いて所感の開陳あり、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席

根岸信、内藤智秀、田中隆吉、太田耕造、橋本増吉、今岡十一郎、杉森孝次郎、加藤辰彌、日野水忠作、中原謹司、龜田正、土肥一夫、井口兼夫、今牧嘉雄、稻原勝治、由上治三郎、近藤義晴、武藤貞一、高田邦徳、宇治田直義、仁宮武夫、多田武郎、前川晃一、杉村伸、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世。

陸軍會員招待懇談會

(十一月二十一日 於麴町寶亭)

過般の陸軍異動によりて進級或は榮轉された陸軍中將樋口季一郎、陸軍中將中村明人、陸軍少將神田正種、陸軍少將武藤章の各閣下並に陸軍大佐園田晟之助氏の祝賀の意を兼ねて十一月二十一日午後五時半より麴町寶亭に於て同人懇談會を開催、松井會頭の挨拶について樋口中將の謝辭あり一同食事を共にしたる後、別席に於て武藤少將より最近の北支の諸事情並に對支問題に對する私見の開陳あり、質疑應答、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

樋口季一郎、中村明人、神田正種、武藤章、園田晟之助、松井石根、村川堅固、建川美次、小林省三郎、大塚惟精、根岸信、橋本増吉、内藤智秀、今岡十一郎、金澤冬三郎、永井八津次、加藤辰彌、福島喜三次、若澤敬策、竹藤峰治、秋山登禧、濱崎照道、日野水忠作、稻原勝治、今牧嘉雄、西田卯八、野口正蔵、近藤義晴、柴田義彦。

今村忠助、西原矩彦、中谷武世

大島大使、栗原公使歡送迎會

(二月十六日 於麴町寶亭)

一月十六日午後五時より麴町寶亭に於て前駐獨大使陸軍中將大島浩氏の歡迎並に瑞西駐劄全權公使として近く任地に赴任される當協會理事栗原正氏の歡送の意を兼ねて同人歡送迎懇談會を開催、松井會頭の挨拶ありて一同食事を共にしたる後、別席に於て大島大使より歐洲情勢並に我が外交國策に對する感想談栗原公使の謝辭あり、種々懇談を交して午後九時半散會した。當日の出席者左の如し。

大島浩、栗原正、松井石根、末次信正、村川堅固、建川美次、白鳥致夫、高木陸郎、平塚廣義、内藤智秀、今岡十一郎、橋本增吉、太田耕造、橋本欣五郎、加藤辰彌、高島辰彦、松本徳明、菅澤敬策、犬塚惟重、山崎清純、木下秀明、權藤正成、秋山登禧、今牧嘉雄、由上治三郎、高田郷徳、今村忠助、中原謙司、稻原勝治、平野英一郎、西田卯八、村田孜郎、清水新平、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

興亞團體聯合會結成

かねて準備中の興亞團體聯合會は、去る十一月二十九日丸の内東京會館に於て盛大なる發會式を舉行し、左の如き宣言を發

表した。

宣言

世界の變局に際し、東亞新秩序建設の意義尙に深く、業たる廣大なり。わが華國の大義に則り、民族の生命力を以て一貫不退の行を進めざるべからず。

今や聖戰三年、皇軍の威徳四方に輝き、建設の業その緒につく。此の時に方興亞團體聯合會の結成成り茲にその發會式を擧ぐ。志すところは、一に、聖旨を奉じ、興亞先覺諸賢の志行を繼ぎ、相寄り相助け其律動を活潑にし、依て以て大業建設の實踐を強化せんとするに存す。誠心志願大にして道遠し。同人互に相勵まし先憂後樂、千障萬難是れ排し、切々其行を共にせん事を期す。

昭和十四年十一月二十九日

興亞團體聯合會

本會の規約の主なるものは

- 一、本會ハ我國民同ノ有力ナル對支團體ノ協調連絡ヲ圖リ各加盟團體ヲシテ政治、經濟、文化ノ各部門ニ互リ各々其ノ特色ヲ發揮シテ東亞新秩序建設ニ寄與セシムルト共ニ本會自體ヲ以テ我對支國策ノ遂行ニ協力スルヲ以テ目的トス
- 一、本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲左ノ事項ヲ行フ
- 1、加盟團體相互ノ連絡協調及其ノ活動ノ助成促進
- 2、本會自體ヲ以テ行フ事業ノ具體的案劃並ニ之ガ實施
- 3、其ノ他前各項ノ目的ヲ達成スル爲必要ナル事項

なほ本協會からは顧問として松井大將、常任理事として下中彌三郎氏、常任幹事として中谷武世氏が夫々參與してゐる。

役員會及研究會

自昭和十一年四月
至昭和十五年三月

昭和十一年度之部

蒙古、イラン、阿富汗事情研究

—九月十日—

最近約四旬に互り蒙古、北支方面の視察を遂げて歸朝せられたる當協會理事鹿子木員信博士の上京を機とし、視察報告を承り旁々イラン國駐在武官より參謀本部に轉任せられたる、小原陸軍少佐及びアフガニスタン初代駐在武官として轉出せられる宮崎陸軍少佐の歡送迎の意を兼ねて九月十三日正午より大阪ビルに於て研究會を開催、菊池評議員より歡送迎の挨拶ありたる後、鹿子木理事より謝辭あり、次いで同理事より蒙古北支の視察報告並に蒙古問題に關する所見の披瀝あり、小原少佐よりはイラン國情に就いて、宮崎少佐よりはアフガニスタン事情に就

役員會

—十一月十六日—

十一月十六日午後二時より東京會館に於て役員會、引續き評議員會を開催、左の件につき協議した。

一、役員會に於て總會に附議すべき事項、規約改正、役員の推舉、事業報告、會計報告、亞細亞學館の建設案等につき協議す。

一、評議員會に於ては監事推舉の件、新に理事増加の件につき協議す。

評議員會

—十二月五日—

評議員會を十二月五日午後五時より星ヶ岡茶寮に於て開催、出席者左の如し。

松井石根、村川堅固、菊池武夫、加藤敬三郎、高木陸郎、小野寺長治郎、本多熊太郎、安川雄之助、建川美次、小林省三郎、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

昭和十二年度之部

對支問題研究會

—八月十日—

北支事變勃發に際し現地情況を視察歸朝せられたる當協會理事鹿子木員信博士、同佐藤教授並に辜顯榮氏の歡迎を兼ねて對支問題研究會を八月十日午後六時大阪ビルに於て開催、松井會頭より挨拶ありて後、來賓を代表して辜顯榮氏の謝辭について佐藤理事より滿支視察並に北支事變に對する感想談、鹿子木理事よりは北支事情についての講話あり、種々意見の交換をなし午後九時半散會した。當日の出席者左の如し。

辜顯榮、鹿子木員信、牧次郎、竹藤峰治、佐藤佐、黃邦年、松井石根、高木陸郎、飯村穰、柴山兼四郎、犬塚惟重、中山優、神尾茂、許丙、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦

役員會

—十二月十日—

時局の進展に伴ひ當協會今後の活動方針に關して協議すべく

支那問題研究會

—一月九日—

支那問題研究會を一月九日午後五時より大阪ビルに於て開催、松井會頭より挨拶ありて後、對支方針に關して種々意見の交換を爲し午後九時半散會した。當日の出席者左の如し。

松井石根、芳澤謙吉、村川堅固、矢野仁一、高木陸郎、建川美次、本間雅晴、秋山昱禱、橋本欣五郎、内藤智秀、橋本增吉、前田稔、伊藤賢三、犬塚惟重、中山優、今岡十一郎、藤原喜代馬、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

十二月十日午後五時より京橋區京橋中央亭に於て役員會を開催末次評議員司會の下に種々協議の結果、當協會内に時局委員會を設置し當協會の時局活動の執行に任せしむることに決定、末次評議員より左の諸氏に對して委員の指名あり、九時散會した。

村川堅固、菊池武夫、建川美次、小林省三郎、高木陸郎、鹿子木員信、中山優、内藤智秀、今岡十一郎、橋本增吉、太田耕造、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

時局委員會

—十二月十五日—

十二月十日の役員會に於て構成されたる時局委員會第一回會合を十二月十五日午後六時より大阪ビルに於て開催、村川、菊池、小林(省)白鳥、鹿子木、今岡、橋本、内藤、下中、中谷の各委員出席、菊池評議員司會の下に各委員より種々意見の開陳をなし、時局當面の根本方針に關して協會の意志表示をなすことに決定、左の三項を決議し政府に進言することとなり、十七日午前九時半菊池評議員は近衛首相に面會之を手交し、協會同人の意のあるところを傳へて懇談せられた。

決議

亞細亞民族ノ指導者タル皇國本來ノ使命ト今次事變ノ眞意義ニ鑑

右の決定に基き時局委員會は二月一日左の如き聲明を發表した。

時局委員會

—一月二十六日—

一月二十六日午後五時半大阪ビルに於て、第二回時局委員會を開催、建川、小林、橋本、今岡、太田、下中、西原、中谷の各委員出席、時局に就き各委員よりそれぞれ意見の開陳あり、種々協議を重ねた結果時局聲明を發表することを決定して午後八時散會した。

大亞細亞協會同人

ミ、大亞細亞協會同人ハ左ノ諸項ヲ緊急ノ時務ト認メ之ヲ決議具申ス。
一、帝國政府ハ速カニ蔣介石政權ハ勿論一切ノ國民黨政權否認ノ意志ヲ開明スベシ
一、帝國政府ハ第三國ヲ介シテ和平交渉ニ入ルノ意ナキヲ表明シ以テ民心ノ歸趨ヲ定ムベシ
一、帝國政府ハ長期作戰ノ決意ヲ愈々固クシ一切ノ内外諸施設ヲ右決議ニ即應セシムルヲ要ス
昭和十二年十二月十五日

時局聲明

政府ハ兼ニ國民政府ヲ相手トセザル旨ノ聲明ヲ發シ、長期戰遂行ニ處スベキ國民ノ覺悟ヲ要請スルトコロアリタルガ、該聲明ノ要旨猶ホ頗ル低調不徹底ニシテ、事變ノ根本的解決ト新支那建設ニ對スル積極的方針ニ關シ毅然タル決意ヲ缺クノ憾アリ、マタ第三國ノ權益尊重ヲ辯護スルニ急ニシテ第三國ノ對國民政府援助ヲ封ズルノ措置ニ緩ナルノ厭ナキ能ハズ。對外方針ニ關スル政府ノ積極的決意缺如ノ結果、長期作戰ニ即應スベキ對内諸施設、就中思想統制ノ效果ノ上ニモ國際ヲ生ジ、國民ノ精神的團結最モ鞏固ナルヲ要スル今日ノ時ニ於テ、議會言論、新聞雜誌ノ論調漸ク自由主義者ノ復活奮闘ヲ思ハシムルモノアリ、過日ノ貴族院ニ於ケル小坂、大河内兩議員ノ言議ノ如キ、自由主義、民主主義ノ立場ヲ強調シテ恰モ英米蘇佛等ノ人民戰線的國家ノ政治家ガ日獨伊三國ノ國際行動ヲ論難スルノ口吻ニ對應スルヤニ感ゼシムルモノアリタルハ、其ノ顯著ナル一例ニシテ、國民精神總動員ノ徹底ヲ期スル上ニ於テ最モ警戒サルベキ一資料タルヲ失ハズ。大亞細亞協會同人ハ彼上内外ノ諸情勢ニ鑑ミ、次ノ諸項ヲ喫緊ノ時務ト認メ之ヲ決議具申ス

一、政府ハ機ヲ失セズ宣戰詔勅ノ換發ヲ奏請シ、聖戰目的ノ完全遂行ニ關スル帝國不動ノ決意ヲ宣明スルト共ニ内外諸施設ニ於ケル戰時體制ノ完備ヲ期スベシ
二、政府ハ事變ノ根本的解決ト新支那建設ノ基調ニ關スル大方針ヲ端的ニ明示シ、隣邦民生ヲシテ憐フトコロヲ知ラシムルヲ要ス。
一、政府ハ速ニ第三國ノ對國民政府援助ヲ封退スベキ積極的手段ヲ講ズルト共ニ、第三國在支權益ノ保全トソノ軍事的援助回避ノ義務トハ相關聯スルモノナルコトヲ指摘シテ、現ニ對支援助ニ狂奔シツ、

アル第三國政府ノ反省ヲ求ムルトコロアルヲ要ス。
一、政府ハ時局一層ノ重大化ニ鑑ミ、人民戰線的分子ハ勿論、ソノ外廓的自由主義分子ノ言動ニ對シテモ警戒ヲ峻嚴ニシ議會ノ言説或ハ新聞ノ論調ニ牽制サルコトヲ益々思想統制ノ強化ヲ圖ルト共ニ、健全ナル統後運動ノ助長誘掖ニ留意シ戰時下國民ノ精神的團結ニ遺憾ナキヲ期スベシ。
昭和十三年二月一日
大亞細亞協會時局委員會

佛印、暹羅事情研究會

三月二十二日

三月二十二日午後六時より大阪ビルに於て先般佛領印度支那、暹羅方面を視察歸朝せられ、近く佛蘭西大使館に榮轉される本協會理事筒井潔氏の送別の意を兼ねて、佛印、暹羅事情研究會を開催、菊池評議員の挨拶ありて後、筒井理事より最近に於ける佛印、暹羅の政情に就いて詳細なる講話あり、質疑應答種々意見を交換して九時散會した。なほ筒井理事は廿四日横濱解纜の龍田丸にて任地に向はれた。當日の出席者左の如し。
筒井潔、村川堅固、菊池武夫、高木陸郎、内藤智秀、橋本増吉、中山俊、今牧嘉雄、下中彌三郎、中谷武世

昭和十三年度之部

西亞細亞事情研究會

六月七日

六月七日午後六時より大阪ビルに於て前アフガニスタン公使北田正元氏の歓迎を機会に目下滯京中の當協會評議員臺灣大亞細亞協會理事長河村徹氏並に最近中支より歸還された松室少將の歓迎の意を兼ねて西亞細亞事情研究會を開催、松井會頭の挨拶ありて一同食事を共にしたる後、別室に移り北田公使より回教諸民族情勢に就て講話あり、質疑應答、午後十時散會した。當日の出席者左の如し。

- 北田正元、松井石根、村川堅固、菊池武夫、高木陸郎、河村徹、松室孝良、瀧山興、鹿子木員信、橋本増吉、今岡十一郎、小野田捨次郎、今牧嘉雄、中原謙司、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

支那問題研究會

六月三十日

六月三十日午後六時より大阪ビルに於て、支那問題研究會を

上海經濟事情研究會

七月二十五日

七月二十五日午後六時より當協會内に於て上海より來京中の宮崎儀平氏を中心に上海經濟事情研究會を開催、松井會頭の挨拶ありて後、宮崎氏より最近の上海に於ける諸經濟事情の報告を聴取、種々懇談を交して午後九時散會した。當日の出席者左の如し。

- 宮崎儀平、松井石根、高木陸郎、鹿子木員信、松室孝良、下中彌三郎、西原矩彦、中谷武世

役員懇談會

——十月二十七日——

十月二十七日正午より當協會に於て役員懇談會を開催、松井會頭、村川副會頭、菊池、芳澤、高木、建川各評議員、根岸、鹿子木、今岡、橋本、下中、中谷、西原、各理事出席、松井會頭の挨拶ありて後、當面の時局問題其の他につき種々懇談を交して午後三時散會した。

役員懇談會

——十一月十日——

十一月十日正午より當協會に於て役員懇談會を開催、松井會頭、村川副會頭、芳澤、建川、兩評議員、根岸、橋本、今岡、太田、下中、中谷、西原各理事出席、松井會頭の挨拶ありて後種々懇談を交して午後三時散會した。

中支近情研究會

——三月二十三日——

三月二十三日正午當協會に於て、病後静養の爲熱海市伊豆山

後五時散會した。當日の出席者左の如し。

國分正三、江口穂積、松井石根、村川堅固、菊池武夫、建川美次、小林省三郎、橋本増吉、今岡十一郎、中山優、牧次郎、下中彌三郎、白坂義直、田邊宗夫、西原矩彦、中谷武世

本部、各支部連絡會議

——八月十三、四日——

當協會主催大亞細亞主義夏季講習會開催を機會に八月十三日十四日の二日間に互り富士山麓山中湖畔旭ヶ丘松井會頭別荘に於て本部、支部連絡會議を開催、本部側松井會頭、矢野副會頭、村川副會頭、末次、高木兩評議員、鹿子木、今岡、下中、西原、中谷各理事、大阪支部濱崎、下地兩理事、神戸支部今井理事、鹽見主事、京都支部稻垣理事、名古屋支部森、宅間兩幹事、福岡支部張、里屋兩理事、金澤支部星野理事、臺灣大亞細亞協會佐藤、今村兩理事出席第一日(十三日)は午後一時開會、松井會頭の挨拶ありて後、西原理事より協會本部の事業並に近況報告あり、次いで各支部役員よりそれ／＼支部の近況報告並に希望事項の開陳等あり、中谷理事より當協會の國家的努力に對する報告ありて午後四時半閉會、續いて第二日(十四日)は午前九

に滞留中の當協會會頭松井石根大將が病氣恢復上京されしを機會に、最近中支の現地事情視察を終へ歸朝された協會常任理事中谷武世氏の歡遷を兼ねて中支近情研究會を開催、松井會頭の挨拶に次いで中谷理事より中支に於ける諸事情に就いて報告あり、種々懇談を交へて午後三時散會した。出席者は左の如し。

中谷武世、松井石根、村川堅固、高木陸郎、根岸信、橋本増吉、秋山昱晴、今岡十一郎、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦

昭和十四年度之部

伊蘭、緬甸事情研究會

——六月十九日——

過般伊蘭國皇太子殿下の慶事に際し特派大使隨員として同國に差遣され最近歸朝された軍令部海軍少佐江口穂積氏、並に緬甸在住拾有五年最近歸朝された當協會員國分正三氏を迎へて六月十九日午後二時より大阪ビルに於て、伊蘭、緬甸事情研究會を開催、中谷理事の挨拶について國分氏より最近の緬甸政情及び援蔣ルート(緬甸—雲南)に就いて、江口少佐より最近の伊蘭事情についてそれ／＼報告あり、質疑應答、懇談を交して午

時開會今後の事業に就き協議並に懇談を遂げ午前十一時閉會、次いで山中湖畔こなや旅館に於ける松井會頭招待の午餐會に出席、松井會頭の挨拶に次いで出席者を代表して名古屋支部森中將の謝辭あり、一同食事を共にしたる後懇談を交して午後一時半散會した。(午餐會出席者は左の如くである)

松井石根、末次信正、矢野仁一、村川堅固、稻垣孝照、森越太郎、佐藤安之助、松室孝良、鹿子木員信、今岡十一郎、今井嘉幸、今村完道、張玄彦、濱崎照道、中山優、宅間重太郎、下地玄信、里屋武夫、佐藤佐、星野彦松、國分正三、鹽見清、鈴木憲一、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

時局委員會

——九月七日——

九月七日午後六時より大阪ビルに於て當協會本部役員會を兼ねて時局委員會を開催、松井、末次、村川、建川、鹿子木、松室、今岡、下中、中谷、牧、西原の各委員出席、松井會頭司會の下に最近に於ける時局問題に關して各委員よりそれ／＼意見の開陳あり、種々懇談の後今後の活動方針を決定して午後九時散會、猶本委員會は爾後數回に互つて開催され世界的變局に處する帝國の外交政策及協會の活動方針に關し研究を續行した。

小學校教員亞細亞研究会

—九月十六日—

今夏協會主催の大亞細亞主義講習會に参加した東京、横濱の小學校教職員諸氏は同講習會に於て感得したる大亞細亞主義の精神をより深く認識し、今後之を以て教育の根本を培ひたいとの熱意のもとに大亞細亞主義研究会を組織することとなり、九月十六日午後三時より當協會別室に於てその第一回會合を開催、協會側より村川副會頭、高木評議員、松室少將、下中、西原、中谷各理事臨席、宇井校長の挨拶に次いで出席者の自己紹介、高垣氏より研究会開催に至りし報告ありて後、中谷理事より「大亞細亞主義と新支那中央政權の性格」に就いて講演あり、座談會に移り出席者の質問に對して村川副會頭、高木評議員、松室少將、下中理事、中谷理事よりそれ々々専門的見地より懇切なる解答を與へ座談會終了、今後毎月一回研究会を開催する事、會の名稱を山中湖畔の宿舍の名に因んで「洗心會」とする事等決定、地階レインボーに於て中谷理事を中心として一同食事を共にしつゝ懇談を交して八時散會した。當日の出席者左の如し。

村川副會頭、高木評議員、松室少將、下中理事、中谷理事、西原

五八

事、宇井利一、川崎英藏、高垣國松、渡邊彦四郎、關口健次、飯沼莊一郎、矢島豪、高田三喜治、高橋作樂、山里昌英、佐野孝、國分正衛、土屋輝太郎、長山總一郎、榎本久一、瀧口高司、岩崎良能、曾根常吉

本部、支部連絡會議

—十二月十三日—

十二月十三日午後三時より當協會別室に於て本部、支部連絡會議を開催、本部側末次顧問、村川副會頭、高木常任評議員、下中理事、中谷理事、西原理事、今岡理事、牧理事支部側京都稻垣評議員、大阪今井理事、下地支信氏、神戸鹽見清氏、名古屋宅間重太郎氏、淺野甚七氏、福岡里屋理事、朝鮮豐川善暉氏等出席、下中理事長挨拶を兼ねて協會今後の活動方針を述べ、中谷理事之を補足的に説明し、之を基礎として種々協議を重ねたる後、末次顧問の決裁により今後の活動方針を決定、晚餐を共にしたる後、協會主催の講演會に臨んだ。

比律賓事情研究会

—一月二十四日—

一月二十四日正午より當協會別室に於て、目下來京中の比律

賓マニラ駐在領事木原次太郎氏の歓迎の意を兼ねて比律賓事情研究会を開催、松井會頭の挨拶に次いで木原領事より最近に於ける比律賓の諸事情について報告あり、質疑解答、懇談を交して散會した。當日の出席者は左の如し。

木原次太郎、松井石根、菊池武夫、高木陸郎、橋本増吉、宅間重太郎、金ヶ江清太郎、下中彌三郎、牧次郎、西原矩彦、中谷武世

役員會懇談會

—二月七日—

二月七日正午より大阪ビルに於て常任評議員並に常任理事の懇談會を開催、淺間丸事件其他に關し種々懇談を交換した。當日の出席者は左の如し。

松井會頭、村川副會頭、建川評議員、高木評議員、下中理事長、今岡理事、中谷理事、橋本理事、西原理事、牧理事

常任役員會

—二月二十二日—

二月二十二日正午より當協會に松井會頭、末次顧問、村川副會頭、菊地常任評議員、高木常任評議員、下中理事長、太田、中谷、根岸、橋本、西原の各常任理事參集、二月二日衆議院に於て行はれたる齋藤代議士の演説に關し意見を交換したる後、

左の如き聲明書を發表するに決した。

聲明書

二月二日衆議院に於て行はれたる齋藤代議士の演説は、東亞新秩序の建設に疑義を挟みて聖戰の目的を冒瀆し、八紘一字の建國の理想を擲論し、皇道の大義を冷嘲するの悖逆を敢てしたるものなり。新東亞建設の聖業は一二議員の言論によりて些かも動搖あるべからざるは勿論なるも、世上或は此の種議會の言論を利用して反戰運動に表せんとする徒輩無きにあらず、且つまた重慶政權並に援蔣第三國が之を以て反日宣傳の具に供しつゝあるの跡既に歴然たるものあり、吾人は此の如き利敵言動を敢てしたる議員に對する處断の他くまで峻烈にして以て翼賛の府の名分を正すべきを期待すると共に、政府は宜しく義に第七十四議會に賜りたる勅語に畏くも東亞新秩序建設を宣命し給へる聖旨を奉體して、聖戰の意義を明徹にし國民をして明に奮ふところを知らしむるの方途に出づべきことを要望するものなり。

右聲明す

昭和十五年二月二十二日

大亞細亞協會同人

右代表 松井石根

大亞細亞協會各地支部發會式並ニ事業概況

福岡支部

發會式

—昭和十一年十月二十四日—

大亞細亞協會福岡支部發會式を十月二十四日午後四時、福岡市教育會館に於て舉行、常務理事鹿子木員信博士より開會の挨拶ありて後、一同 神宮、皇居を遙拜、君ヶ代を奉唱、支部長西川虎次郎氏の詔勅奉讀あり、次いで同氏支部長就任の挨拶の後、來賓を代表して福岡高等學校長秋吉音治氏の祝辭に次いで本部評議員松井石根閣下より祝辭並に講演あり、天皇陛下萬歳を奉唱して常務理事里屋武

夫氏の閉會の辭によりて意義ある結成の式を閉じた。午後六時岩田屋百貨店に於て晚餐會を開催、席上九大農學部教授伊藤藤司氏より南方開發問題に就きて講話あり、亞細亞問題、支那問題に關する意見の交換を爲して八時半散會した。

對支問題講演會

—昭和十二年二月二十五日—

福岡支部主催の對支問題講演會は二月二十五日午後六時三十分福岡市公會堂に於て開催、西川中將の開會の辭に次いで前南京總領事須磨吉郎氏より「中國の現状と日支の將來」協合理事柴山兼四郎大佐より「西安事變に對する一考察」の

演題下にそれ〴〵講演され、時局柄極めて盛會であつた。

講演會

—昭和十二年七月八日—

福岡支部主催の下に白鳥公使の歐羅巴事情に關する講演會を七月八日午後五時より福岡市教育會館に於て舉行、約一時間に亘り歐洲外交の裏面史並に日滿の不可分關係に就き講述せられ、聽講者一同深き感銘を與へ、終りて同七時より新三浦旗亭に於て會員並に有志の懇談會を開催、交驩を盡して九時半散會した。懇談會出席者次の如し。
白鳥公使、白坂教育會長、堀内少將、鴨居

氏、中牟田少將、酒匂、星村、宮成、光安、山本、湯瀬大佐、阿部編輯局長、戸上醫學博士、倉成、河野、田中大尉、田中高女校長、今村市議、原田中將、板垣博士、鹿子木博士、高津格里屋武夫

講演會

—昭和十三年五月二十五日—

五月二十五日午後四時より福岡市縣公會堂に於て會頭松井石根大將の當地陸軍病院傷病將兵並に戰歿遺家族慰問の爲め來福せられたるを機會に福岡支部主催の下に時局講演會を開催、聽衆は開會前既に會場外に溢れ外に擴聲機を設備して開會、支部長西川中將の開會の挨拶に次いで鹿子木博士より「支那事變の本質と其の對策」伊藤公使より「支那事變を繞る國際情勢」に就いて詳述、續いて松井大將起ち銃後の支援を謝し猶一層の後援を懇望したる後、時局の重大性と長期戦に

對する國民の決意を促がし絶大の感銘を與へて降壇、星村理事の開會の辭、西川支部長の發聲にて萬歳三唱し、午後六時盛會裡に講演會を終了、午後七時より市内常盤館に於て支部會員の松井大將一行歓迎會を催し午後九時散會した。

半田理事歡迎會

—昭和十三年十月三日—

十月三日午後四時より博多ホテルに於て、歐洲各國並びに近東諸國の視察旅行より歸朝せられた本協合理事半田敏治氏を迎へて、同氏の歡迎會を開催、福岡支部長西川中將の挨拶に次いで半田理事より歐洲國際情勢並に近東諸國の實狀に就いて報告あり、種々歡談を重ねて午後八時散會した。

懇談會

—昭和十四年九月二十七日—

建川中將下中理事長
中谷理事歡迎懇談會
—昭和十四年二月十一日—
本協會福岡支部にては二月十一日正午より同市岩田屋に於て來福中の協會本部評議員建川美次閣下、同理事長下中彌三郎氏、同常任理事中谷武世氏の歡迎の意

を兼ねて懇談會を開催、一同皇紀二千六百年の紀元節を賀し奉り、宮城遙拜、星村理事の挨拶あり、午餐を共にしたる後、建川中將、下中理事長、中谷常任理事よりそれ〴〵時局に對する所感を披瀝され、會員に多大の感銘を與へ種々懇談を交して午後二時四十分散會した。

大阪支部

發會式

昭和十一年十月二十八日

大阪支部發會式を十月二十八日午後三時より、堂島ビル清交社に於て舉行、本部よりは松井評議員、鹿子木理事、中谷常任幹事臨席、大阪支部常任理事由上治

三郎氏より開會の挨拶並に支部創立經過概要、役員推薦に關する説明あり、支部成立を宣言し、次いで武田鼎一博士より來賓を代表しての祝辭ありて後、松井評議員より祝辭あり、高石眞五郎氏の發聲にて 天皇陛下萬歳を奉唱して結成式を終了、直ちに懇談會に移り、支那問題に關して松井評議員より講話あり、亞細亞問題其他につき各々意見を披瀝し午後六時閉會した。當日出席者約六十名。

講演會

昭和十二年二月二十三日

當協會大阪支部にては二月二十三日正午より堂島ビル清交社に於て前南京總領事須磨彌吉郎氏を迎へて、講演會を開催、今井博士の挨拶に次いで須磨總領事より「中國の現状と日支の將來」と題して論述され多大の感銘を與へた。

黃、唐兩氏追悼會

昭和十二年三月四日

親日外交家として知られたる故黃郛、唐有任兩氏の追悼會を當協會大阪支部主催の下に三月四日午後三時より大阪商工會議所に於て舉行、理事今井嘉幸氏の開會の挨拶ありて後、本願寺津村別院僧都の讀經、松井會頭、中華民國大使代理王神戸總領事、安宅商工會議所會頭の追悼文朗讀、弔電の披露あり、參列者一同の燒香終りて、同四時より坂西中將、戴克諾氏の追悼講演會を催した。

講演會

昭和十二年七月十三日

當協會大阪支部では七月十三日正午より堂島ビル清交社に全權公使白鳥敏夫氏を迎へて講演會を開催、今井博士の挨拶に

ついで白鳥公使より最近の歐洲情勢に就いて講演され會員一般參會者に多大の感銘を與へた。

講演會

昭和十二年十月一日

當協會大阪支部主催の講演會は十月一日午後二時より大阪市堂島ビル清交社に於て開催、本部評議員高木陸郎氏並に本部理事下中彌三郎氏より時局に關する講演あり、來會者に多大の感銘を與へ盛會であつた。

松井會頭歡迎會

昭和十三年三月二十一日

三月二十一日午後五時半より堂島ビル清交社に於て、關西、九州方面戰傷病兵慰問の爲來阪の松井大將歡迎の意を兼ねて、大亞細亞協會大阪支部主催の下に歡

迎晚餐會を開催、谷中部防衛司令官、佐伯中將、楠本大阪總長、上野大朝社長、平川大毎主幹等約七十餘名參會、由上支部常務理事の挨拶ありて食事を共にしたる後、片岡支部評議員の歡迎の辭に續いて松井大將より謝辭並に今事變と大亞細亞主義の理想に就いて抱負を述べられ、谷中將の首唱にて一同乾杯し午後七時半盛會裡に散會した。

大阪支部學生部發會式

昭和十三年五月二十九日

當協會大阪支部學生部發會式は協會本部會頭松井石根大將、理事白鳥敏夫公使、鹿子木信博士、牧次郎少將を迎へて五月二十九日午後一時より大阪市大手前軍人會館に於て舉行、谷中部防衛司令官、森本少將、當協會副會頭矢野仁一博士、田崎仁義、佐多愛彦博士、今井嘉幸博士、濱崎

照道、岩井尊文、由上治三郎の諸氏並に回教徒代表ムスターフアール氏、カタール、トルコ代表ガチス氏、インド代表ボトス氏の各亞細亞民族代表等列席、大阪外語、大阪商大、昭和商大、日大専門部、關西大學、大阪高醫、浪速高校參加學校の學生生徒約一千餘名參集、開會の辭に次いで國歌奉唱、由上大阪支部理事、創立經過報告、參加各學校總代の挨拶ありて後、松井大將、高島滿洲國名譽領事代理、ムスターフア、ガチス、ボトス諸氏の祝辭あり、發會式を終了、引續いて午後二時半より同所に於て發會式記念講演會を開催、鹿子木博士より「支那事變の本質とその對策」白鳥公使より「外交一般」松井大將より挨拶を兼ねて大亞細亞主義に就いての講演あり、午後五時半散會した。

學生部講演會

—昭和十三年六月二十五日—

當協會大阪支部學生部講演會は六月二十五日午後三時より大阪市大阪外國語學校に於て開催、松室孝良少將より「支那の動向」に就いて講演あり、講演會終了後松室少將を中心に座談會に移り午後八時散會した。

半田理事歓迎會

—昭和十三年九月二十三日—

當協會大阪支部主催のもとに九月二十三日正午より堂島堂ビル清交社に於て、當協會理事半田敏治氏の歓迎午餐會を開催、半田理事より歐洲各國事情に就いての講話あり、參會者に多大の感銘を與へた。

支部總會並講演會

—昭和十三年十一月二十六日—

大阪支部總會は十一月二十六日午後四時半より、堂島ビル清交社別室に於て、同日神戸支部發會式に臨場された大亞細亞協會會頭松井根大將、協會理事今岡十一郎並に同夜支部主催の講演會に臨まれた協會評議員元外相芳澤謙吉氏を迎へて舉行、本年度會務報告等ありて後一同食事を共にして總會終了、續いて午後六時半より中の島中央公會堂に於て大阪支部主催のもとに大亞細亞主義講演會を開催、由上理事司會の下に、武田博士「支那の經濟建設」今岡理事「ツラン回教徒問題と大亞細亞主義」芳澤元外相「國際的時局感」松井會頭「支那事變の意義と大亞細亞主義」の演題下にそれ／＼大亞細亞主義の理想を披瀝され滿域二千有餘

六四

の聴衆に多大の感銘を與へ午後十時散會

京阪神支部聯合理事會

—昭和十四年九月九日—

當協會大阪支部主催の京阪神支部聯合理事會は、奈良縣天香久山に於ける御神事に出仕の爲來阪の松井會頭閣下並に當協會評議員高木陸郎氏、同常任理事中谷武世氏を迎へて九月九日午後六時より大阪城島清交社に於て開催、下地理事の挨拶の後、松井會頭より最近の時局に就いて所感を述べられ、次いで中谷理事より八月山中湖畔に開催の連絡會議に京阪神支部理事より提案せる要項に對して協會本部の意向及び協會今後の活動方針に關して説明あり、續いて支部側各理事の質疑に對して、松井會頭、高木評議員、中谷理事よりそれ／＼懇切なる應答あり、種々懇談を交して午後九時半散會した。

協會本部 松井會頭、高木評議員、中谷理事
京都支部 稻垣孝照、堀場信吉、渡邊郁三
大阪支部 濱崎照道、角野久三、西原廉之助、下地玄信、山本顯彌太、岩井尊文、鹽澤元次、秋山愛二郎、長岡克曉、荒川太逸、金澤利助、村瀬貞次郎
神戸支部 今井嘉幸、森田金藏、奥村拓治
村上蕃、小林義道、西川磯吉、山本金治郎、鹽見清

大阪市大講演會

—昭和十四年十一月十三日—

當協會大阪支部では十一月十三日午後五時より大阪市大手前軍人會館に會頭松井根閣下、評議員末次信正閣下、理事下中彌三郎氏理事中谷武世氏を迎へて歓迎晚餐會を催したが、續いて同所に於て大阪支部主催の下に大亞細亞主義大講演會を開催、白衣の勇士七百五十餘名を交へて會員一般聴衆五千餘名、今井理事司會の下に一同起立皇居遙拜皇軍將士に感

謝の黙禮を捧げたる後、支部理事中山太一氏の「與亞日本の責務」と題して講演あり、次いで松井大將より挨拶を兼ねて時局に對する所感を述べられ、次に中谷理事より「東亞新秩序と大亞細亞主義」下中理事より「大陸經濟建設に就いて」最後に末次大將登壇「世界的動亂と皇國の使命」題下に世界動亂に處する我が國の立場を闡明され、滿場の聴衆に多大の感銘を與へ、天皇陛下の萬歳を奉唱して大盛會裡に午後十時散會した。

京都支部

發會式

—昭和十一年十二月十一日—

豫て京都帝大教授、大谷光瑞氏外京都

在住有力者間に於て準備中の大亞細亞協會京都支部發會式は會頭松井大將臨席の下に學界、實業界、其他朝野の士百餘名の出席を得て十二月十一日午後五時より京都ホテルに於て舉行、稻垣孝照氏閉會を宣し、一同にかはりて京大工學部瀧山興教授を座長に推薦、規約規定に就き審議を爲し承認の後、役員の推舉に關しては座長の指令により堀場信吉、前田龜千代、石川芳次郎の三氏詮衡委員となり、協議の結果、瀧山興、谷口吉彦、大橋理祐、田邊隆二、稻垣孝照の五氏理事に決定す。次いで松井會頭より祝辭並び大亞細亞協會の使命、支那の現狀等につき講話あり、大阪支部理事山上治三郎氏の祝辭に次いで祝電祝文の披露をなし、學生側を代表して京大滿蒙研究會黒川又郎君より挨拶あり、嚴肅裡に閉會す。

引續き同所に於て發會祝賀晚餐會を開

六五

講演會

昭和十二年七月十四日

當協會京都支部にては七月十四日午後四時より京都商工會議所に本協會理事全權公使白鳥敏夫氏を迎へて講演會を開催稻垣理事の挨拶について白鳥公使より最近に於ける歐洲の諸情勢に就いて講演あり、會員一般聴衆に多大の感銘を與へ盛會であつた。

講演會

昭和十二年十月二日

十月二日午後二時より當協會京都支部主催の下に京都商工會議所に於て講演會を開催、本部評議員高木陸郎、同理事下中彌三郎の兩氏より「支那事變を中心とする支那の動き」に就いて講演あり、午後五時半閉會した。

催、京大理學部松山基範博士、岩重京都府學務部長加賀谷京都市助役、田邊隆二の諸氏よりそれ〴〵卓辭ありたる後、松井會頭祝辭を述べ、本部副會頭矢野仁一博士の發聲にて「聖壽萬歳を奉唱して午後八時散會す。

講演會

昭和十二年二月二十二日

當協會京都支部にては二月二十二日午後四時より京都商工會議所に於て前南京總領事須磨彌吉郎氏を迎へて講演會を開催、稻垣中將の挨拶に次いで須磨總領事より「中國の現状と日支の將來」の題下に講演され多大の感銘を與へた。

滿洲國留學生招待會

昭和十二年五月二十九日

京都支部主催の滿洲國留學生招待會を

五月二十九日午後二時より南禪寺金地院に於て開催、京都帝大生外各學校に在學中の留學生三十名出席、本部より矢野副會頭、支部よりは瀧山、田邊、大橋、谷口、稻垣の各理事、竹上、長谷川、渡邊田中、江見、各評議員、府廳より鈴木知事、岩重學務部長、帝大よりは松井總長學生課員其他出席、瀧山理事の挨拶に次いで鈴木知事より留學生激勵の講話あり藤田三高教授より「王道と日本精神」につき、松井帝大總長よりは「醉生夢死」に稻垣理事より「日本民族傳統の信念」に就いて講話あり、留學生の諸氏よりは率直なる感想の開陳あり、午後六時散會す。引續き學生諸氏は大橋理事主催の千本常磐に於けるすき燒會に臨み席上竹上、渡邊評議員より學生側に對し所感並希望を述べ岩重學務部長の激勵の辭ありて和樂談笑の裡に意義深く午後九時散會す。

尙ほ開會に先立ち出征中の當協會々頭松井大將宛、滿場一致左の如き電文を打電した。

上海ニ於ケル皇軍日夜ノ御奮闘ニ對シ國民皆感激ス閣下ノ御心勞恐スルニ餘リアリ、當支部ハ本日高木陸郎氏下中彌三郎氏ヲ招聘シテ講演會ヲ開催シ一同皇軍ノ武運長久ト閣下ノ御健勝ヲ祈ル。

松井大將歡迎會

昭和十三年三月二十九日

三月二十九日午後四時より京都ホテルに於て、大亞細亞協會京都支部定期總會並に松井大將歡迎茶話會を開催、稻垣中將他七十餘名出席、歡迎會に先立ちて定期總會を舉行、瀧山理事より會務報告、田邊理事より會計報告等ありて總會を終了、直ちに別席に於て松井大將歡迎茶話會に移り、瀧山理事の挨拶ありて後、松井大將より謝辭あり、次いで稻垣中將よ

時局講演會

昭和十三年五月二十八日

り松井大將觀の一端を披瀝され、更に松井大將より時局に對する所感並に大亞細亞主義の理想に就いて講話あり、會員諸士に多大の感銘を與へて午後五時半散會した。

五月二十八日午後二時半より京都市商工會議所に於て當協會京都支部主催の下に時局講演會を開催、會員並に學界、實業界の有力者等百五十餘名出席、京都支部稻垣孝照中將の開會の挨拶に次いで鹿子木博士より「支那事變の真相とその對策」伊藤述史公使より「現下の國際情勢」に就いて論述、松井大將より挨拶を兼ねて支那事變と大亞細亞主義に就いて講話あり、會員並に一般聴衆に多大の感銘を與へ午後六時終了した。

講演會

昭和十三年十月二十六日

當協會京都支部主催の講演會は十月二十六日午後四時半より京都市京都商工會議所に於て開催、京都支部稻垣中將の挨拶に次いで、本部派遣講師陸軍少將松室孝良閣下より「武漢攻略後に於ける情勢の見透と皇國の對策」と題する講演あり會員一般聴衆に多大の感銘を與へて午後六時半閉會した。

支部總會、講演會

昭和十三年十一月二十五日

京都支部講演會並に總會は大亞細亞協會會頭松井石根閣下、同協會理事今岡一郎氏を迎へて、十一月二十五日午後四時より京都ホテルに於て開催、會員七十餘名出席、京都支部稻垣中將の開催の辭

に次いで今岡理事より「ツラン回教徒問
題と大亞細亞主義」の演題の下に回教問
題の重要性を説かれ松井會頭より「時局
所感」と題して、挨拶に代へて時局に對
する所懐を披瀝せられ多大の感銘を與へ
た。講演會終了後京都支部本年度會務報
告あり、終つて、同所に於て松井會頭、
今岡理事の歓迎晚餐會を催し盛會裡に午
後八時半散會した。

猶同日午後二時より松井會頭は京都帝
國大學に於て同大學生に對して講演をせ
られた。

講 演 會

—昭和十四年五月三日—

大亞細亞協會京都支部では五月三日午
後三時より京都商工會議所に協會本部會
頭松井石根大將並に陸軍省情報部長谷川
宇一少佐を迎へて支部主催のもとに春孝

講演會を開催、一同起立東方遙拜、默禱
を捧げたる後、支部長稻垣中將の開會の
挨拶に次いで長谷川少佐より「今次事變
の意義——世界史的に觀たる」と題して
熱辯を振はれ松井會頭より「時局に對す
る國民の覺悟」の題下に熱誠溢る、講演
あり、支部會員及一般參會者二百有餘名
に多大の感銘を與へ午後五時半講演會を
終了、續いて午後六時半より四條萬養軒
に於て松井會頭を中心に長谷川少佐はじ
め支部會員有志一同晚餐を共にしたる後
種々懇談を交して午後八時半散會した。

京阪神支部聯合理事會

—昭和十四年六月十七日—

當協會京都、大阪、神戸の各支部では
六月十七日午後六時より京都市都ホテル
に於て京阪神支部聯合理事會を開催、時
局に對し種々意見の交換を行ひ協議の結

果左の如き決議をなし關係當局に宛て決
議文を打電した。

決 議

天津英租界問題に對しては最も強硬なる
態度を以て邁進し中華民國臨時政府をして
其の回收を取行せしむべし。

昭和十四年六月十七日

大亞細亞協會京阪
各支部聯合理事會

末次大將歡迎座談會

—昭和十四年十月六日—

當協會京都支部に於ては京都帝國大學奉
公會主催の講演會に臨席の爲入浴せられ
た當協會評議員海軍大將末次信正閣下を
迎へて京都支部主催の下に十月六日午後
零時半より京都商工會議所に於て末次大
將を中心に座談會を開催、稻垣理事の挨
拶に次いで末次大將より時局問題を中心
に所懐を述べられたる後會員の質問に對
し懇切なる應答あり、出席會員五十餘名

に多大の感銘を與へ午後三時散會した。

猶座談會終了後末次大將は京都帝大の
講演會に臨み一千五百餘名の職員學生に
對して講演された。

支部總會並座談會

—昭和十四年十一月十一日—

當協會京都支部に於ては十一月十一日
午後四時より會頭松井石根閣下並に當協
會理事下中彌三郎氏を迎へて京都ホテル
に於て支部總會を兼ね座談會を開催、支
部理事稻垣中將司會の下に昭和十四年度
會務報告、會計報告、理事改選の件等協
議決定したる後座談會に移り、松井會頭
の「時局感」、下中理事の「大陸經濟建
設」に就いての講話ありて後、同所に於
て松井會頭下中理事歓迎晚餐會を催し、
一同食事を共にしつゝ、懇談を交して午後
八時半散會した。

白鳥大使歡迎會

—昭和十四年十一月二十五日—

當協會京都支部にては十一月二十五日
午後一時半より京都市都ホテルに於て前
駐伊全權大使白鳥敏夫閣下を迎へて座談
會を開催、稻垣中將の挨拶について白鳥
大使より最近の歐洲情勢並我が外交の基
調に就いて講話あり會員に多大の感銘を
與へ有意義裡に散會した。

金澤支部

發 會 式

—昭和十二年十月二十六日—

金澤支部發會式は十月二十六日午後四
時金澤市仙實閣に於て舉行、星野彦松氏
より開會之辭あり一同皇居遙拜の後、

君ヶ代を奉唱辰村氏より支部結成迄の經
過を報告し、座長に關戸虎松氏を推薦、
支部規約並支部長を決定後、支部長久保
豐四郎氏と交替、役員及顧問を決定して
同氏より支部長就任の挨拶あり、來賓を
代表して第四高等學校長小松倍一氏の祝
辭ありて後、松井本部評議員より祝辭並
講演あり、天皇陛下萬歳を奉唱して結成
式を終了した。

次いで晚餐に移り亞細亞問題支那問題
に關し忌憚なき意見を交換し盛會裡に八
時半散會した。出席者約四十名。

松井大將歡迎會

—昭和十二年三月三十一日—

三月三十一日午後五時より金澤市石浦
町仙實閣に於て、戰傷病將兵慰問の爲來
澤の前上海方面最高指揮官松井石根大將
の歡迎の意を兼ねて、師團司令部、縣、

に閉會した。

時局講演會

—昭和十四年五月四日—

金澤支部では五月四日午後四時一分金澤驛に協會本部會頭陸軍大將松井石根閣下並に陸軍省情報部々員陸軍砲兵少佐長谷川宇一氏を迎へて午後五時より金澤市仙寶閣に於て第九師團、石川縣、金澤市共同主催の松井大將歡迎座談會を催したが、引續いて午後七時より同市公會堂に於て金澤支部主催、第九師團、縣、市後援の下に時局大講演會を開催、常岡師團長はじめ幕僚、縣市吏員、衛戍各部隊將兵に一般聴衆を合して三千有餘名、全員起立東方遙拜、戰歿將士に黙禱を捧げた後、支部長横山隆良男の開會の辭に次いで金澤醫大教授岡本規矩雄博士は「ドイツ民族に就いて」長谷川少佐は「今次

事變の意義」と題してそれ／＼熱辯を振はれ、最後に松井大將登壇「時局に對する國民の覺悟」の演題の下に現下の歐洲情勢より説き起し滿堂に異常の緊張を漂はせ多大の感銘を與へて降壇、午後十時盛會裡に散會した。

北陸大亞細亞協會結成式

—昭和十五年三月五日—

當協會金澤支部主催の講演會は本部派遣講師文學博士鹿子木員信氏並に陸軍少將松室孝良氏を迎へて、六月二十四日午後七時より金澤市高岡町高等小學校講堂に於て開催、鹿子木博士は「支那事變の本質と其の對策」松室少將は「支那の動向」の演題の下にそれ／＼論述せられ、聴衆に多大の感銘を與へ午後十時盛況裡

に閉會した。本協會金澤支部は協會の使命徹底と強化を期する爲、支部の機構を改革、新に北陸大亞細亞協會を設立することとなり三月五日午後六時より金澤市仙寶閣に於て北陸大亞細亞協會結成式を舉行、本協會理事樋口第九師團長、同理事牧少將臨席のもとに富田憲兵隊長、安達第九師團情報部長、横山男爵、岡本醫學博士等會員六十餘名出席、一同宮城遙拜、星野理事より開會の挨拶を兼ねて金澤支部十四

聴衆等約三千、宮城遙拜、國歌齊唱、皇軍の武運長久祈願、戰病歿者の英靈に黙禱を捧げたる後、名古屋支部大塚堅之助中將の開會の辭に次いで鹿子木博士より「支那事變の本質と其の對策」白鳥公使より「外交一般」と題してそれ／＼講演され、最後に松井大將より挨拶を兼ねて支那事變と大亞細亞主義に就いて講話あり、午後十時散會した。

年度會務報告並に北陸大亞細亞協會結成經過報告あり、規約決定、役員の推薦發表ありて後、新役員を代表して北陸大亞細亞協會々頭横山男爵、同顧問樋口中將の挨拶、本協會牧理事の祝辭、英理事より祝電祝詞の披露あり、樋口中將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り、岡本副會頭の閉會の挨拶ありて結成式を終了、引續いて同所に於て晚餐懇談會を開催、横山男爵の挨拶ありて一同食事を共にしたる後、種々懇談を交して午後八時半散會した。

五時半より名古屋市八事八勝館に於て舉行、大塚、森兩中將、林海軍少將、藤岡名古屋市助役、浦田大塚各名古屋總局長等約六十名出席、發起人を代表して淺野甚七氏の挨拶、櫻木俊一氏より經過報告、祝電の披露ありて後、松井大將より祝辭並に大亞細亞協會設立の動機及び大亞細亞主義に就いて講話あり、結成式を終了、續いて晚餐會に移り松井大將拜受の恩賜の清酒を一同にわかち大將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を奉唱、午後八時半散會した。

座談會

—昭和十三年十月七日—

名古屋支部

發會式

—昭和十三年四月十一日—

大亞細亞協會名古屋支部結成式は松井石根大將の臨席を得て、四月十一日午後

當協會名古屋支部結成記念講演會は松井會頭、白鳥公使、鹿子木員信博士、牧少將を迎へて五月三十日午後七時より名古屋市公會堂に於て開催、會員並に一般

十月七日午後二時より名古屋市觀光ホテルに於て傷兵保護院主催の銃後強化運動講演の爲來名の當協會々頭松井石根閣下を迎へて座談會を開催、會員約五十餘名出席、名古屋支部幹事大塚中將の挨拶に次いで松井會頭より最近の戰況並に聖戰に對する國民の覺悟に就いて講話あり

り、會員の質問に對して松井會頭よりそれぞれ應答あり、來會者に多大の感銘を與へて午後四時閉會した。

時局講演會

昭和十四年一月二十日
名古屋支部主催の時局大講演會は一月二十日午後六時より、陸軍大將小磯國昭閣下、會頭代理協理理事西原少將並に協理理事下中彌三郎氏を迎へて名古屋市公會堂に於て開催、名古屋支部櫻木幹事の開會の挨拶に次いで西原理事より「支那事變の意義と大亞細亞主義」下中理事より「長期建設經濟體制」と題し最後に小磯大將起つて「日本精神に生きよ」の演題の下にそれ〴〵獅子吼され満堂二千七百の聴衆に多大の感銘に與へて午後十時盛會裡に散會した。

松井會頭、中谷理事 歡迎懇談會

昭和十四年九月十日
當協會名古屋支部に於ては會頭松井右根閣下並に本部常任理事中谷武世氏を迎へて、九月十日午後六時より名古屋觀光ホテルに於て歡迎晚餐會を開催、支部會員五十餘名出席、大塚中將の挨拶に次いで松井會頭の謝辭あり、一同晚餐を共にしたる後、懇談會に移り松井會頭並に中谷理事よりそれ〴〵時局に關する諸問題に就いて所感を述べられ多大の感銘を與へ、次いで會員の質問に對し松井會頭、中谷理事より懇切なる應答あり、種々懇談を交して盛會裡に午後十時散會した。

神戸支部

發會式

昭和十三年十一月二十六日
大亞細亞協會神戸支部發會式は十一月二十六日午後一時より神戸商工會議所に於て、協會會頭松井右根大將、副會頭村川堅固博士、伊藤述史公使、協理理事今岡十一郎氏を迎へて舉行、神戸支部松尾理事座長席に着き、皇居遙拜、國歌齊唱黙禱を捧げたる後今井理事より支部設立の經過報告、進藤理事の宣言朗讀、森田評議員の動議により皇軍將士への感謝の電文の決議をなし、次いで在神亞細亞各國民族代表の祝辭、各地よりの祝電の披露あり、最後に松井會頭の發聲にて天皇陛下の萬歳を奉唱し發會式を終了、引

新年總會

昭和十三年一月廿七日
當協會神戸支部では一月廿七日午後六時より海運俱樂部に於て當協會評議員中日實業副總裁高木陸郎氏を迎へて新年總會を兼ねて講演會を開催、今井法學博士古宇田高工校長、秋山商議副會頭、守屋神戸市助役、小松神戸聯隊區司令官、松尾忠二郎氏、進藤神戸新聞社長等會員五十餘名出席、一同晚餐を共にしたる後高木評議員より「對支經濟工作」に就いて講演あり終つて座談會に移り、種々懇談を交して午後九時閉會した。

講演會

昭和十三年二月廿七日
那華中書局重役村上蕃氏並に日本港灣從業組合神戸支部長野村秀雄氏の歡迎の意を兼ねて二月十六日午後七時より海運俱樂部に於て座談會を開催した。

座談會

昭和十三年十二月二十六日
當協會神戸支部では舊臘十二月二十六日午後七時より神戸市商工會議所に於て當協會副會頭京大名譽教授矢野仁一博士を中心に座談會を開催、支部會員今井博士、奥村少將等三十餘名出席、今井博士の挨拶に次いで「中國に對する我が文化工作を如何にすべきや」を主題にそれぞれ意見の開陳あり、懇談を交して午後十時散會した。

座談會

昭和十三年二月十六日
最近滿支視察旅行より歸朝された、支部理事瀧原化學工場社長村井常三氏、支

支部聯合理事會

昭和十四年八月廿七日
當協會神戸支部主催にて八月二十七日午後五時より神戸菊水に於て、京阪支部

聯合理事會を開催、京都支部稻垣、下村堀場各理事、大阪支部濱崎、角野、下地各理事、神戸支部今井、松村、奥村、藤村、黒瀬各理事、鹽見主事出席、今井理事司會の下に最近の時局問題に就き種々懇談を盡したる後、午後九時散會した。

神戸市講演會

—昭和十四年十一月十二日—

當協會神戸支部主催の講演會は十一月十二日午後七時より同市海員會館に會頭松井石根閣下、評議員末次信正閣下、理事下中彌三郎氏を迎へて開催、鹽見主事司會の下に皇居遙拜、皇軍將士の武運長久祈願の黙禱を捧げたる後、進藤理事の開會の辭に次いで下中理事より「大陸經濟建に就いて」末次大將より「世界的動亂と皇國の使命」松井大將より「時局所感」の演題下にそれ／＼講演、會員一般

聴衆參千餘名に非常な感銘を與へ最後に末次大將の發聲にて 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り盛況裡に午後十時散會した。

熊本縣大亞細亞協會發會式

—昭和十三年五月二十六日—

熊本縣大亞細亞協會發會式は當協會會頭松井石根大將をはじめ伊藤述史公使、當協會理事鹿子木員信博士、西原矩彦少將を迎へて五月二十六日午後二時より熊本市公會堂に於て舉行された。藤岡縣知事、深水中將、山隈市長、脇山町村長會長、三善代議士、小西總務、西岡學務兩部長、松崎、中根、城島、若竹、平野、中村各少將、村山藥專校長、中山商工會頭、小山、吉田町村長會兩副會長、深木九日、高木九州兩新聞社長、阿部野海協理事長をはじめ會員一般有志、市内中等

學校生徒等約三千餘名參會、西岡學務部長の開會の辭に次いで一同東方遙拜、藤岡縣知事より協會の目的、設立經過報告を兼ねて式辭あり、山隈市長、脇山町村長會長、赤星縣教育會長(山下副會長代)三氏の祝辭、祝電の披露ありて發會式を終了、引續いて同所に於て熊本縣大亞細亞協會主催の下に時局講演會を開催、鹿子木員信博士より「支那事變の真相とその對策」伊藤述史公使より「現下の國際狀勢」と題してそれ／＼詳論され、最後に松井大將より挨拶を兼ね大亞細亞主義に就いて講話あり、深水中將の發聲にて天皇陛下の萬歳を奉唱して午後五時盛會裡に散會した。

猶熊本縣大亞細亞協會は事務所を縣廳内に置き事業として縣民に對する亞細亞意識の鼓吹、亞細亞諸國の國情紹介、他の亞細亞民族に對する皇國文化の普及宣傳、機關雜誌の配付等を行なふ。

臺灣大亞細亞協會の事業概況

昭和十年度之部

第三回總會

第三回總會を二月十五日午後二時半より表町鐵道ホテルに開催、來臺中の大亞細亞協會松井評議員、臺灣大亞細亞協會顧問平塚長官、高雄支部顧問内海知事、基隆の桑原市尹、荻洲參謀長、服部參謀大木憲兵隊長、大學教授、協會側よりは各役員幹事等出席、河村常任評議員より臺灣大亞細亞協會の産みの親である松井大將閣下の來臨を謝し、併せて今回柳川軍司令官を協會の名譽顧問に推戴せる旨報告を爲し議事に入り、貝山幹事より庶

務報告、池田幹事より會計報告ありて三時十五分總會を閉じ、それより松井大將閣下より大亞細亞主義運動に關する講話あり終りて、同大將中心の座談會に入り荻洲參謀長、大木憲兵隊長、服部參謀の諸氏より大亞細亞運動に關する種々の意見希望等あり、懇談を交して四時半散會した。

猶大亞細亞主義講演會を同午後七時より鐵道ホテルに開催、佐藤幹事より「大亞細亞主義の立場」について、酒井武官より「比律賓管見」と題し、松井大將より「東亞の情勢と國民の覺悟」なる演題の下に約一時間に亙る講話あり、盛會を極め午後九時散會した。

昭和十一年度之部

常任評議員會

常任評議員會を八月十四日午後三時より表町鐵道ホテルに於て開催、終りて比島視察學生旅行團一行の歡迎茶話會を開く、貝山幹事開會の挨拶を述べ、一行の引率者高田市太郎氏より謝辭あり、學生諸氏よりそれ／＼比島視察に對する感想の披瀝あり、懇談を交へて五時散會した。

比島學生視察團歡迎會

第二回比島學生本邦視察團來臺の歡迎會を四月十四日午後より臺北市表町鐵道ホテルに於て開催、一同晚餐を共にしたる後、臺北交響音樂會を開き歡迎裡に午後十時散會した。

講演會

比律賓國立大學教授ピオ・デュラン博士及び比律賓大亞細亞協會々長望月音五郎兩氏の來臺を機とし、六月十三日午後四時より鐵道ホテルに於て歡迎座談會を開催、終りて同午後七時よりホテル餘興場に於て講演會開催、貝山幹事より開會の挨拶ありたる後、望月氏より「比律賓大亞細亞協會の現状」と題し、デュラン博士よりは「所感」をそれ／＼講演あり、盛會裡に散會した。

尙デュラン博士は六月十六日午前六時臺北發の飛行機にて福岡に向け出發された。

財團法人設立許可

臺灣大亞細亞協會財團法人設立の件に關しては、豫て請願中のところ昭和十二年一月二十日附を以て許可指令下附せられた。

歡迎會

日暹親善藝術使節吉田晴風氏外十一名の來臺を機とし、二月三日午後三時より臺北市公會堂に於て歡迎會を開催、一行の尺八、琴、長唄、舞踊等の披露ありて盛會裡に散會した。

座談會

福建省政府委員林知淵、關仲義兩氏の

來臺を機とし、三月十一日午後三時より臺北市内鐵道ホテルに於て座談會開催、竹藤幹事の挨拶ありて後、萩洲參謀長、坂本外事課長、木村泰治、郭延俊、小園隆哉の諸氏並貝山、佐藤兩幹事よりそれ／＼所感の披瀝あり、午後四時散會した。

演奏會

日暹親善藝術使節吉田晴風氏一行の歸路を迎へて三月十二日同十三日の兩日に亘り臺北市公會堂に於て演奏會を開催、非常なる盛會裡に終了した。

座談會

福建省新聞記者臺灣視察團の一行を迎へて三月十八日午後三時半より市内鐵道ホテルに於て臺北記者團並協會幹部一同との座談會を開催、忌憚なき意見の交換をなし午後五時散會した。

昭和十二年度之部

比島學生見學團歡迎會

比島學生見學團一行の來臺を機とし四月十五日午後六時より表町鐵道ホテルに歡迎晚餐會を開催、竹藤幹事の挨拶ありて後、比島側よりヤナリオ氏、レーエス檢事、ウンシヨン嬢よりの謝辭並に挨拶あり、續いて八時より餘興場に於て一行歡迎音樂舞踊の夕を催し驥をつくして十時散會した。尙一行は十六日午前九時二十二分臺北驛發列車にて内地見學の爲め出發した。

歡迎懇談會

第五回臺北水泳競技會出場の爲め來臺せる比島選手一行を迎へて五月十三日午後七時半より臺北市内鐵道ホテルに於て

定期總會

歡迎懇談會を開催、大澤幹事の挨拶に次いで比島代表ナブレ・マリアノ氏より謝辭あり、種々懇談を交へ、和氣霽々裡に九時半散會した。因みに比島大亞細亞協會々長望月音五郎氏も臨席された。

當協會定期總會を七月八日午後四時臺北市表町鐵道ホテルに於て開催、貝山幹事より庶務報告として財團法人認可の件寄附金收納の状況、臺中、高雄兩支部の活動状況等につき説明あり、池田幹事より昭和十一年度の決算報告あり、猶ほ昭和十二年度の豫算に關しては貝山幹事より補足説明あり、満場異議なく可決した。

次いで大澤幹事より臺灣大亞細亞協會の事業促進方策につき會員諸氏に意見の發表を求め、白鳥勝義、北條熊人、翁瑞春其他の諸氏よりそれ／＼所見の開陳あ

昭和十三年度之部

暹羅訪日學生歡迎會

り、役員の補缺は理事會一任に決定し、午後六時散會した。

四月十三日午後七時より臺北表町鐵道ホテルに於て、暹羅國訪日學生視察團(三木團長以下十名)の來臺を機に、同船にて寄臺したる佛領交趾支那西貢の鹽田商會主鹽田氏の歡迎の意を兼ねて、臺灣大亞細亞協會主催の下に歡迎晚餐會を開催、佐藤理事より歡迎の挨拶、三木團長より謝辭並に暹羅國の近狀に就いて述べられ、次いでブラバア君(小學校教師)の日本語の謝辭、鹽田氏より佛領印度支那に於ける支那事變後の實狀談更にブンテイヤン君(商業學校生徒)の挨拶あり、一同晚餐を共にしつゝ、午後九時散會した。

比島學生訪日團歡迎會

第四回比島學生訪日視察團々長ホセ、ラニレス博士(比島大學教授)一行十五名を迎へて、四月十五日午後六時半より臺北市鐵道ホテルに於て臺灣大亞細亞協會、大阪商船共同主催の下に歓迎晩餐會を開催、臺灣大亞細亞協會幹部總督府加藤外事課長、越本翻譯官外係員、石井臺北市尹其他官民十數名出席、協會並に一般を代表して大澤理事、中村大阪商船支店長の歓迎の挨拶に次いでマニラ大學教授ベルソーサ博士、パシコラン檢事の謝辭あり、晩餐を共にし歡談を交し石井市尹の發聲にて視察團の萬歳を三唱したる後、演藝場に於て日本舞踊を觀賞、午後十時散會した。

南支調査委員會

臺灣大亞細亞協會では今回南支調査委

員會を設けて、南支今後の新情勢に則應する事となり、豫ねて各方面の専門家に調査委員を委嘱中であつたが、五月十七日午後四時半より臺北市鐵道ホテルに於て最初の南支調査委員會を開催、河村理事長代理大澤監事より從來の事業經過報告あり、各部主査の選任並に今後の調査方針等に關して協議をなした。同委員會は庶務、政治、社會、金融、經濟、指導、國際貿易、運輸交通、拓務、資源の八部門に分ち、各部に於てそれ々々専門的に調査研究をなすとともに本調査は机上の調査を避け諸情勢に適合すると共に直ちに具體化に役立つ如き成案を得る事を目標として居る。南支委員會各部主査は左記の諸氏である。

各部主査

(庶務部) 河村 徹(政治社會部) 木村泰治
(金融經濟部) 有田勉三郎(指導部) 永井 潜

(國際貿易部) 池田卓一(運輸交通部) 松本虎太
(拓務部) 日下辰太(資源部) 素木得一
五月二十一日午後三時より南支調査會運輸交通部は鐵道ホテルに於て部會を開き、松本(虎)主査の外、三卷、松本(晃)速水、片山、池田、安座上、廣瀬、貝山の諸員出席調査の方針に付き協議なし、毎週土曜日午後會合を催し調査を進行する事に決定した。

六月四日午後一時より南支調査會指導部は、鐵道ホテルに於て第一部會を開催、松永、大澤、白鳥、今村、深川、橋爪の各委員及庶務部池田委員出席、大澤委員より從來の經過報告ありて後、今後調査の進行上大體の方針及び範圍、輪廓等に就いて協議をなした。

資源調査部に於ても六月十五日午後三時より鐵道ホテルに最初の會合を催し、種々協議をなし調査進行上事務分擔を決

定した。

金融經濟部は六月三十一日午後二時より鐵道ホテルに第一部會開催、有田主査より調査範圍について一同に謀り各々部署を決定した。

定期總會

臺灣大亞細亞協會第五回定期總會は、七月十八日午後四時より臺北市鐵道ホテルに於て開催、河村理事長議長席に着き貝山幹事より昭和十二年度事業報告並に昭和十三年度の豫算に就いて説明あり、池田幹事より會計報告ありて異議なく承認、總會を終了した。總會終了後、臺灣大亞細亞協會より中支並に北支の現地調査に派遣した三島文平氏より現地報告、特に宣撫方面の件に就いて報告あり午後五時半散會した。

座談會

臺灣大亞細亞協會主催の下に八月三日午後四時より臺北市鐵道ホテルに於て支那事變從軍記者座談會を開催、臺灣軍司令部中井參謀、臺灣日々、臺灣日報、臺灣新聞、新民報各社從軍記者の諸氏、協會池田、貝山各理事等出席時局局柄有意義の會合であつた。

講演會

八月十二日午後七時半より臺北市鐵道ホテル餘興場に於て、神代文字の研究者田多井四郎治氏の「世界文化の根源と我が學國精神」と題する講演會を開催、來聽者に多大の感銘を與へた。

南支調査會

九月十二日午後四時より鐵道ホテルに於て、南支調査會拓務部々會を開催、大體の目標を定め、各事業別に資料の提出

を求むることとし、各事業別に就いての分擔委員を決定した。
九月二十二日午後四時より鐵道ホテルに於て指導部々會を開催、各部主査の聯絡會議を開いて相互の聯絡を取り、同時に主査の意見を聽いて各部の要領を取纏めることに大體の方針を決定し、對支方策、華僑對策等につき協議をなした。

講演會

十月十九日午後六時より鐵道ホテルに於て東京大亞細亞協會理事犬塚大佐の來臺を機會に同大佐の歡迎の意を兼ね晩餐會を開催、臺灣大亞細亞協會並に南支調査會より河村、貝山、佐藤、大澤、深川、牛尾、池田、松本、素木、玉木、三卷、石井、土居、竹藤の諸氏出席河村理事長の挨拶、犬塚大佐の謝辭あり、續いて二階圖書室に於て同大佐より猶太問題に就い

て講演あり感銘を與へて散會した。

臨時總會

十二月十五日鐵道ホテルに於て、南支調査會綜合調査報告書の完成せるを機會に臨時會員總會を開催、集會者四十餘名、河村理事長議長席に着き、貝山理事の庶務報告、佐藤理事の調査書完成の經過報告あり、次いで河村理事長より現下の時局より南支方面の特に重要視さるべきを説き、この際協會として聲明を發したき旨を述べ、大澤幹事は下記の聲明案を朗讀、滿場一致可決し、該聲明の要旨を、近衛首相、大本營陸海軍部、南支最高指揮官その他要路へ向け打電した後、一同懇談を交して午後五時散會した。聲明全文左の如し。

聲明

聖戰茲に一年有半、今や日支兩國の進むべき大道漸く顯現せられ、東亞の破局を救

ひ得たるのみならず新秩序建設への希望前途に輝として輝く、これ實に御後威の然らしむるところなると共に、皇軍將兵の勇猛果敢、死を見ること歸するが如き大精神の賜に外ならず、銃後國民の協心戮力と相俟つて、眞に皇國日本の精華と謂ふべきなり臺灣大亞細亞協會は、皇軍南進の作戰に先立ち、昨年より南支に關する綜合調査の必要を感得し、同協會内に南支調査委員會を設け、官民各方面に亘る専門家を委員に委嘱し、爾來その調査に當りしが、その途中に於て、去る十月皇軍バイアス灣敵前上陸の快舉、續いて廣東攻略の雄圖成り、南方支那綜合調査の必要なるを益々痛感せり依て更に調査を急ぎ、十一月末漸く指導原理、政治社會、運輸交通、國際貿易、金融、拓務、香源の七部門、數十項に亘る綜合的調査の集を得たり。南支に關する此の種の綜合調査は、蓋し本調査を以て吾國最初のものと信ず。然るに右綜合調査の示唆する所に據れば南支の持つ特殊性は、中北支の夫れに比し喫緊切實の度に於て毫も劣るものに非ず、寧ろ華僑對策等の點に於てはより以上重大なるを確認せり。依て本協會は

南支對策の速かなる確立を要望すると共に、次の各項の即時實現を庶幾し敢てその旨を天下に聲明せんとす。

- 一、南支は排日思想の淵源、歐米依存の據點にして、其肅正と宣撫とは東洋平和のため絶対に必要なり。
- 二、廣東に速かなる新政權の樹立を待望し東亞建設の南方據點たらしむると共に、文化工作に留意し、在來の惡思想の根源を芟除、以て日支滿一體の協同主義を培養扶植すべし。
- 三、南支對策は固より帝國の國是に順應すること勿論なれども、同時に南支の重要特殊性たる華僑を忘る可からず、一千萬に近き南洋華僑の財力並に潛勢力は半平として抜くべからざるものあり、其向背は南支のみならず、汎く南洋一帯に亘る吾が貿易の盛衰に關するもの多く、延いては日支將來の國交にも重大なる關係を有す。是れ特に華僑問題につき政府要路の善處を要望する所以なり。

右聲明す

昭和十三年十二月十五日

臺灣大亞細亞協會

中國大亞細亞協會の事業概況

昭和十一年度之部

昭和十年十一月松井評議員並びに中谷幹事の北支訪問を契機として此地に大亞細亞協會設立の議、支那側官民有志の間に擡頭しつゝあつたが、北支那に於ける政界、實業界、操觚界等の有力先覺者に依りて中國大亞細亞協會籌備會設立せらるることとなり、同年十二月一日天津馬廠道西湖飯店に於て創立發起人會開催せられ、左の如き宣言書並びに規約を滿場一致を以て可決し、總裁に李盛鐸氏、副總裁に高凌霨、齋燮元兩氏を推し、贊成人として、韓復榘、秦德純、蕭振瀛、程克

の諸氏も加盟することに決定し、今後の方針、東京大亞細亞協會との連絡等に關して協議を行つた。

中國大亞細亞協會宣言

中國は往昔時代にありては閉關自守し唯だ中國あるを知つて世界の情勢に昧く、近く世界開通し列國林立し往來既に夥しく交渉更に繁し、事實を以て論ずれば既に深閉固拒し能はず、國力を以て論ずれば、又孤立獨存し能はず。蓋し以前の中國は中國の世界たり、今後の中國は世界の中國たり、情況既に異なり處置自ら異なる、此れ中國が近世以來毅然として國際團體に加入せる所以にして毫も疑

議なきなり。然し六十年來西力東漸し亞洲各國此れより多事、此れ稍々近世史に明かなるもの、共知する所、而して亞洲各國自身杳然として覺るなく、禍福を共にするを知らざるのみならず、艱難を互に濟ふるを求めず、且つ箕豆相煎じ甘んじて相争の鵲蚌をなし唇亡びて齒寒く、臍を嚙むも及ぶなきを致す。何ぞ肝膽を披瀝して風雨同舟を冀はざる、此れ亞洲各國が速かに深く自ら覺醒すべき所なり。夫れ亞細亞は亞細亞人の亞細亞なり。既に是の如かれば亞細亞各國は如何にしても精誠團結し、亞細亞に堅定不拔の基を確立し、以て意見を交換し、共同の利害を貫徹すべし。此れ亞細亞人が速

に研究検討すべきものなり。亞細亞に國するものにして中國は大、日本は強、兩國の責任は既に重し。然るに進行何ぞ遅緩なる。日本は既に大亞細亞協會を設立す。我中國豈漠然たるべけんや。同人等此に感ずる所あり。即日中國大亞細亞協會を天津に成立す。特に此に宣言し以て趣旨を述ぶ。

中谷幹事歓迎會

天津中國大亞細亞協會に於いては當協會常任幹事中谷武世氏の北支來訪を機とし六月十三日午後七時中國大亞細亞協會本部に於て歓迎會を開催、副總裁高凌爵、齋燮元氏以下左の諸氏出席、中國大亞細亞主義運動に就き種々懇談を交換する所あり九時半散會した。出席者左の如し。
中谷武世、高凌爵、齋燮元、陳之驥、王永泉、秦華、李盛鐸、吳毓麟、陸宗輿、王桂

林、楊文愷、杜錫鈞、劉彭壽、陸錦、盧香亭、勞之常、孫洞宇

昭和十二年度之部

總裁後任推戴

本協會總裁故李盛鐸氏の後任者推選の件に關し、五月十七日全體會議を天津に開催、總裁に齋燮元氏を副總裁には吳毓麟氏を推戴することに全會一致決定した

時局宣言發表

中國大亞細亞協會は時局に對しその態度を中外に宣明する爲八月二十二日午後一時、總裁齋燮元、副總裁高凌爵氏等首脳部會合し協議の結果、左の如き時局に對する宣言を發表した。

宣言

亞細亞に對する西力の壓迫未だ去らず、更に近時共產黨の暴威愈々猖獗ならんとする秋

に當り、中日兩國に兵火を見るに至れるは眞に遺憾とする所なり、國民黨の抗日政策が必ずや中國と東亞を誤まるの日あるべきは吾等の夙に深憂せる所なり。國民黨の政權掌握以來民を苦しめ國を誤り、更に輕々隣邦と事を構へて民生を塗炭に苦め毫も顧る所なし。今日の南京政府は共產黨及びその他の外力の傀儡にして眞に中國人民自らの政府に非ず。今回の事變は禍を轉じて禍となし、東亞禍亂の根源を伐採し、人民の意思を尊重する眞に中國人の中國政府を建設するの好機なり。我國は五千年の文化の國なり。必ず道を以て立國の基礎とせざるべからず。故に吾人は先づ河北の地に始め、漸次これを模範として全國に及ぼさんとす。河北自治の建設は中國再建の前提にして又亞細亞建設の發端なり。隣邦日本は決して侵略の意圖なきことは日本政府の屢々宣明する所なり。吾人は善隣の道を確信して茲に自治建設の道に就かんとするに當り、時局に對する方策大綱を決定する所あり。左の如し。
一、共產黨排斥、東亞防共協定の設定
二、國民黨排撃、河北自治體制の確立
三、日滿支經濟合作の實現
四、東方精神の發揚、中日共同文化機關の確立

當協會發行機關誌及パンフレット

機關誌

「大亞細亞主義」 毎月一日發行 定價三十錢 (第八卷第八十三號迄既刊)

パンフレット

陸軍大將 松井石根著

亞細亞聯盟論 (定價十錢)

文學博士 鹿子木員信著

皇國と亞細亞 (定價十錢)

法政大學教授 中谷武世著

大亞細亞聯合への道 (定價二十錢)

陸軍大將 松井石根著

華亞細亞聯盟之必然性及其意義 (定價十錢)

白岩龍平著

近衛霞山公の大亞細亞經綸 (定價十錢)

法政大學教授 中谷武世著

日華大亞細亞主義と日支關係 (定價二十錢)

法政大學教授 中谷武世著

北支問題と大亞細亞主義 (定價二十錢)

Asiatic Asia what does it Mean?

by Prof. TAKEYO NAKATANI

中谷武世著

支那再建の思想的基調 (非賣品)

中谷武世著

對支文化工作の諸問題 (非賣品)

中谷武世著

新支那の思想的性格と大亞細亞主義の基調

大亞細亞協會年報 (自昭和八年三月至昭和十一年三月)

當協會「大亞細亞主義」總目次

第一卷要目(自昭和八年五月)

創刊號要目(第一號)

世界に志し亞細亞に行ふ
支那を救ふの途
亞細亞の魂
ツラン主義より見たる滿蒙
帝國主義と共産主義
亞細亞經濟プロックの一考察
「驚異の國」日本
歐洲中心時代の終焉
長城線の戦況及支那一般情勢
日支關係の打開に就て
支那に於ける共匪の研究
聯盟退却後の滿府政局
聯盟退却と國策維新
「亞細亞人の亞細亞」とは何ぞや
亞細亞の指導者日本の責任
日本精神文化を指標として
滿洲建國と亞細亞の復興
日滿の結合を前提に
亞細亞聯盟の氣運
文明の母亞細亞の更生
大亞細亞協會創立經過

滿洲國獨立の意義を徹底せよ
「滿洲人の滿洲」確立
世界經濟の動向を觀る
對滿經濟政策の根本原則
感情的な日米關係
外國海軍士官の對日偏見
聯盟退却と國策維新
大亞細亞王道主義
孫文の大亞細亞主義
大亞細亞主義と故關島次郎
「驚異の國」日本
ツランの黎明、亞細亞の復興
北進途上の大和民族
滿洲國執政謁見記
國際印度と日本
印度新憲法批判資料
通商を中心とする日印關係
インドネシアの國民運動
蘭領印度經濟概観
世界の情勢と輿論
廣東に於ける大亞細亞運動
大亞細亞主義の世界的反響

六月號要目(第二號)

滿洲國獨立の意義を徹底せよ
「滿洲人の滿洲」確立
世界經濟の動向を觀る
對滿經濟政策の根本原則
感情的な日米關係
外國海軍士官の對日偏見
聯盟退却と國策維新
大亞細亞王道主義
孫文の大亞細亞主義
大亞細亞主義と故關島次郎
「驚異の國」日本
ツランの黎明、亞細亞の復興
北進途上の大和民族
滿洲國執政謁見記
國際印度と日本
印度新憲法批判資料
通商を中心とする日印關係
インドネシアの國民運動
蘭領印度經濟概観
世界の情勢と輿論
廣東に於ける大亞細亞運動
大亞細亞主義の世界的反響

七月號要目(第三號)

日印通商問題と大亞細亞主義
日土關係と汎民族運動
亞細亞指導任務の日英米關係
外交上の自由の就て
日英經濟抗争と蘭領印度
皇道的大亞細亞主義の主張
大亞細亞主義とアフガン
大亞細亞主義と支那人の誤解
日支新提携への道
日支停戦交渉に就て
「天佑の國」日本
非常時は今後あり
侵略論とソヴェト軍縮觀
東亞の將來と日本の覺悟
比律賓の曙
印度新憲法批判資料
淺溪閑談
現下の世界的問題と外國新聞の論調
大亞細亞主義運動の世界的反響

八月號要目(第四號)

何時まで靜觀主義ぞ
世界政局の動向と回教諸民族
日滿經濟關係調整に就て
支那の現状と大亞細亞主義
大義を宇内に顯揚するの途
財政、産業、國防
大亞細亞主義と皇道文化
大亞細亞主義建設の方途
霞山公の大亞細亞經綸に就て
佐藤信淵先生と大亞細亞主義
「天佑の國」日本
曇りゆく蘭領東印度
日滿は何を準備すべきか
土耳其民族運動の將來
獨立強化過程のイラク
支那農村崩壞の諸原因
支那國民黨の輪廓
ケルマ派の實體
英波石油抗争
現下の世界的問題と外國新聞の論調
大亞細亞主義運動に對する世界的反響
印度及西亞細亞情報
△印度 △アフガニスタン △イラーク
△土耳其 △波斯 △アデン △パレス
タイン

九月號要目(第五號)

南方國策の重要性
滿洲國の將來と王道政治
領土の社會理論と日本の位置
太平洋戰備論
黎明期の南洋
所謂蔣介石の特別寄稿に就て
西藏獨立の背後に動くもの
回教民族運動の考察
日暹提携論
眼を開いて亞細亞大陸を見よ
武士道の復活
「天佑の國」日本
印度國民運動スローガン
支那國民黨の輪廓
外蒙古事情
印度情報
西亞細亞情報
1 土耳其 2 波斯 3 埃及 4 アラビア
廣東に於ける大亞細亞主義運動
現下の世界的問題と外國新聞の論調

十月號要目(第六號)

船を造るべき大潮
亞細亞か歐羅巴か
支那を中心とする列國空路戰
滿洲國幣制問題
盧山會議以後
印度支那との經濟關係
皇國の使命と世界統一の原理
天業恢弘の國策と蘇聯邦
三六年の世界危機と經濟國策
歐洲の新噴火口
汎回教主義の新意義
日印提携に就て
日本の長き企畫
シリア、イラクの旅
古北口より
新疆問題と土耳其の輿論
バラセル群島領有權問題
南支に於ける佛國の謀策
印度情報
西亞細亞情報
廣東に於ける大亞細亞主義運動
現下の世界的問題と外國新聞の論調

十一月號要目(第七號)

新強に注目せよ	卷頭言
皇亞細亞聯邦國の理想	鹿子木員信
日本精神と大亞細亞主義	藤澤 親雄
日英衝突の必然性	半田 敏治
經濟外交の指針	太田 耕造
軍備縮小と帝國海軍	關根 郡平
佛領印度支那と我が對南經濟策	横山 正脩
海の生命線と我が對南經濟策	竹井 十郎
タメルラン王家の最後	花岡 止郎
イスラム(回教)の女性觀	佐久間貞次郎
シリヤ・イラクの旅	中平 亮
日本の長き企畫	ワトキン・デビス
風雲を呼ぶ安南政情	本協會調査部
蘇聯邦と新強	同
印度國民運動の父チラーク	同
東南亞細亞情報	同
印度情報	同
西亞細亞情報	同
臺灣に於ける大亞細亞主義運動	同
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同

十二月號要目(第八號)

皇國主義と大亞細亞主義	卷頭言
民族の轉進と大亞細亞主義	橋本 增吉
危機の科學的檢討	杉森孝次郎
非常時日本の國策	大西 齊
福建人民政府の出現と其影響	中山 優
現下時局と國民精神の作興	松井 石根
皇國經濟再建の指針	下中彌三郎
日英衝突の必然性	半田 敏治
日英關係と國際政局	ボース
佛領印度支那の革命運動	横山 正脩
世界政治に於ける蒙古	ワトキン・デビス
歲 晚 雜 記	中谷 武世
印度國民運動の父チラーク	本協會調査部
新 疆 事 情	同
アフガニスタン事情	同
英國に揚る對日一戰論	同
印度事情	同
西亞細亞事情	同
滿洲に於ける大亞細亞主義青年運動	同
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同
一、米蘇關係と日蘇關係 二、日支關係	同
三、日米關係四、東洋平和會議開催問題	同

第二卷要目(自昭和九年十一月至昭和九年十二月)

一月號要目(第九號)	卷頭言
創立第二年を迎へて	村川 堅固
大亞細亞主義實現の可能性	内藤 智秀
文明の本質を檢ねて	關根 郡平
將來の列國海軍情勢	下中彌三郎
皇國經濟再建の指針	中谷 武世
大亞細亞主義の本質	今田新太郎
戰國國內の大亞細亞主義	宇治田直義
支那讀者の新日本觀	今田新太郎
外蒙古共和國の史的發展	滿川龜太郎
ツラン民族とツラン運動	今岡十一郎
十字路に立つ關領東印度	野波 靜雄
一九三四年の日本國民に寄す	波斯公使
新春に際し	滿洲國公使
日印會商と印度國民主義者	A.M. サハイ
蔣介石は何處へ行く	小島 龍興
印度農民の父パテル	デス・パンデイ
日本産業の世界的躍進	C. スモールウッド
新 疆 論	M. シニクル
土耳其の近情	本協會調査部
新強に於ける蘇英の角逐	同
蘇紙の大亞細亞主義運動觀	同
東南亞細亞情報	同
西亞細亞情報	同
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同
亞細亞學生聯盟の結成	同

二月號要目(第十號)

南方國策の重要性再論	卷頭言
東洋平和維持の全責任	廣田 弘毅
國民的世界的社會統制	杉森孝次郎
日本文化の世界性	半田 敏治
更生亞細亞と皇國の使命	藤原 茂
時難にして近衛霞山公を憶ふ	横矢 重道
皇國經濟再建の指針	下中彌三郎
滿洲帝國の建制に就て	鄭 孝 賢
帝政滿洲の將來	菊池 武夫
新強の重大性に就て	丁 士 源
印度のカースト制度研究	趙 欣 伯
比律賓獨立問題の推移	田中 香苗
緊急を要す日印の協力	中馬 多彦
東洋に現はれたる新旋律	野波 靜雄
イスラム(回教)と蒙古民族	R.B. ボース
蘭印土人の國民主義運動	H. コーン
極東に於ける英國軍備強化	A.C. ハンナ
東南亞細亞情報	本協會調査部
西亞細亞情報	同
大亞細亞協會臺灣支部發會式	同
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同

三月號要目(第十一號)

頌滿洲新帝國	卷頭言
維新の先覺大國隆正の思想	下中彌三郎
明治維新と元田永平先生	藤澤 親雄
汎東洋的な諸運動の檢討	内藤 智秀
日本文化の世界性	半田 敏治
大亞細亞主義の眞諦と順路	山田 武吉
アフガン、ネパール視察記	井出 鐵藏
讀 史 雜 俎	村川 堅固
成吉思汗の後裔は動く	村田 孜郎
ツラン運動とフィン民族	今岡十一郎
新強を繞る列國爭鬪戰	馬橋 四郎
印度のカースト制度の研究	中平 亮
蒙古王公の親輪	同
日本の政治的動向	シニペリエー
イスラームと近代文化	A.C. スीलマ
蒙古事情	本協會調査部
新強及西藏事情	同
日英會商と英國の對東洋攻勢	同
蘭領印度人の國民主義運動	同
印度事情	同
西亞細亞情報	同
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同
朝鮮に於ける大亞細亞主義運動	同

四月號要目(第十二號)

創立一箇年の業歴	卷頭言
大亞細亞主義と南方國策	中谷 武世
南洋の富源と南方工作	眞鍋 藤治
最近の英支關係に就て	太田宇之助
フォン・ゼークト將軍に呈す	半田 敏治
滿洲帝國の成立と我國の使命	橋本 增吉
朝鮮と大亞細亞主義との關係	山田 武吉
日蘇關係を何う觀るか	大山卯次郎
新強と「スメル」民族に就て	戸上駒之助
建武中興の精神	平泉 澄
讀 史 雜 俎	村川 堅固
蘭領東印度雜感	伊藤 昇
日英會商と英國の軍備強化	本協會調査部
危機に臨む對蘭印經濟關係	同
新強兵亂事情	同
ムツソリニの亞細亞觀	同
支那紙に現はれたる蒙古政情	同
滿洲國情報	支 那 情報
印度情報	支 那 情報
西亞細亞情報	支 那 情報
現下の世界的問題と外國新聞の論調	同
滿洲皇帝の登極	日本品の世界的進出
問題と日蘇關係	同

五月號要目(第十三號)

東亞自主への不没轉の歩武 卷頭言 中川 優
 日支聯繫の時運至る 下中彌三郎
 我が對外聲明の意義と含蓄 三宅大三郎
 支那の行途を語る國民黨 田口利吉郎
 武道より觀た大亞細亞主義 關根 郡平
 南洋委任統治諸島の重要性 佐藤 郡平
 明石・柳生時代の南方經綸 角谷 治郎
 暹羅の政情 井出 鐵藏
 ネパール、アフガン事情 堀口九萬一
 讀史 雜俎 村川 堅固
 西歌人の日本觀の變化 堀口九萬一
 日本民族の起源とフィン語 江 實
 印度人と支那人の民族性 東恩純寛博
 有色世界革命論 シュベングラ
 西藏社會に於ける婦人の地位 O・ニール
 アフガンの政治的將來 本協會調査部
 蘭印の共產主義運動 同
 極東オリピック問題 在滿有志一同
 滿洲國情報 支那情報 東南亞細亞情報
 印度情報 同
 西亞細亞情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 外國の對支策動を排する外務省の非公
 式聲明 廣田外相ハル長官非公式挨拶交
 換 軍縮問題 日英通商交渉

六月號要目(第十四號)

英米の共同方略 卷頭言 杉森孝次郎
 門戶開放、九國條約、治外法權 稻原 勝治
 米國の對支把握 眞鍋 藤治
 日蘭會商の本質と我が對策 板垣征四郎
 東南亞細亞視察感想 下中彌三郎
 英國の經濟挑戰 今牧 白鈴
 醫學より觀た東西文明の交通 田口利吉郎
 武道より觀た大亞細亞主義 千原 楠藏
 英蘇の邊疆侵略と支那の保全 村田 孜郎
 内蒙自治政府樹立に就て ラティモア
 蒙古の運命と東亞の政局動向 香取 桂一
 新蒙に於けるソヴェットの制衡 村川 堅固
 讀史 雜俎 堀口九萬一
 西歌人の日本觀の變化 本協會調査部
 雲南に對する英佛の活躍 同
 新 概論(一) 同
 滿洲國情報 支那情報 東南亞細亞情報
 印度情報 同
 西亞細亞情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 日英通商關係 日支關係 我外務省非
 公式聲明問題 軍縮問題

七月號要目(第十五號)

日蘭會商 卷頭言 內藤 智秀
 民族の發展と戰爭 今牧 白鈴
 民族及文化の純一性に就て 大藏 公望
 亞細亞和平の鍵鑰 田口利吉郎
 大亞細亞主義と日滿文化國策 大西 齊
 日支關係の調整難 稻原 勝治
 米國の對支把握 澤村 幸夫
 南洋華僑の經濟的没落 竹井 十郎
 日蘭會商と蘭印の邦品排撃 村川 堅固
 讀史 雜俎 堀口九萬一
 西歌人の日本觀の變化 H・コーン
 東洋と西洋 江 實
 日本民族の起源とフィン語 小島 龍興
 支那農村問題と土匪 本協會調査部
 日蘭會商關係研究資料 同
 新 概論(二) 同
 滿洲國情報 支那情報 東南亞細亞情報
 印度情報 同
 西亞細亞情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 日英通商關係 一般軍縮問題 日支關
 係 大亞細亞主義學生運動紹介(一)

八月號要目(第十六號)

東亞の安定力と既存軍縮條約 卷頭言 杉森孝次郎
 軍縮會議と國民の統一的信念 關根 郡平
 我海軍の立場 石丸 藤太
 太平洋に於ける英國の軍縮 大西 齊
 北支懸案の解決に就て 藤井 虎雄
 政治境界を確立した滿支關係 神田 正種
 土耳其及近東の近情 寺澤 堅二
 山田長政時代の日暹關係 下村 宏
 日本の國策としての人口問題 橋本 增吉
 非常時解消工作の效果 今田新太郎
 「蘭印と日本の立場」を讀む 山岸多嘉子
 婦人より觀た大亞細亞主義 今牧 白鈴
 五行説の起源に就て 田口利吉郎
 武士道文化と大和民族の行動 下中彌三郎
 軍縮問題其他(時事漫評) 本協會調査部
 日蘭會商經過(一) 同
 通車問題解決經過 同
 比島獨立法案 同
 新 概論(三) 同
 滿洲國情報 支那情報 東南亞細亞情報
 印度情報 同
 西亞細亞情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 近代日本の進路 N・センチュリ
 最近の西蔵政情 支那 京 報
 印度の參政權問題 N・センチュリ
 大亞細亞主義學生運動紹介(二)

九月號要目(第十七號)

日英同盟説と軍縮問題 卷頭言 末次 信正
 軍縮問題に對する所見 太田宇之助
 盧山會議と北支政權の將來 今岡十一郎
 「第三獨逸國家」と國家主義 坂西 一良
 ナチス據頭と歐洲新國際情勢 太田 耕造
 海軍會議の暴風警報 生野 太郎
 此の「一戰」軍縮問題 水谷 吉藏
 華府條約廢棄と其合理性 下永 憲次
 アフガンの政情と日ア關係 立野 斗南
 印度獨立の必然性 R・B・ボース
 英印關係と印度國民運動 今村 忠助
 比島獨立問題と大亞細亞主義 佐藤 伊兵
 蘭印に對する再認識 田口利吉郎
 武士道文化と大和民族の行動 小倉清太郎
 ボルネオのワカナ(和冠)の唄 同
 プラット提督の軍縮論 同
 次期軍縮會議と英國の態度 タイムス
 比島獨立法案(二) 本協會調査部
 盧山會議經過 本協會調査部
 英佛の雲南に於ける角逐 支那 紙
 日蘭會商經過(二) 本協會調査部
 亞細亞各國の情報及資料 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同
 亞細亞問題と外誌論調 同
 日滿經濟ブロック ロンドン・タイムス
 支那の經濟的將來 マンチエスタ

十月號要目(第十八號)

國際聯盟と支那 卷頭言 竹井 十郎
 蘭印と日本 大西 齊
 滿洲事變三週年に際して 杉森孝次郎
 滿洲國に關して 菊池 武夫
 在滿機關改革と國內問題 眞方 勳
 在滿機關の確立に就て 中山 優
 太平洋平和維持の前提條件 鹿子木員信
 華府條約の思想的背景 內藤 智秀
 軍縮問題の歴史的展望 稻原 勝治
 我軍縮方策の意義 平田 晋策
 英國海軍を論ず 滿川龜太郎
 亞細亞と大英帝國 村川 堅固
 讀史 雜俎 佐藤 郡平
 兩 廣 遊 記 同
 軍縮と國防と財政 下中彌三郎
 赤色動亂の四川 小島 龍興
 中日關係と中國再建の方途 本協會調査部
 在滿機關改革案要旨 同
 中華民國憲法草案(一) 同
 熱 河 省 近 情 同
 新 概論(四) 同
 日蘭會商經過(三) 同
 比島獨立法案(三) 同
 亞細亞各國の情報及資料 同

十一月號要目(第十九號)

海軍問題と門戸開放機會均等 卷頭言
 大亞細亞主義と先覺浦敬一 鹿子木員信
 再轉期に立つ支那政局 松井石根
 支那は對日認識を是正せよ 吉岡文六
 軍縮會議を中心として 關根郡平
 國王の遺難と歐洲政局 坂西一良
 蘇聯邦の國際聯盟加入に就て 神田正種
 北鐵護渡後の日滿關係 高橋利雄
 蘭領東印度の歸趨 眞鍋藤治
 印度の危機と日本 サバルワル
 武士道文化と大和民族の行動 田口利吉郎
 ヤクーツ民族事情 ウイノクロフ
 廣東見聞記 片岡清
 中日關係と中國再建の方途 赫義志
 來るべき軍縮會議に就て ヲアイオター
 西藏問題と班禪喇嘛の地位 エンダース
 新 概 觀(五) 本協會調査部
 中華民國憲法草案(二) 同
 北鐵護渡細目案 同
 日蘭會商經過(四) 同
 亞細亞各國の情報及資料 同
 亞細亞問題に對する外紙論調 同
 日本と海軍會議 M・ガーディアン
 支那と銀問題 P・アフエアス
 暹羅革命の思想的背景 P・アフエアス

十二月號要目(第二十號)

極東政治問題と國の態度 卷頭言
 日本外交の原理的基礎 杉森孝次郎
 九箇國條約と支那 藤澤親雄
 一般軍縮と國際政局 中山宣優
 海軍問題は即極東問題 大山卯次郎
 蔣氏の北支巡閱の意義 太田宇之助
 武力戦争と平和 中山久四郎
 生命を貫く繼承と存続性 内藤智秀
 民族闘争に就て 山田武吉
 讀史雜俎 村川堅固
 印度國民運動の動向 A・M・サハイ
 蒙古に於いて 高橋知義
 軍縮會議商日誌(一) 本協會調査部
 新 概 觀(六) 同
 滿洲居住蒙古族の歴史的考察 O・ラテイモア
 滿洲國石油問題経緯 本協會調査部
 日蘭會商經過(五) 同
 亞細亞各國の情報及資料 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同
 一、海軍縮問題 二、滿洲國石油問題 三、ザール問題
 亞細亞問題に對する外紙論調
 太平洋の安全保障問題 F・アフエアス
 海軍會議と鐵道問題 F・アフエアス
 日本棉業の墮退 エシニア

第三卷要目(昭和十年一月)

一月號要目(第二十一號)
 危機の發展と經綸への勇躍 卷頭言
 世界史の轉換期 村川堅固
 日本精神と世界的文化 橋本増吉
 英蘭密約と南溟の低氣壓 竹井十郎
 軍縮會議感 岡村海
 所謂三五・六年の國際危機 生野太郎
 軍縮會議と米の威嚇政策 渡邊公使
 年頭日本國民に寄す 阿波公使
 三年の印度國民運動 R・B・ボース
 日本國防計畫と西北問題 アフガン公使
 滿蒙が我に求むるもの 滿洲國公使
 在滿新機改革の眞精神 下永憲
 新興蒙古の近情 眞方一良
 エチオピアと伊太利の抗争 庄新太郎
 國家發展と流行文化の清算 今中編三郎
 幕末外交史の一編 本協會調査部
 在滿機改革案全文 同
 軍縮會議商日誌(二) 同
 運籌國務院の施政方針 同
 印度憲法改革要綱 同
 新 概 觀(七) 同
 日蘭會商經過(六) 同
 亞細亞各國の情報及資料 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同

二月號要目(第二十二號)

對支實質工作急施の要 卷頭言
 軍縮會議と極東政治問題 佐藤忠雄
 華府條約廢棄後の諸問題 梅崎卯之助
 印度問題と日英關係 立野斗南
 國民を侮辱せる日蘭會商 竹井十郎
 邊疆赤化の危機 村田孜郎
 西北開發問題 香取桂一
 ザール復歸後の歐洲政局 坂西一良
 汎スラブと第三獨逸國家 今岡十一郎
 日本精神と世界的文化 橋本増吉
 愛と大義の日本 千家尊建
 林大八少將を憶ふ 田中隆吉
 ガンデイの後繼者は誰か D・バイディ
 蘇聯控制下の外蒙事情 本協會調査部
 新 概 觀(八) 同
 北鐵護渡交渉成立過程 同
 日蘭會商經過(八) 同
 支那共產黨の近狀 同
 亞細亞各國の資料及情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同
 亞細亞問題に對する外紙論調 同
 海軍問題解決の基調 エシニヤ
 日本貿易の脅威 ネーシヨ
 シンガポール根據地 T・タイムス

三月號要目(第二十三號)

日露戰役後三十年 卷頭言
 新世界觀の確立 中山優
 日本經濟の發展性と國防 下中編三郎
 對支國策の統制 杉森孝次郎
 東亞の安定勢力と支那 吉岡文六
 支那最近の經濟情勢 加藤敏三郎
 北鐵護渡成立後の對蘇政策 稻原勝治
 第七回蘇聯大會に於ける首相演說 神田正種
 ヘルハ廟事件と外蒙の重要性 高橋利雄
 印度問題と日英の關係 立野斗南
 蘭印を觀察して 今村忠助
 亞細亞民族運動叢書 M・フラジヤ
 インドネシア人の叫び G・ソコルスキー
 日本は何故戦ふか 本協會調査部
 ハルハ廟事件の経緯 同
 蘇聯控制下の外蒙事情(二) 同
 比島憲法草案 同
 亞細亞各國の資料及情報 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同
 ◇廣田外相議會演說反響◇北鐵交渉成立
 ◇宋軍の熱河侵入事件
 亞細亞問題と外紙論評
 滿洲國の門戸開放 エシニア一月號
 英印棉業協調 N・I・インデア
 日本と支那 M・ガーディアン

四月號要目(第二十四號)

滿洲國皇帝陛下を迎へ奉る 丁士源
 滿洲國皇帝陛下御來訪に就て 菊池武夫
 滿洲國皇帝陛下を迎へ奉りて 貴志彌次郎
 滿洲國獨立運動の回想 大西齊
 滿洲國皇帝御來訪と復讐運動 西山勇雄
 滿洲國の意義の再認識 高橋和義
 滿洲建國の回顧 太田宇之助
 日支提携と對支經濟援助 藤井虎雄
 王寵惠渡日の客觀的意義 竹井十郎
 日蘭神戶會商其他 立野斗南
 印度問題と日英の關係 眞鍋藤治
 亞利比亞復興運動の展望 坂西一良
 獨逸の軍備再建と歐洲政局 今岡十一郎
 希臘反亂事情 C・エディ
 統制されたる廣西省の近情 本協會調査部
 英國の極東軍備擴張 同
 北鐵護渡交渉正文 同
 最近の日支關係 同
 比島憲法草案(二) 同
 新 概 觀(九) 同
 亞細亞各地の近情 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調 同
 亞細亞協會に對する外紙論評
 「大亞細亞協會」 英M・ガーディアン
 大亞細亞の進軍 獨ライヒス・ポスト
 暹進日本の察哈爾工作と大亞細亞の進軍 佛ル・ボビニレイル

五月號要目(第二十五號)

三國の侵略的攻勢 卷頭言
皇道文化の發展と日滿提携 土肥原賢二
英國の極東軍備と我國策 杉森孝次郎
近世日本の南進政策 煙山專太郎
南洋の重要性と其の資源 竹井 十郎
喇嘛教と邊疆事情 多田 等觀
ネパールとの近狀 平等 通昭
北鐵護渡後の北方經綸 大藏 公望
北方國策 私見 近藤 義晴
獨逸再軍備と歐洲政局の思想 宇都宮希洋
日本海軍とチャットランド 大石堅志郎
偉人の 意義 内藤 智秀
大亞細亞運動と比律賓 P.デユラン
虛偽の獨立法と比島人の要求 B.ラモス
英印通商協定の破棄 R.B.ボリス
阿富汗新坦の近情 滿洲國の産業及經濟現狀
比島憲法草案(三) 新編概観(一〇)
滿洲國情報 支那情報 印度情報
東南亞細亞情報 西亞細亞情報
現下の世界的問題と外國新聞の論調
亞細亞問題に關する外誌論評
新嘉坡軍港を廢止せよ 英デリー・メール
印度新憲法と選舉制度 インディア
日支關係好轉と英米 O.アフェアス
支那當面の三大問題 上海中華日報

六月號要目(第二十六號)

天津の犧牲事件 卷頭言
支那の識者に與ふ 中山 優
日支提携の將來 高木 陸郎
日支問題と南京政府 島村 一郎
駐支公使昇格問題の檢討 大原 安雄
ダ・ボ兩海峡問題と日本 内藤 智秀
比島統治の腐敗と我が要求 B.ラモス
比島獨立と印度の解放 A.M.サハイ
比律賓獨立の意義 林 毅陸
比律賓獨立問題の考察 正木吉右衛門
米國海軍大演習の全貌 益崎 綱幸
近世日本の南進政策 煙山專太郎
暹羅の現狀と日暹提携論 今村 忠助
亞細亞の認識に就て 笠間 泉雄
邊疆に於ける英露佛の角逐 田中 香苗
支那農村とコミンテルン 千葉 山男
南支南洋の各國航空權爭奪 本協會調査部
比島憲法草案(元) 本協會調査部
露國の支那西北侵略史 新編概観(一一)
滿洲國情報 支那情報 印度情報 東
南亞細亞情報 西亞細亞情報
現下の世界的問題と外國新聞の論調
亞細亞問題に關する外誌論評
米比經濟關係の將來 エドバタイザ
亞細亞の覺醒と英米 アドバタイザ
日本を構成する諸要素 P.B.イタリヤ

七月號要目(第二十七號)

北支問題と日支關係調整 卷頭言
北支問題の根本要件 杉森孝次郎
北支問題の真相 中山 優
北支關係の發展 楠本 實隆
日支關係の二重政策 大西 實隆
日支問題の歸結 吉岡 文六
日支關係打開の捷徑 柳瀬 薫
日支事件と内蒙の將來 佐藤 佐
日支事件と内蒙の將來 村田 孜郎
日支經濟提携の批判 長野 耕造
英新内閣の對日外交 太田 正臣
米最近の對日攻勢 藤田 正臣
海と帝國の將來 生野 太郎
伊太利のエチオピア侵略 大山卯次郎
エチオピアの空を偲びて 惠夢 榮夫
新スラヴ主義とスラヴ聯邦案 今岡十一郎
露政下に在る 蘭印 竹井 十郎
最近の 蘭印事情 ベニグノ・ラモス
苛酷なる比島統治の實例 デス・バンディ
印度國民運動の現勢 藍衣社を解剖す
支那西北侵略史(二) 新編概観(一二)
現下の世界的問題と外國新聞の論調
亞細亞問題に關する外誌論評
東洋の指導者 暹羅 プラチャート
日本の對滿政策 暹羅 ターチャート
印度の國民的統一 米 エレン
支那の銀流出對策 米 カレントヒストリー

八月號要目(第二十八號)

絶大の關心を有す 卷頭言
北支思想工作の重要性を論ず 中谷 武世
日支關係と大亞細亞主義 村川 堅固
支那を一瞥しての所感 喜多 誠一
北支事件善後私見 柴山兼四郎
支那政局の今後の動向 島村 一郎
北支の新事態と日露 田中 香苗
大義名分を缺く東阿侵略 角岡 知良
伊・エ紛争問題と日本 下中彌三郎
伊・エ抗争の中心地より 庄子勇之助
白人帝國主義の黒人國劫略 宇都宮希洋
アフガニスタンの民族問題 天川 信雄
南洋の資源と我が南方經綸 石原廣一郎
我が南方經綸と海軍 關根 郡平
西力東漸と倭寇 岡本 良知
伊・エ紛争問題と各國の態度 本協會調査部
北支の資源と産業 本協會調査部
支那は何處へ往くか 馮 今
新編概観(一二) 本協會調査部
滿洲國近情 北支近情 中支近情 南支
近情 印度近情 東南亞細亞情報 西亞
細亞情報 本協會調査部
現下の世界的問題と外國新聞の論調
亞細亞問題に關する外誌論評
アフガニスタンの危機と二國侵略 M.ガーディアン
日本と回教運動 モスレム・ワールド
日本の對支認識 天津「大公報」

九月號要目(第二十九號)

松井大將の勇退と大亞細亞協會の運動 卷頭言
北支問題と大亞細亞主義 鹿子木員信
北支開發の一考察 高木 陸郎
對蒙政策私見 下永 憲次
滿蒙國境問題の檢討 高橋 利雄
國民經濟と海軍 梅崎卯之助
日 暹 提携 論 矢田長之助
南洋と我國策 飯泉 良三
動 南 支 島村 一郎
フィンランドの民族運動 田中 彌
大亞細亞主義運動と日本 M.ストラボルギ
英の偽購政策と印度新憲法 R.B.ボリス
海軍制限の新方式 バイオター
廣西省民團の概要 本協會調査部
新編概観(一四) 本協會調査部
亞細亞各地の近情 本協會調査部
現下の世界的問題と外國新聞の論調
◇日本の北支經濟開發 〇エチオピア問題
と日本 〇我が對加通商擁護法 〇英海相比
率主義放棄宣言
中日問題と國民政府の責任 北平農報社説

十月號要目(第三十號)

北支明朗化如何 卷頭言
正大の氣を伸ぶべし 松井 石根
領土の理論と亞米利加 杉森孝次郎
新國際原則の創造 綾川 武治
コミンテルン世界大會批判 神田 正種
末廣博士の「極東モンロー主義批判」を評す 下中彌三郎
支那觀の轉生 中山 優
列國の對支借款檢討 小室 誠
内蒙を旅して 村上 知行
シリアの近情 眞鍋 藤治
印度國民運動史 S.C.ボリス
英國の對支經濟勢力 本協會調査部
支那最近の金融及貿易 本協會調査部
支那は何處へ往くか 馮 今
暹羅最近の内政 本協會調査部
佛帝國主義下の雲南 本協會調査部
亞細亞各地の近情 本協會調査部
現下の世界的問題と外國新聞の論調
◇日支經濟提携 〇伊・エ紛争問題
◇海軍縮小會議 〇我が對加通商問題
亞細亞問題に關する外誌論評
新編に於ける列國の角逐 エシヤ
ツラン運動に對する彈壓 M.ガーディアン
最近支那の對外貿易 C.E.ジャーナル

十一月號要目(第三十一號)

北支の自治と防衛 卷頭言
 伊・エ紛争の世界史的意義 村川 堅固
 英吉利とスエズ運河 内藤 智秀
 大英世界政策とエチオピア 蒲川龜太郎
 英・佛・伊の地中海争鬪 佐藤 忠雄
 伊・エ紛争の展開と歐羅巴 大山卯次郎
 北支問題の 新展開 大西 齋
 新蘇聯加入と北支問題 村田 孜郎
 新國際原則の方向 綾川 武治
 南方經綸の實際 立野 斗南
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 北支自治運動の真相 本協會調査部
 河北經濟協會と南京政府 本協會調査部
 北支 補産事情 本協會調査部
 英領馬來の軍備狀況 本協會調査部
 一九三四年度日運貿易概況 本協會調査部
 英國の在支經濟勢力 本協會調査部
 滿洲國近情 北支近情 中支近情 南支近情 印度近情 東南亞細亞情報 西亞細亞情報 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇日支問題 伊・エ戦争 ◇日滿蘇關係
 リース・ロスの渡支 本協會調査部
 新疆と内蒙 北平晨報社説

十二月號要目(第三十二號)

中國大亞細亞協會宣言 中山 優
 北支自治の前途 下中彌三郎
 新幣制と英國の對支積極策 香取 桂一
 英國對支政策の煩悶 小室 誠
 幣制改革を繞る支那政局 長野 朗
 北支自治と蔣政權 三宅 義昭
 支那幣制改革の意義 緒方 静夫
 蘇聯の經濟工作と外蒙 高橋 利雄
 南洋群島展望 小西千比古
 我が南方經綸と蘭印 竹井 十郎
 航空政策と大亞細亞主義 加瀬 信雄
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 滿洲中小學生の大亞細亞主義 本協會調査部
 支那幣制改革の概要 本協會調査部
 綏遠教育及農産事情 本協會調査部
 埃及國民運動史概観 本協會調査部
 ◇滿洲國近情 北支近情 中支近情 南支近情 印度近情 東南亞細亞情報 西亞細亞情報 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇支那幣制改革 北支自治運動 ◇海軍々縮會議 ◇聯盟の對伊制裁
 「大亞細亞主義」第三卷總目次

第四卷要目(昭和十二年十二月)

一月號要目(第三十三號)
 北支自治と學生運動 卷頭言
 日支關係の根本義と吾等の信念
 日支合作と國策維新 松井 石根
 日支工作の結合に就て 中谷 武世
 九箇國條約の意義と其崩壞 長谷川光太郎
 我が軍縮方針と英米の態度 梅崎卯之郎
 年頭・日本國民に寄す
 滿蒙の指導原理ツラニズム 今岡十一郎
 日本と近東諸國との貿易關係 竹井 十郎
 我國と近東諸國との貿易關係 大森 三郎
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 五國海軍會議日誌 本協會調査部
 最近の新蘇事情 本協會調査部
 支那に於ける各國航空部の争鬪 本協會調査部
 蘭印の將來と日本 本協會調査部
 亞細亞諸國の資料及情報 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 亞細亞問題に關する外誌論評
 比島の將來と日本 C.ヒストリア
 佛領印度支那の不安 エ
 中國大亞細亞協會の創立經過

二月號要目(第三十四號)

英 蘇 と 東 亞 卷頭言
 日本の支那に對する決定方針 杉森孝次郎
 支那を一巡して 中山 優
 北支の經濟の獨立性 高橋 坦
 外蒙國境紛争の背景 稻垣 三郎
 軍縮會議不成立に際して 田中 香苗
 海軍會議撤退と東亞の政局 長谷川 清
 暹羅近情と日暹關係の將來 滿川龜太郎
 中歐の政治的動向に就て 大山 周三
 佐藤信淵の大亞細亞主義 松永 直吉
 三五年度の印度國民運動 松原 晃
 印度國民運動史 デス・ペンデイ
 外蒙新蘇と蘇聯の經濟勢力 S.C.ボリス
 支那共產軍と蘇聯の對日政策 本協會調査部
 支那航空界の現状 本協會調査部
 四川省の産業概況 本協會調査部
 日滿郵便業務に關する條文 本協會調査部
 五國海軍會議日誌 本協會調査部
 亞細亞諸國の資料及情報 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇支那の抗日學生運動 ◇日支關係 ◇五箇國海軍會議 ◇米大統領致書綱要
 亞細亞問題に關する外誌論評
 太平洋航空路の將來 エ
 埃及獨立運動 C.ヒストリア

三月號要目(第三十五號)

大亞細亞協會創立三年の志業 卷頭言
 植民地再分割論と亞細亞主義 村川 堅固
 國策の方向とツラニズム 今岡十一郎
 北支政局と經濟問題 高木 陸郎
 對支政策の南下 佐藤 佐
 蔣介石政權と西南派の動向 梶原勝三郎
 蘇聯中央執行委員の演説 神田 正種
 國境紛争と蘇聯の極東諸工作 長島 行雄
 猶太資本主義と支那幣制改革 宇都宮希洋
 佛領印度支那を認識せよ 横山 正脩
 ケラーク王國の現状 眞鍋 藤治
 水野氏の「建艦競争論」を駁す 岡野 英夫
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 滿蒙・滿蒙國境の諸事件 本協會調査部
 蘇聯邦の東方政策 本協會調査部
 興安省産業概況 本協會調査部
 四川脱出前後の共產軍 本協會調査部
 比律賓の經濟事情 本協會調査部
 亞細亞各地の近情 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇廣田外相の議會演説反響 ◇我が海軍會議退却 ◇日滿蘇關係 ◇日獨同盟説
 亞細亞問題に關する外誌論評
 アラビヤ國民運動に就て
 過渡期の印度 エ
 モスLEM・ワールド
 シリア

四月號要目(第三十六號)

山西赤化の脅威と北支 卷頭言
 ロカルノ協定破棄と歐洲政局 稻原 勝治
 北支赤化の兆勢 大西 齋
 北支防共の基礎工作 香取 桂一
 滿蒙國境問題と日蘇の將來 茂森 唯士
 華僑と近代支那の動向 櫻木 俊一
 英帝 國と香港 宇都宮希洋
 胡漢民と大亞細亞主義 村田 孜郎
 萬里の長城に立ちて 高橋 和義
 國民主義日本の動向 G.シュタイン
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 山西共產軍の概況 本協會調査部
 蘇聯の不法行為爲調 本協會調査部
 蘇聯邦の極東工作近情 本協會調査部
 外蒙古の現狀 本協會調査部
 福建省概況 本協會調査部
 比律賓經濟事情 本協會調査部
 亞細亞各地の近情 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇廣田内閣の成立 ◇二・二六事件の反響
 ◇滿蒙國境紛争事件 ◇獨逸非武装地帯再軍備
 亞細亞問題に關する外誌論評
 支那海關に就て フリテン・アン
 アラビヤ砂漠の今日 エ
 シリア

五月號要目(第三十七號)

東方への道 卷頭言 杉森孝次郎
ナショナルリズムの社會化 長野 朗
支那視察所感 小室 誠
極東赤化政策の進出 梶原勝三郎
危機を孕む貴族政策の前途 近藤 義晴
外蒙赤化と北支 上田 雅行
航空國策の急務を提唱す 下中編三郎
國民智能の總動員に就て 鹿島守之助
エチオピアの悲劇と亞細亞 西田 卯八
亞細亞の石油資源開發問題 内藤 智秀
チムールが土耳其に居た頃 / R.B.ボリス
ジャワハラル・ネールに就て S.C.ボリス
印度國民運動史 本協會調査部
邊疆支那の諸問題 同
支那の各國航空路一覽 同
滿洲國の阿片制度 同
蘭領印度の砂糖統制案 同
亞細亞各地の近情 同

六月號要目(第三十八號)

同人滿川龜太郎氏を弔す 卷頭言
胡漢民君の死を悼む 松井 石根
胡漢民氏逝去と支那政局 大西 齊
胡漢民氏と蔣介石の思ひ出 吉岡 文六
憲政に入らんとする支那 中山 優
支那幣制の補訂 根岸 信
西南支那の再吟味 吉野 弘之
東亞の安定と回教民族 今岡十一郎
ダバオ土地問題の真相 松本 勝司
國防と財政の改革 藤村 幹郎
暹羅の製糖業 佐藤 致孝
印度國民運動史 S.C.ボリス
新 疆 事 情 本協會調査部
蘇聯の極東軍備 同
滿洲國境紛争問題 同
中華民國憲法草案 同
亞細亞各地の近情 同

七月號要目(第三十九號)

北支と國民的壓力 卷頭言
外交危機の深化 中山 優
西南軍の北上と蔣政権 大島洪太郎
西南・南京の相剋と其の本質 田中 香雷
西南問題の歸結 佐藤 佐
滿洲國治外法權の撤廢 鹿島守之助
滿洲國境紛争の真相踏査記 綾川 武治
西太平洋の最新情勢 前田 稔
植民地再分割論と南洋 谷口 五郎
イランの石油外交 西田 卯八
新 疆 橫 斷 記 P.フレイミング
印度が再生する迄 ジャワハラル・ネール
印度國民運動史 S.C.ボリス
不可觸賤民の將來 本協會調査部
イラク・サウード同盟條約 同
蘇聯の極東軍備 同
中華民國憲法草案 同
滿洲國治外法權撤廢に關する條約 同

八月號要目(第四十號)

大陸政東と日英關係 卷頭言
大亞細亞主義の解釋 杉森孝次郎
日支關係の史的考察 矢野 仁一
北支政權の將來と王克敏 高木 陸郎
西南没落と對支雜感 千原 楠藏
西南問題と蔣の統一工作 關島 道雄
支那幣制改革後の實情と前途 三宅 健藏
蘇聯赤軍の實情 秦 彦三郎
ダ・ボ兩海峡の再武裝化 内藤 智秀
大亞細亞主義と回教徒 眞鍋 藤治
ツラン民族と團結せよ 今岡十一郎
印度國民運動史 S.C.ボリス
新 疆 橫 斷 記 フレイミング
大亞細亞主義運動と比律賓 ビオ・デユラン
モントルー會議及條約文 本協會調査部
外蒙軍備狀況 同
蘇聯の極東建設 同
新 疆 事 情 同
亞細亞各地の近情 同
現下の世界的問題と外國新聞の論調
◇北支に於ける日本◇川越大使赴任
◇日濠通商問題◇エスカレーター條項發

九月號要目(第四十一號)

成都事件の教訓 卷頭言
列強の防空政策と日本 畑 俊六
修羅道に墮せる歐洲 村川 堅固
動亂の西班牙と其の人物 青木 新
西班牙革命と歐洲政局 田代 和泉
外蒙五箇年計畫の全貌 高見 洋
蘇聯の東方政策を論ず 茂森 唯士
ツラン民族と其の文化 今岡十一郎
支那の石油問題 西田 卯八
東方文化の復興 江 充 虎
新 疆 印 總 督 と 日 蘭 關 係 谷口 五郎
印度國民運動史 S.C.ボリス
新 疆 橫 斷 記 フレイミング
暹羅一九三六—七年度豫算 本協會調査部
極東航空路概観 同
支那に於ける石炭資源 同
新 疆 事 情 同
亞細亞各地の近情 同
現下の世界的問題と外國新聞の論調
◇西班牙の革命◇日支關係
◇米支借款問題◇日濠通商問題其他

十月號要目(第四十二號)

日支關係の斷面 卷頭言
日本國策と蒙古問題 鹿子木員信
日支の重大危機迫る 大西 齊
國民政府と黨部の本質批判 吉野 悠二
日支問題解決の關鍵 梶原勝三郎
抗日運動と國民政府の責任 神田 正雄
支那の人民職權と憲政權(座談會) 中山優、尾崎秀實、田中忠雄、下中編三郎、中谷武世
滿洲事變の世界史的意義 橋本 増吉
新興イランの近情 小原 重孝
蘇聯重工業根據地の東漸 廣瀬 正貫
新 疆 橫 斷 記 フレイミング
支那の抗日テロ事件解剖 本協會調査部
廣東廣西の經濟的價值 同
新 疆 事 情 同
亞細亞各地の近情 同
現下の世界的問題と外國新聞の論調
◇成都事件◇列強の海軍増量問題
◇日本産業の進出◇日濠通商問題後報
比律賓遊説報告 佐藤 佐

十一月號要目(第四十三號)

思想戦線と支那 卷頭言
 日支關係の前途 長野 朗
 日支交渉私見 中山 優
 北支戦線の危機 村田 孜郎
 日支交渉を繞る英蘇の暗躍 高見 洋
 英支借款協定と日支交渉 小室 誠
 北支の「民族解放死隊」に就て 瀧澤 貞樹
 新意志の國際行動 杉森孝次郎
 歐羅巴國際政局の動向と日本 大山卯次郎
 亞細亞民族の文化的考察 西田 卯八
 王道亞細亞の先決問題 謬 斌
 シリア獨立問題と佛蘭西 眞鍋 藤治
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 新疆斷記 P.フレイミング
 日支交渉經過 本協會調査部
 支那軍備の現勢 同
 支那共產軍の内蒙進出 同
 英領馬來の諸工業概況 同
 亞細亞各地の近情 同
 現下の世界的問題と外國新聞論調
 ◇最近の日支關係◇有田外相の聲明◇西班牙不干渉問題◇法貨切下と國際情勢

十二月號要目(第四十四號)

大亞細亞協會の總會に當りて 松井 石根
 支那の抗日戦線 田中 香苗
 蒙古軍の綏遠進撃 中村 常三
 蒙漢鬭争の展望 後藤 富男
 内蒙問題と日支關係の危機 田中 忠夫
 防共協定の意義 本多熊太郎
 防共十字軍と日支關係 中保 興作
 日獨協定と「人民戦線」 難波田春雄
 比律賓の大亞細亞主義運動 ビオ・デュラン
 國際現勢と明日 杉森孝次郎
 新疆斷記 P.フレイミング
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 綏遠事情 本協會調査部
 内蒙古軍は何故起つたか 同
 日獨防共協定全文 同
 亞細亞各地の近情 同
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 ◇日支關係◇歐洲政局
 ◇ルーズベルト大統領再選

第五卷要目(自昭和十二年一月至昭和十二年十二月)

一月號要目(第四十五號)

西安事變と支那の近代政治 卷頭言
 世界的變局と國民の襟度 松井 石根
 日本國際政治原理と日獨防共協定 藤澤 親雄
 蘇聯軍備と我が陸軍 磯谷 廉介
 國際不安の濃化と軍備異變 梅崎卯之助
 一九三七年の國際政局の展望 古賀 英正
 年頭・日本國民に寄す
 西安事變と日支經濟 滿洲國大使
 西安事變以後 土耳古大使
 日支交渉に就いて 暹羅代理公使
 西安事件と日支關係(座談會) アフガン公使
 郁 達夫 陳 博生 大西 齊
 杉森孝次郎 下中彌三郎 中谷 武世
 外蒙人民共和國の全貌 本協會調査部
 北支學生運動概況 本協會調査部
 南洋に於ける各國投資狀況 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △支那兵變△日獨防共協定△日支關係
 大亞細亞協會京都支部發會式

二月號要目(第四十六號)

汪兆銘の演説と防共の問題 卷頭言
 支那國家主義の發展と日獨協定中山 優
 世界の風潮と支那思想戦線 小室 誠
 所謂「對支再認識論」の検討 千原 楠藏
 英國對支進出と汪兆銘の歸國 高見 洋
 支那の對日政策と日本の現狀 梶原勝三郎
 西安事變の教訓 神尾 茂
 無條約時代と我が海軍 野田 清
 歐羅巴政局の歸趨 田代 和泉
 猶太人と猶太主義 内藤 智秀
 印度國民運動史 S.C.ボリス
 支那最近の財政狀況 本協會調査部
 西安赤化と中國共產黨近情 本協會調査部
 東西に對する米國の經濟政策本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △西安事變其の後△海軍無條約時代と太平洋問題△英伊地中海協定

三月號要目(第四十七號)

三中全会後の日支關係 卷頭言
 西安事件から三中全会まで 長野 朗
 三中全会以後 村田 孜郎
 三中全会と英國在支勢力の將來 松村徹之
 防共の思想的意義と國防 秦 彦三郎
 歴史的に見た革新の意義 村川 堅固
 蘇聯反幹部派陰謀事件の解剖 中村 伸
 ケンシ氏渡米と米比通商會議 磯海 國敏
 印度國民會議の近情に就いて A.M.サハイ
 印度國民運動史 C.S.ボリス
 三中全会概況 本協會調査部
 支那最近の財政狀況 本協會調査部
 東亞に對する米國の經濟政策本協會調査部
 蘇聯反政府陰謀事件と裁判 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △日支關係△蘇聯反幹部派陰謀事件△歐洲國際政局
 亞細亞問題に關する外誌論評
 汎アラビア主義 エシヤ
 英埃條約に就いて カレント・ヒストリー
 無條約と日英米 ロンドン・タイムス

四月號要目(第四十六號)

支那に於ける英蘇の政勢 卷頭言
 民族史より見たる日支關係 橋本 增吉
 支那革新運動と日支の將來 須磨彌吉郎
 西安事件に對する一考察 柴山兼四郎
 大亞細亞主義者との信念 佐藤 佐
 猶太民族の世界政策と日本 立野 斗南
 バビロニヤ文化とアッシリア文化 小栗 襄三
 アフガンのパツチャサカオ 高垣 信造
 比島新國防計畫の内容 林 直樹
 英領馬來の行政及義勇軍 本協會調査部
 東亞に對する米國の經濟政策本協會調査部
 南洋に於ける各國の投資情況本協會調査部
 蘇聯陸軍概観 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △佐藤外相の就任△三中全会△日支關係
 △列國の軍擴計畫
 亞細亞問題に關する外誌論評
 暹羅を繞る日英の葛藤 エシヤ
 英帝國の航空路と東洋 グレートブリテン・
 アンド・イースト

五月號要目(第四十九號)

華北視察團を迎へて 卷頭言
 北・支等を一貫する動きと我が國策 杉森孝次郎
 新興土耳其の國民主義的標識 大久保幸次
 支那に於ける回教問題 眞鍋 藤治
 新開通の粵漢鐵道の價值 神田 正雄
 黃郛氏を偲びて 若杉 要
 日印・日蘭會商の成立に就いて 川島信太郎
 東洋の燃料問題 西田 卯八
 所謂歐羅巴文明と亞細亞人の自覺 ホセ・ラウレル
 印度國民社會主義と其の將來 デス・パンデイ
 印度國民運動史 S.C.ボース
 新嘉坡・香港の軍備強化と支那紙
 北平キヤラバン誌、海上申報、厦門全圖
 報、天津新報
 海南島事情 本協會調査部
 支那大學生の抗日訓練生活 本協會調査部
 外蒙人民共和國の全貌 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △日本議會解散問題△日支關係△海軍備
 砲問題△歐米最近の國際政局

六月號要目(第五十號)

卑屈なる日英親善論を排す 卷頭言
 日支整調の氣運未だし 中山 優
 日英會談と支那 稻原 勝治
 日英對支合作説を啾ふ 小山 貞知
 英國對支經濟工作の積極化 田中 香苗
 英國の對支積極化と北支問題 高見 洋
 太平洋を繞る列強海軍々備 梅崎卯之助
 新亞細亞主義と東亞經濟團結 壽 景偉
 ウリヤンハイ小史 J・レグイン
 印度國民運動史 S.C.ボース
 日英合作説と支那輿論
 大公報、益世報、晨報
 北支に於ける英國の現有利權本協會調査部
 英國の西藏政策と其の軍事施設 本協會調査部
 東印度に於ける民族運動と回教 本協會調査部
 印度の産業及貿易(一九三六年度) 本協會調査部
 滿洲國行政機構改革大綱 本協會調査部
 亞細亞各地の近情 本協會調査部
 現下の世界的問題と外國新聞論調
 △日英折衝問題△日支關係△日本の總選
 舉△最近の歐米國際問題

七月號要目(第五十一號)

赤軍清掃事件と東亞 卷頭言
 日支關係の調整に就いて 長野 朗
 香港を據點とする英帝國主義 松村 徹之
 對支政策と實力發動 梶原勝三郎
 南支を視察して 阿部 信行
 滿洲北支雜感 白鳥 敏夫
 赤軍清掃事件を斯く見る 秦 彦三郎
 蘇聯赤軍の内訌を暴く 茂森 唯士
 日滿諸計畫の世界的意義 中保 與作
 太平洋不可侵條約の實現性に就て 大山卯次郎
 印度國民運動史 S.C.ボース
 赤軍八將星銃殺事件 本協會調査部
 支那軍需工業概観 本協會調査部
 北支最近の政治及經濟 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と外國新聞の論調
 △近衛内閣の成立△赤軍巨頭の銃殺△聖
 農園事件と油頭事件△西班牙政府軍の獨
 盤煤擊
 亞細亞問題に關する外誌論評
 赤軍と共產黨ロンドン・タイムス
 支那鐵道五箇年計畫グレートブリテン・
 アンド・イースト
 内蒙古は何處へ行く?
 バシフィック・アフエアーズ

八月號要目(第五十二號)

全面的且つ根本的解決 卷頭言
 友邦國民に告ぐ 松井 石根
 出兵の意義に徹せよ 中山 優
 北支事變の國際的發展性 小室 誠
 北支事變と厄介な支那 日笠芳太郎
 北支事變直前の支那要人の言動高木 陸郎
 「以夷制夷の双壁」英・支 大熊 眞
 支那は今戦ふ時に非ず ナタニエル・ペファ
 乾諾子島事件の教訓 近藤 義晴
 印度國民運動史 S.C.ボース
 北支事變の経緯 本協會調査部
 北支事變と三中全会 本協會調査部
 支那陸空軍の全貌 本協會調査部
 北支五省の財政情況 本協會調査部
 近東の農民と農地制度 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 東亞の風雲と世界の輿論
 △北支事變△乾諾子島事件
 亞細亞問題に關する外誌論評
 東亞に於ける日英の抗争 グレートブリ
 テン・アンド・イースト
 日本の計畫經濟と資源 エシ ア
 アラビヤの騎士道 モスLEM・ワイルド

九月號要目(第五十三號)

中國大亞細亞協會時局宣言 卷頭言
 日支關係の大道 橋本 增吉
 日支事變の將來 長野 朗
 武力膺懲と思想工作 佐藤 佐
 東亞の黎明を迎へよ 千原 楠藏
 戦時經濟と生産力 下中彌三郎
 日支事變と列國の動向 藤澤 親雄
 日支關係と豫の順逆 櫻木 俊一
 支那將領の點描 知識 眞治
 ソヴェエト聯邦の攻勢力 甲谷 悦雄
 印度國民運動史 S.C.ボース
 日支事件経緯 本協會調査部
 支那海軍概観 本協會調査部
 支那の戦時經濟策を觀る 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 日支事變に對する外國新聞論調
 亞細亞問題に對する外誌論評
 北支事變と極東の危機 カレント・ヒストリー
 英帝國會議と太平洋 ブリテン・アンド・イースト
 日本の南進と歐米 エシ ア

十月號要目(第五十四號)

亞細亞民族解放戦としての支那事變 卷頭言
 支那事變と日本人の覺悟 末次 信正
 支那事變と大亞細亞主義 村川 堅因
 支那事變と東洋平和の確立 矢野 仁一
 支那事變の本質 白鳥 敏夫
 山東の精神 鹿子木員信
 戦時經濟と生産力 下中彌三郎
 北支住民は果して漢人種なりや今岡十一郎
 支那對外政策の史的考察 大熊 眞
 蘇支不可侵條約とその背後 島村 辰夫
 支那に於る國際猶太財閥の活躍宇都宮希洋
 支那各地戰線狀況 本協會調査部
 支那共產黨二十年史 本協會調査部
 バルスタイン分割と各國の動向
 分離後の緬甸政情 本協會調査部
 亞細亞各地の近情 國分 正三
 支那事變に對する外國新聞の論調
 △蘇支不可侵條約△九箇國條約と米中立
 法△ヒューゲッセン事件△事變と國際聯
 盟

十一月號要目(第五十五號)

英國に對する態度の決定 卷 頭 言
 對支思想策戰・三民主義爆破 鹿子木員信
 國際聯盟を操る英米 大山卯次郎
 看板倒れ九ヶ國會議 稻原 勝治
 中國大亞細亞協會の主張と覺悟 齋 變 元

北支建設の一考察 高木 陸郎
 支那事變と廣田外交 日笠芳太郎
 新 疆 の 危 機 村田 孜郎
 支那に於ける國際猶太財閥の活躍宇都宮希洋
 青年亞細亞會議及びその世界的反響
 支那事變と洪國ツラン同盟宣言今岡十一郎
 新嘉坡要塞を衝く 本協會調査部
 英領馬來の航空事情 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 支那事變に對する外國新聞の論調
 △事變と我が貿易△支那各都市の空爆
 △米年統領の演説△事變と經濟制裁
 △日支事變と聯盟

十二月號要目(第五十六號)

獨逸の調停と雖も謝辭すべし 卷 頭 言
 對英問題の原則 杉森孝次郎
 伊太利の回教徒政策 内藤 智秀
 戰時經濟と生産力 下中彌三郎
 支那事變と亞細亞民族解放戰(座談會)
 R.B.ボース 今岡十一郎
 内藤 智秀 デス・バンデイ
 下中彌三郎 中谷武世
 支那事變に對する英蘇の態度 茂森 唯士
 英國に對する覺悟 高見 洋
 英帝國打倒と日獨伊の提携 R.B.ボース
 印度國民運動史 S.C.ボース
 支那に於ける英國の運命 E.O.ハーサー
 北支の英國權益 本協會調査部
 近東に於ける英蘇と獨伊 本協會調査部
 運羅の航空事情 本協會調査部
 亞細亞各地の近情
 現下の世界的問題と各國新聞論調
 △日獨伊防共協定△蒙古更生の意義
 △九國會議の反響△日支の將來
 △米國の日貨排斥△白國の日本觀
 支那事變に對する外誌論評
 日本の企畫 カレント・ヒストリー
 支那の戰闘力 フォーリン・アフェア
 蘇聯は參戰するか
 プリンテン・アンド・イースト

第六號要目(自昭和十三年一月至昭和十三年十二月)

新しき世界歴史の頁 卷 頭 言
 新亞細亞建設の新年
 日本國民に與す 滿洲國大使 土耳古大使 暹羅公使 アフガン公使 ラス・ハリ・ボース

明 朗 東 亞 の 建 設 村 川 堅 固
 蔣 政 權 の 行 方 大 西 齊
 支 那 事 變 收 拾 の 方 向 千 原 楠 藏
 北 支 政 權 に 要 望 す 立 野 斗 南
 ツ ラ ン ・ 防 共 ・ 回 教 線 を 確 保 せ せ 今 岡 十 一 郎
 入 城 有 感(漢詩二題) 松 井 石 根
 復 興 亞 細 亞 の 年 菊 池 武 夫
 新 支 那 の 産 業 開 發 高 木 陸 郎
 印 度 國 民 運 動 史 S.C.ボース
 ウ リ ヤ ン ハ イ 小 史 J.レウイン
 南 京 陷 落 と 新 嘉 坡 本 協 會 調 査 部
 蘇 聯 指 導 下 の 外 蒙 同
 中 國 共 産 黨 抗 日 十 大 綱 領 同
 亞 細 亞 各 國 情 報 同
 支 那 事 變 に 對 する 世 界 新 聞 論 調 同

二月號要目(第五十八號)

日支事變と回教民族の動向 卷 頭 言
 日支事變善後策 白鳥 敏夫
 對支新段階の新目標 中山 優
 對支建設の方途 長野 朗
 北支經濟資源の開發 十河 信二
 新嘉坡の對日軍備 梶原勝三郎
 支那事變と南洋民族 赤坂 直義
 日本民族及び日本語の眞認識橋本 增吉
 新亞細亞建設と文教の確立 本村 勝治
 日本の洪牙利 M.イシュトワーン
 印度國民運動史 S.C.ボース
 新嘉坡空陸大演習 本協會調査部
 東亞に於ける回教徒の現勢 同
 近東四ヶ國不可侵條約 同
 パレスタインと英國の立場 同
 亞細亞各國情報 同
 外國新聞の論調 同

三月號要目(第五十九號)

英國の對支新政策と北支政權 吉岡 文六
 英米の軍擴と對日牽制 稻原 勝治
 列國海軍の情勢 小川 貫麗
 米國の誤つた極東政策と軍備擴張 大山卯次郎
 日本民族の大陸還元 金子 定一
 臺灣を基點とする南支文化工作三島 文平
 南支那海の重要性 由利 義光
 亞細亞の製鐵資源 西田 卯八
 對支施策と事變下の議會 日笠芳太郎
 十字路に立つ印度國民運動 デス・バンデイ
 印度國民運動史 S.C.ボース
 英蘇角逐下の新疆近情 本協會調査部
 最近の蘭印回教徒の動き 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

四月號要目(第六十號)

英國外交の轉換却つて替むべし 卷 頭 言
 聖戰の眞意義を顯揚せよ 松井 石根
 長期抗戰と日本の態度 大西 齊
 對支文化工作の原則 杉森孝次郎
 事變第二段階と國民政府 村田 孜郎
 中國維新政府の概貌 中保 與作
 支那府憲の次期段階 小室 誠
 回 教 と 經 濟 内藤 智秀
 日本民族の大陸還元 金子 定一
 印度國民運動史(完結) S.C.ボース
 中國臨時政府の金融及財政 本協會調査部
 最近の北支貿易概観 本協會調査部
 事變下の香港通商狀況 同
 亞細亞各國情報 同
 支那事變に對する外誌論評 同
 支那幣制の運命 同
 フア・インスタン・サーヴ
 支那民衆に與ふ エシ ア
 英國對日ボイコット輿論
 ポリテカル・クオータリ
 世界各國新聞論調 本協會調査部

五月號要目(第六十一號)

文化工作の新意義 卷頭言
 對支國策私見 長野 朗
 對支善後策を如何にすべきか 神田 正雄
 英國の轉向疑はし 稻原 勝治
 松井大將の警告に聽く 千原 楠藏
 支那回教徒の新動向 榎本桃太郎
 西北回教徒の五馬聯盟 村上 義行
 東亞に於ける回教勢力地帯 赤坂 直義
 支那の製鐵資源 西田 卯八
 最近の比島獨立問題 林 直樹
 印度問題と英伊協定 R・B・ボース
 蘭領印度の華僑に就て 本協會調査部
 支那事變と暹羅 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同
 亞細亞問題に對する外誌論評
 亞細亞を越える日章旗
 クリスチャン・サイエンス
 新嘉坡の危機と日英 エシヤ
 紅海に於る伊太利新根據地
 グレートブリテン・アンド・イースト

六月號要目(第六十二號)

日本と回教亞細亞 卷頭言
 國民黨の共產化と次期政局 吉岡 文六
 徐州戦捷後の新段階 大久保義之
 徐州陥落の後に來るもの 日笠芳太郎
 厦門 攻略の效果 佐藤 佐
 事變下に海軍記念日を迎へて 阿部 信夫
 佐藤信淵の支那經綸 田中惣五郎
 滿洲の製鐵資源 西田 卯八
 回教國イラクを訪ふ 坂井 米夫
 日本に 使して
 エーメン國皇子 フサイン
 蘭印の回教及び民族運動 本協會調査部
 イスラム民族運動の勃興 同
 徐州包圍 攻略戦 同
 最近の比島獨立問題 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

七月號要目(第六十三號)

第三國の 効用 卷頭言
 事變一週年を迎へて 村川 堅固
 事變に於ける國策的趣旨の再認杉森孝次郎
 時局解決策と支那經濟建設 高木 陸郎
 戰區擴大と列國の動き 河相 達夫
 樂禁觀物の時局前途 千原 楠藏
 回教に關する誤解と謬見 竹井 十郎
 中央亞細亞の旅 北田 正元
 カイロの回教生活 小林 哲夫
 近東に於ける英伊の對立 R・ウールバート
 漢口 攻略と法幣の没落 本協會調査部
 抗日新據點としての雲南 同
 最近の比島獨立問題 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

八月號要目(第六十四號)

事變の歴史的意義の再認 卷頭言
 漢口 攻略とその以後の期待 大西 齊
 聖戰一年の戦果と將來の覺悟 松島 慶三
 支那回教徒の特異性 松室 孝良
 事變下の新疆事情 齋藤 雄吉
 英佛接近は何を意味するか 稻原 勝治
 サンヂャク問題と佛土關係 山形 誠一
 英國東亞政策の將來 竹井 十郎
 汕頭商埠に就て 由利 由光
 新嘉坡根據地の全貌 本協會調査部
 イラクの政治經濟事情 同
 緬甸の 將來 同
 三民主義青年團宣言及綱領 同
 佛領印度支那の近情 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

九月號要目(第六十五號)

日英會談を中止せよ 卷頭言
 東洋文化の價值と支那の復興 矢野 仁一
 對支關係の根本策 橋本 增吉
 法幣問題の前途 立野 斗南
 蘇聯邦の對外政策 小室 誠
 事變下最近の猶太問題 宇都宮希洋
 回教徒・華僑・猶太教徒 赤坂 直義
 ガンディ會見記 藤井 行勝
 新嘉坡要塞根據地 本協會調査部
 佛國の對支策とカムラン灣軍港 本協會調査部
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

十月號要目(第六十六號)

チエッコ・歐羅巴・亞細亞 卷頭言
 長期建設經濟體制 下中彌三郎
 英支經濟關係の基本的考察 難波田春夫
 支那事變と民族問題 松室 孝良
 日獨伊樞軸と其世界政策の方向金生 喜造
 西亞細亞視察記 半田 敏治
 雲南・ビルマ國境踏査記 國分 正三
 日支兩國國民に告ぐるの書 超 儀
 戰時支那宣傳機關の鳥瞰 本協會調査部
 南支の 鐵產資源 同
 爆撃下の廣東工業概況 同
 新嘉坡海軍根據地の全貌 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

十一月號要目(第六十七號)

事變の善後と新東亞體制 卷頭言
 孫文と大亞細亞主義 高木 陸郎
 英國極東政策と日本外交 小島 威彦
 中南支政略の後に來るもの 日笠芳太郎
 西亞細亞視察記 半田 敏治
 印度最近の對日動向 R・B・ボース
 英印の幹線を脅すもの 大江 三吉
 ラモスの歸國とサタダル黨 林 直樹
 日支兩國に與ふるの書 超 儀
 西亞細亞に於ける農地關係 本協會調査部
 中國學生の戰時活動 同
 香港各國貿易の近況 同
 亞細亞各國情報 同
 外誌論評 同
 墨西哥の石油と日獨 同
 (エシア九月號)E・ジエンウエイ
 回教と日本(印度ライト誌)ベルラス
 支那事變に對する外國新聞の論調

十二月號要目(第六十八號)

思想工作の問題 卷頭言
 再建支那と東亞聯邦の構想 中谷 武世
 再建支那の思想・哲學・宗教 杉森孝次郎
 支那再建と回教問題 松室 孝良
 支那再建と最近の國共關係 田中 香苗
 對支思想工作の要點 清水 董三
 對支文化工作指導の原理 佐藤 佐
 西亞細亞視察記 半田 敏治
 逝けるケマル大統領
 アーリヒュースレグ・ゲレデ
 ケマル大統領の印象 神田 正種
 大亞細亞主義先覺山田良政 本協會調査部
 海・南島の鐵産 同
 蘇支ルートの解剖 同
 雲南鐵道 同
 亞細亞各國情報 同
 世界各國新聞論調 同

第七卷要目(自昭和十四年一月至昭和十四年十二月)

一月號要目(第六十九號)

東亞新秩序と第三國 卷頭言
 支那事變の意義と大亞細亞主義 松井 石根
 我が大陸政策の基幹 今岡十一郎
 興亞・革新と英國 千原 楠藏
 東亞再建と英國 戸野原史朗
 不退轉の對支方針 日笠芳太郎
 年頭・日本國民に與す
 支那事變とコミンテルンの活動 土井古大
 南洋華僑論 赤坂 直義
 再建支那と英國に對する態度 本村 勝治
 支那抗日戰線の各黨各派 本協會調査部
 支那鐵道資源概観 本協會調査部
 最近の佛國援支工作 本協會調査部
 比島華僑の日貨排斥 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評 本協會調査部
 日本南進論
 ウイラード・ブライズ著
 チウドレン・オブ・ライジンダサン
 日本に於ける回教問題
 マルホメン・ハンデルス・ブラット誌

二月號要目(第七十號)

英米佛の對日通牒 卷頭言
 半植民地狀態より支那を救へ 今井 嘉幸
 事變進展に伴ふ列國の焦慮 稻原 勝治
 蔣・汪に脈絡があるか 村田 孜郎
 租界及び治外法權の撤廢問題 村山 良知
 洪牙利の滿洲國承認と防共協定參加 今岡十一郎
 回教團モロツコを行く 川崎 寅雄
 米比共同委員會の勸告 林 直樹
 支那各地學生運動の近況 本協會調査部
 對支國策會社及子會社の現況 本協會調査部
 支那問題に關する聲明及び通牒 本協會調査部
 中央亞細亞の民族主義運動 本協會調査部
 パレスティン問題會議と輿論 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 支那事變に對する外國新聞の論調 本協會調査部
 外誌論評 本協會調査部
 英國の近東政策
 エシア十二月號R・ドルツケル
 カリフ復活は可能か
 印度ライト誌P・シデイキ
 ウクライナと獨逸
 グレートブリテン十二月號同誌記者
 本協會々々報

三月號要目(第七十一號)

租界問題 卷頭言
 租界問題の徹底解決 下中彌三郎
 汪・吳の今後 太田字之郎
 最近の時局とその基礎關係 杉森孝次郎
 道義外交の正體と議會 日笠芳太郎
 海南島攻略戰の新展開 阿部 信夫
 海南島在住記 古閑 次郎
 緬甸見聞記 東恩納寛淳
 イスラムの融和性 内藤 智秀
 印度國民運動の指導者サバルカル 本協會調査部
 ボース・ラス・ビハリ
 愛犬「興亞」を憶ふ 松井 石根
 支那事變と華僑 本協會調査部
 佛印及び緬甸の援蔣ルート 本協會調査部
 海南島風土記 本協會調査部
 海南島占領と蔣介石の辯 本協會調査部
 暹羅の新内閣と其の政綱 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 支那事變に對する外國新聞の論調 本協會調査部
 本協會々々報

四月號要目(七十二號)

英帝國を支ふるもの 卷頭言
 日支の思想合作と孫文主義 中谷 武世
 支那中央政府組織問題 神田 正種
 吳佩孚將軍に就いて 大西 齋
 事變下の華僑對策 佐藤 佐
 法幣對策と租界問題 立野 斗南
 東亞の人心獲得 金子 定一
 ツラン世界聯盟 今岡十一郎
 緬甸新情勢論 國分 正三
 アフガニスタン縱貫鐵道 池本 泰兒
 海南島開發と燃料問題 由利 義光
 暹羅の流血事件 本協會調査部
 パレスティナ會議決裂まで 本協會調査部
 土耳古のハリフア問題 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評 本協會調査部
 閉め出された白人種 アンカラ紙
 印度支那に對する日本の脅威
 フォーレン・アフェアーズ誌
 英國の對支借款其他
 ヘラルド・トリビューン紙他
 本協會々々報

五月號要目(第七十三號)

支那人の反英思想 卷頭言
 歐洲情勢論 村上堅固
 バルカンの風雲を語る 栗原正
 獨伊の進出と英國の焦慮 稻原勝治
 大東亞主義と大亞細亞主義 橋本増吉
 蔣政権のバックと其の將來 中保與作
 回教五馬聯盟の概貌 藤田由藏
 高架索の民族問題とツラニズム 今岡十一郎
 南洋華僑の思想瞥見 赤坂義直
 印度國民運動の指導者サバルカル
 ボリス・ラスビハリ
 蘭領印度の民族運動 本協會調査部
 緬甸の工業概観 本協會調査部
 一九三八年度に於ける支那貿易 本協會調査部
 比島の邦人漁業問題 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會々報

六月號要目(第七十四號)

鼓浪嶼問題の示唆 卷頭言
 日獨伊輻輳強化と租界問題 下中彌三郎
 租界問題解決の急務 高木陸郎
 東亞建設の現地指針 清水董三
 アメリカの立場を斯く見る 杉森孝次郎
 勃牙利の諸民族に就いて 今岡十一郎
 アフガンの回教問題と國政現況 三雄
 日本と回教の關係 阪本胤次
 比島獨立問題 前田稔靖
 比島の政治經濟政策 林直樹
 日本外交近時隨感 戸上駒之助
 敵地に聞く同志の聲 神尾茂
 香港華僑の勢力概貌 本協會調査部
 新興土耳其の續業 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評
 西部支那の將來
 エシヤ四月號H・ドナルド
 獨逸と羅馬尼の石油
 G・B・イースト四月十三日
 本協會々報

七月號要目(第七十五號)

事變二周年と日英必戰の態勢 卷頭言
 危機に立つ天津租界問題 小室誠
 天津租界問題の重大示唆 日笠芳太郎
 英國の敵性と事變の新展開 長谷川宇一
 封鎖部隊と英國の妨害 高瀬五郎
 イランに就いて 江口穂積
 緬甸騷擾と援蔣ルート 國分正三
 バルカンの言語學的考察 今岡十一郎
 大亞細亞建設と佛教徒 牧次郎
 英國最近の執拗なる對日挑戰 本協會調査部
 最近の香港情勢 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評
 香港の戰時態勢 ニューヨークタイムス
 獨伊と地中海戰略
 G・B・アーン・イースト
 米國の對日干渉の愚
 アメリカ・マキユリ
 本協會々報

八月號要目(第七十六號)

東京會談とミューン會談 卷頭言
 興亞の道義的原則 鈴木貞一
 日本主義とヒューマニテイ 倉田百三
 支那の反英運動と孫文主義 高木陸郎
 汪兆銘と大亞細亞主義 知識眞治
 事變處理方策の一考察 千原楠藏
 中日關係の基本的理念 諺斌
 共産第八路軍の現況と動向 蘇我麟三
 英國のツラン運動觀 今岡十一郎
 大亞細亞建設の道 洪國ツラン同盟メツセーヂ
 比島獨立問題 前田稔靖
 日英東京會談の経緯(一) 本協會調査部
 全支に反英運動激化 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 日英關係に對する世界新聞論
 本協會々報

九月號要目(第七十七號)

獨ソ不可侵條約と所謂自主外交 卷頭言
 新中央政權と大亞細亞主義 中谷武世
 孫文大亞細亞主義の發展的解釋 中彌三郎
 英帝國主義と阿片戰爭 矢野仁一
 日英支間の經濟問題 日笠芳太郎
 當面の對支諸問題 長野朗
 歐洲に於けるツラン民族 今岡十一郎
 獨蘇不可侵條約私見 デス・バンデイ
 岳麓雜感 村川堅固
 孫文の大亞細亞主義 本協會調査部
 四川雲南の鐵産資源 本協會調査部
 比島最近の對日動向 本協會調査部
 日英東京會談経緯(二) 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評
 獨逸近東工作の目標
 エシヤ七月號A・ウイトン
 次期戰爭と米國
 カレントヒストリ六月號G・ユリオット
 埃及棉問題
 グレイトブリテンイースト七月六日
 本協會々報

十月號要目(第七十八號)

對米外交の基調 卷頭言
 歐洲の大亂と日本の大道 中山優
 歐洲動亂を斯く観る 稻原勝治
 亞細亞の危機と黎明 杉森孝次郎
 事變處理に伴ふ對外態度 長谷川宇一
 日蘇停戰協定を語る 近藤義晴
 ツラン民族の文明と宗教 今岡十一郎
 バレスタイン地方の政治地理 金生喜造
 支那青年より觀た大亞細亞主義 徐益仁
 香港陸海空の運輸概況 本協會調査部
 タイ國海軍現勢 本協會調査部
 英領ボルネオ外観 本協會調査部
 亞細亞各國情報 本協會調査部
 外誌論評
 スターリンの行く途
 カレントヒストリ
 汎アラビヤ主義の分析 エシヤ八月號
 「新嘉坡の脅威」 ストレイト・タイム
 本協會々報

大亞細亞協會役員氏名

(イロハ順)

一、總 務 未 定

一、會 頭 陸軍大將 松井石根

一、顧問 海軍大將 末次信正

一、副會 頭 文學博士 村川堅固
文學博士 矢野仁一

一、評 議 員 (○印は常任評議員)

陸軍中將 稻垣孝照
陸軍中將 西川虎次郎
貴族院議員 本多熊太郎
貴族院議員 德富猪一郎
海軍中將 子爵 小笠原長生
大谷光瑞

男 貴族院議員 大藏公望

貴族院議員 河村 徹

○陸軍中將 芳澤謙吉

○陸軍中將 建川美次

○陸軍中將 高木陸郎

貴族院議員 津田信吾

貴族院議員 村田省藏

松岡洋右

松江春次

松尾忠二郎

增田次郎

近衛文麿

公 爵 小林省三郎

海軍中將 菊池武夫

○陸軍中將 男爵

○全權大使 白鳥敏夫

貴族院議員 廣田弘毅

一、監 事 高木陸郎

一、理 事 長 下中彌三郎

一、理 事 (○印は常任理事)

陸軍中將 飯村 穰

法學博士 今井嘉幸

○陸軍少將 今岡十一郎

陸軍少將 井上 靖

海軍大佐 石川信吾

海軍大佐 犬塚惟重

陸軍大佐 今田新太郎

○陸軍大佐 橋本增吉

陸軍少將 半田敏治

陸軍少將 秦 彦三郎

○陸軍少將 橋爪明男

陸軍中將 西原矩彦

陸軍大佐 本間雅晴

陸軍中佐 長 勇

海軍中佐 大石 保

○貴族院議員 太田耕造

陸軍大佐 和知鷹三

○文學博士 鹿子木員信

陸軍少將 神田正種

陸軍少將 影佐禎昭

陸軍少將 加來止男

海軍大佐 加藤辰彌

橫山正脩

竹藤峰治

田代重德

簡井 潔

大亞細亞協會會員氏名

(イロハ順)

姓名	住所	姓名	住所
稻垣孝照 (陸軍中將)	京都市小山内河原町四〇	伊藤六十次郎	東京府下北多摩郡狹間江村和泉田中二一三五
板垣征四郎 (陸軍中將)	東京市芝区白金町一ノ八二	岩田愛之助	東京市芝区白金町一ノ八二
今村勝次 (陸軍中將)	千葉市築町三五	磯田三郎 (陸軍少將)	米國駐劄帝國大使館武官室
今井嘉幸 (法學博士)	神戸市神戶區中山手通四ノ二一	井上金三 (銀行員)	東京市世田ヶ谷區北澤町三ノ四七
今岡十一郎 (外務省囑託)	東京市杉並區清水町九二	井田馨楠 (男爵貴族院議員)	東京市麴町區永田町二ノ六〇
飯村穰 (陸軍中將)	滿洲國新京康平街陸官二號	井口兼夫 (海軍少佐)	橫濱市鶴見區東寺尾町二一四六
石川信吾 (海軍大佐)	同 世田ヶ谷區世田ヶ谷町四ノ四一四	橋本増吉 (慶應義塾大學教授)	東京市杉並區荻窪三ノ四七
犬塚惟重 (海軍大佐)	東京市大森區桐里町一〇	半田敏治 (大同學院教授)	滿洲國新京新發屯清和胡同三三
井上靖 (陸軍少將)	同 杉並區天沼三ノ五八一	秦彦三郎 (陸軍少將)	同 ハルビン特務機關
今田新太郎 (陸軍大佐)	同 中野區江古田町一ノ三三二	橋爪明男 (東京帝國大學助教)	千葉縣市川市眞間八七
今牧嘉雄 (醫學博士)	同 京橋區築地二ノ五	坂西一良 (陸軍少將)	東京市四谷區愛住町八
今村忠助 (日本大學講師)	同 豊島區長崎南町二ノ三七	半澤玉城 (外交時報社長)	同 麴町區中六番町一五
稻原勝治 (日本外事協會)	同 麴町區内幸町大阪ビル	長谷川淑夫 (函館新聞社長)	同 函館市地蔵町一〇〇
伊藤斌夫 (醫師)	千葉縣安房郡鴨川町	林太平 (陸軍中佐)	東京市赤坂區青山南町六ノ一一
伊藤述史 (全權公使)	東京府下吉祥寺中道南二八三一	林重次郎	同 目黒區洗足町一二七一

○經濟學博士	根岸 信	海軍大佐	櫻木 俊一
陸軍少將	根本 博	海軍大佐	酒井 武雄
文學博士	内藤 智秀	里屋 武夫	岸井 壽郎
○	中谷 武世	○	下中 彌三郎
○	中山 優	陸軍少將	柴山 兼四郎
海軍大佐	中平 亮	文學博士	清水 董三
中 瀨 沂	中 村 享	陸軍中將	樋口 季一郎
全權公使	宇治田 直義	海軍大佐	森田 貫一
陸軍少將	栗原 正	陸軍少將	望月 音五郎
○陸軍少將	楠本 實隆	陸軍少將	角岡 知良
海軍大佐	牧 次郎	陸軍少將	鈴木 貞一
前田 稔	駒井 德三	陸軍少將	鈴木 宗作
佐藤 安之助	佐藤 佐	海軍中佐	末澤 慶政

晴氣慶胤 (陸軍中佐) 東京市牛込區余丁町七〇
 西川虎次郎 (陸軍中將) 福岡市西新町三三
 西原矩彦 (陸軍少將) 東京市澁谷區代々木大山町二七
 西村房太郎 (府立第一中學校校長) 同 澁谷區金王町七四
 西山貞男 (中華民國江蘇省海州新浦鎮興亞起業公司) 東京市世田ヶ谷區代田三ノ八〇九
 西田卯八 (明治大學教授) 同 目黒區上目黒七ノ二〇三
 本多熊太郎 (前全權大使) 同 小石川區林町三三
 本間雅晴 (陸軍中將) 同 芝區田村町一ノ三
 本田敬之 (大日本航空調查課長) 同 大日本航空株式會社
 堀口九萬一 (前全權公使) 同 小石川區小日向水道町一〇八
 星一 (星製藥株式會社長) 同 品川區上大崎町一
 堀米康太郎 (會社員) 同 澁谷區下落合二ノ七五三
 德富猪一郎 (貴族院議員) 同 大森區山王一ノ二八三二
 戶塚道太郎 (海軍少將) 同 中野區仲町一七
 鳥谷寅雄 (官吏) 滿洲國新京大同街產業部鐵工司
 利光永松 (鬼怒川水力電氣株式會社取締役) 東京府北多摩郡狹江村和泉二、一、二
 豐田副武 (海軍中將) 東京市世田ヶ谷區駒澤町下馬五八
 豐川善晴 (興亞學院) 朝鮮京城府建洞三三
 豐島房太郎 (陸軍少將) 東京市世田ヶ谷區代田一ノ三五五

土肥一夫 (海軍少佐) 同 杉並區上表窪一ノ三
 土肥顯 (奉天市次長) 滿洲國奉天市公署
 長勇 (陸軍大佐) 北支派遣黑田(重)部隊本部
 中堂觀惠 (海軍中佐) 中華民國福建省廈門興亞院廈門連絡部
 茶谷肇 (貿易商) 大阪市住吉區上住吉一六八
 小笠原長生 (子爵貴族院議員) 東京市世田ヶ谷區代田吹上
 大谷光瑞 京都市下京區堀川通花屋町下ル
 大藏公望 (男爵貴族院議員) 東京市澁谷區代々木富ヶ谷二五
 大石保 (海軍中佐) 東京市大森區田園調布二ノ八三
 太田耕造 (貴族院議員) 同 小石川區關口臺町五七
 大塚惟精 (貴族院議員) 同 澁谷區千駄ヶ谷三ノ四九
 大谷登 (日本郵船社長) 同 品川區上大崎長者九三五
 大宮橋尾 (陸軍少佐) 同 板橋區板橋町六ノ三、五六
 大河内雪 (醫師) 同 九 陸軍官舎
 大崎芳雄 (船員) 朝鮮北清津府鐵道病院
 沖野亦男 (海軍中佐) 神戶市神戶區海岸通り三
 小川雪松 (陸軍少佐) 板谷商船會社羽黑丸
 小野田拾次郎 (海軍中佐) 佐世保郵便局氣付漢口海軍武官
 小野寺信 (陸軍大佐) 滿洲國新京興安大路陸軍官舎十
 同 東京市杉並區荻窪三ノ二七
 同 目黒區柿ノ木坂二七六

小川喜一 (陸軍少將) 東京市杉並區和泉町一一〇
 岡村俊彦 同 赤坂區青山北町六ノ六〇
 和知鷹二 (陸軍大佐) 同 澁谷區大向通八
 尾崎源之助 (教員) 大阪市住吉區阪南町東五ノ二八
 和田龜治 (陸軍中將) 東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ三五九
 鷺野正市 (業) 名古屋市中區東陽町七ノ八
 渡邊盛之 (農) 廣島縣加茂郡西條町西條東
 鎌田彌彦 (陸軍中將) 東京市澁谷區下落合四ノ一六三
 河村徹 (臺灣日日新報社長) 臺北市元園町二五〇
 鹿子木員信 (文學博士) 神奈川縣鎌倉町淨明寺釋迦堂六四七
 神田正種 (陸軍少將) 東京市牛込區橫寺町五八
 影佐禎昭 (陸軍少將) 同 芝區高輪南町四七
 加來止男 (海軍大佐) 神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷四四七
 加藤辰彌 東京市赤坂區青山南町六ノ二六
 金澤冬三郎 (大日本精糖重役) 同 品川區大井鹿島町三三
 片倉衷 (陸軍中佐) 中野區新井町六〇一
 加賀美貞直 (滿洲國新京關東軍司令部) 中華民國天津特務機關
 加瀬俊一 (官吏) 東京市品川區五反田町六ノ三三
 金子定一 (陸軍少將) 滿洲國新京康德會館滿鮮拓殖公司

金子弘 (神戸高商教授) 神戸市須磨區大手町一ノ六番屋敷
 鹿島守之助 (法學博士) 東京市小石川區大塚町五六ノ七
 川路守正 (滿洲工廠顧問) 神戶市葺合區篠内町五ノ六ノ一
 川本芳太郎 (陸軍大佐) 東京市四谷區左門町一七
 川中誠三 (農) 大阪府中河內郡府津村今米三三
 龜田正 (海軍少佐) 東京市品川區上大崎長者丸
 芳澤謙吉 (貴族院議員) 同 麻布區霞町二三
 横山正脩 同 芝區琴平町朝陽館氣付
 吉野弘之 (陸軍大佐) 同 澁谷區大山町一〇五九
 吉武源五郎 (拓殖新報社長) 同 麴町區內幸町二ノ五
 高木陸郎 (中日實業株式會社副總裁) 同 芝區高輪南町二八
 建川美次 (陸軍中將) 同 目黒區駒場八六一
 竹藤峰治 (福大公司專務) 臺北市大正町二ノ二七
 田代重德 (滿洲國外交部長) 滿洲國新京外交部
 谷壽夫 (陸軍中將) 東京市中野區富士見町五三
 高橋坦 (陸軍大佐) 同 四谷區須賀町一
 高木梁 (東興實業會社) 中華民國天津英租界二九號路一
 高田那德 (醫師) 東京市小石川區關口臺町二六
 田上智川 (經濟事務研究) 東京府下武藏野町吉祥寺八丁

田中幸利 (讀賣東亞部長) 東京市京橋區西銀座
 立野儀光 (日滿鐵業株式會社專務) 東京市麹町區丸の内三ノ二
 田村新吉 (東株取引員) 同 澁橋區東大久保二ノ五二
 多井作喜悅 (富士商會) 同 荏原區中延町四七五
 多田武郎 (日本發送電) 同 小石川區小石川町一
 竹井十郎 (著述業) 同 赤坂區水川町一四
 高木茂 (陸軍少將) 同 目黒區上目黒五ノ二六五八
 津田信吾 (鐵道紡績株式會社社長) 兵庫縣芦屋字平田四二〇ノ八
 筒井潔 (大使館書記官) 佛國駐劄帝國大使館
 津々見仙甫 (醫) 高雄局氣付海南島海軍根據地隊
 根岸信 (經濟學博士) 東京市豐島區目白町四ノ六三
 根本博 (陸軍少將) 同 杉並區松ノ木一五五
 內藤智秀 (文學博士) 同 小石川區原町一二六
 中山優 (滿洲國建國大學教授) (滿洲國建國大學) (府下北多摩郡狛江村泉)
 中谷武世 (法政大學教授) 東京市世田谷區代田一ノ六三
 中平亮 (滿鐵社員) 滿洲國奉天市蕪浪町五六
 中瀬泆 (海軍大佐) 帝國軍艦妙高
 中村寧 (滿洲帝國協和會) 滿洲國新京特別市東陽胡同五〇
 中原謹司 (衆議院議員) 長野縣下伊那郡龍江村 (麻布區竹谷町二ノ九)

中井千萬騎 (陸軍中佐) 臺北市書院町三ノ二
 中島親孝 (海軍少佐) 臺北市臺灣軍司令部
 中里重次 (會社重役) 東京市目黒區下目黒三ノ四七五
 中野虎太 (海軍少將) 同 赤坂區青山南町三ノ五一
 南雲忠一 (海軍少將) 同 支那派遣軍糧部中野(虎)部
 南洋協會 神奈川縣大船町臺一四三八
 七海吉郎 東京市麹町區丸の内二ノ一〇
 永原外清 (會社社員) 同 本郷區西片町一〇はノ二四
 村川堅固 (文學博士) 大阪市西區西長堀北通五
 村田省藏 (貴族院議員) 香里工具製作所氣付
 村地卓爾 (辯護士) 東京市小石川區雜司ヶ谷九九
 室井捨治 (海軍少佐) 同 大森區上池上町九八八
 字治田直義 (東亞同文會) 駐獨帝國大使館
 白田寬三 (陸軍大佐) (大森區南千束町一四二)
 野口正藏 (會社社員) 同 東京市世田谷區代田二ノ八〇
 栗原正 (全權公使) 同 世田谷區羽根木町六五五
 楠本實隆 (陸軍少將) 瑞西駐劄帝國公使館
 熊谷安太郎 (東京市方面委員) (牛込區西五軒町一〇)
 桑原重遠 (海軍中佐) 中華民國上海興亞院華中連絡部
 東京市荒川區尾久町一ノ九七八
 中葉民國上海興亞院華中連絡部

倉澤胤三郎 東京市日本橋區兜町一ノ八
 栗山新三 (臺灣銀行所長) 東株ビル森元商店
 矢野仁一 (文學博士) 高雄局經由第七海軍郵便所
 山脇正隆 (陸軍中將) 第一派出所氣付
 山口多聞 (海軍少將) 東京市市京區田中飛鳥井町四三
 安田寬 (教師) 同 牛込區北町三二
 山縣正郷 (海軍少將) 朝鮮京城府岡崎町一二四
 山下知彦 (男爵 海軍大佐) 神奈川縣逗子町櫻山廣地九九八
 山下留吉 (外務書記生) 臺北市海軍武官府氣付 (杉並區堀ノ内一ノ四二)
 山田達也 (海軍中佐) 在佛帝國大使館
 山崎清純 東京市目黒區芳窪町一〇五二
 谷萩那華雄 (陸軍大佐) 神奈川縣藤澤町辻堂字濱見山七
 松井石根 (陸軍大將) 支那派遣軍司令部氣付
 松岡洋右 (前滿鐵總裁) 靜岡縣熱海市伊豆山奥鳴澤八九
 松江春次 (南洋興發社長) 東京市澁谷區千駄ヶ谷二ノ三六
 松尾忠二郎 (笠戶船渠社長) 同 本郷區上富士前町一一
 增田次郎 (日本發送電總裁) 神戶市澁谷區高尾通四ノ八
 牧次郎 (陸軍少將) 東京市澁谷區上智町四八
 前田稔 (海軍大佐) 同 世田谷區赤堤町一ノ三
 同 大森區千束町六七八

萬俣喜藏 神戶市神戶區西町興銀ビル五七
 増田正雄 東京市麻布區新堀町六
 松井七夫 (陸軍中將) 同 目黒區下目黒五ノ七一六
 松浦嘉三郎 滿洲國新京永昌胡同二八八
 松藤實也 (中日實業支配人) 東京市品川區五反田五ノ五七
 松室孝良 (陸軍少將) 中華民國南京大方巷四興亞院
 松室正憲 (會社社員) 華中連絡部南京事務所氣付
 松延仁一 (海軍少佐) 東京府下吉祥寺二二一四
 眞方勳 (陸軍中佐) 橫須賀市橫須賀海兵團士官室
 藤井正彬 (久保田證券會社) 東京市麹町區興亞院 (世田谷區野澤町二ノ二〇〇)
 藤江金兵衛 (郵便局長) 東京市牛込區臺町一二
 藤原喜代馬 (海軍大佐) 靜岡縣周智郡森町城下
 駒井德三 (興亞時習社學長) 東京市麹町區霞ヶ關軍司令部
 福見幸一 (海軍少佐) 兵庫縣武庫郡良元村甲子志
 古宮勝人 廣島縣江田島海軍兵學校
 古莊幹郎 (陸軍大將) 比律賓マニラ市ミセルコロギア街八二七
 近衛文麿 (公使) 東京市荏原區小山町六二二
 小林省三郎 (海軍中將) 同 杉並區西田町一ノ四七三
 國分正三 神奈川縣鎌倉町雪ノ下五八一
 同 英領ビルマ蘭貢市ダンホーシ街三八〇

兄部 勇次 (海軍中佐) 佐世保郵便局氣付第一水雷隊
 甲谷 悅雄 (陸軍少佐) 東京市世田ヶ谷區代田二ノ六六
 黃 撥 文 上海アスターハーアス氣付
 近藤 義晴 (日蘇通信社) 東京市目黒區中目黒一ノ七八一
 近藤 英二郎 (海軍中將) 同 世田ヶ谷區玉川與澤町二ノ五三六
 權藤 正威 (陸軍中佐) 同 世田ヶ谷區松原町四ノ三八三
 小泉 三一郎 (教員) 同 瀧野川區中里町二六五
 小 管 勇 (醫師) 同 中華民國北京無量大人胡同二一號
 小島 兼太郎 橫濱市鶴見區鶴見町三〇一
 江橋 正貫 (會計社員) 東京市芝區白金三光町四五〇
 江口 穂積 (海軍少佐) 同 麹町區霞ヶ關軍司令部
 蘆澤 敬策 (陸軍少將) 東京市杉並區永福町四三一
 青井 孝市 (官吏) 滿洲國興安東省布特特旗博克圖警署
 青木 成一 (陸軍少將) 東京市杉並區和田本町八八九
 青山 源七郎 (代理業) 廣島縣尾道市蓬拜所上
 秋山 昱禧 神奈川縣藤澤町鶴沼西海岸
 麻生 正一 東京市江戸川區小松川三ノ八五
 天川 信雄 (早稻田大學教授) 同 豐島區椎名町二ノ一八九三
 朝田 肆六 (海軍少佐) 神奈川縣鎌倉町小町三九五

佐藤 佐 (臺北高商教授) 臺北市昭和町二四六
 佐藤 安之助 (陸軍少將) 東京市澁谷區千駄ヶ谷三ノ五五九
 櫻木 俊一 (新愛知新聞理事) 名古屋市中區江中町二ノ六
 酒井 武雄 (海軍大佐) 神奈川縣鎌倉町淨明寺七
 里屋 武夫 (陸軍中佐) 福岡市西新町一ノ七
 佐藤 幸徳 (陸軍少將) 滿洲國哈爾濱佐藤部隊
 佐藤 清勝 (陸軍中將) 東京市本郷區編生町二
 佐藤 和弘 同 東京市本郷區編生町二
 佐 中 莊 (廣島高等學校教授) 廣島市南段原町一三三四
 佐々木 迪伶 (會計社員) 兵庫縣武庫郡住吉村牛神八五
 菊池 武夫 (男爵 陸軍中將) 東京市豐島區巢鴨町五ノ二五三
 岸井 壽郎 (南羽鐵業株式會社社長) 同 麻布區本村町一四六
 北田 正元 (全權公使) ベルギー國駐在帝國公使館
 木野 廣三 京都市室町寺ノ内上ル
 木下 秀明 (陸軍中佐) 東京市杉並區馬橋三ノ四一六
 南 次郎 (陸軍大將) 朝鮮京城府朝鮮總督府
 南 一雄 東京市世田ヶ谷區松原町二ノ五
 水谷 吉藏 (陸軍少佐) 同 世田ヶ谷區玉川用賀町二ノ一、六一八
 白鳥 敏夫 (全權大使) 赤坂區青山高樹町一二

下中 彌三郎 (平凡社社長) 東京市杉並區天沼四九一
 柴山 兼四郎 (陸軍少將) 同 目黒區駒場八六一
 清水 董三 (書記 官) 中華民國上海虹口百老匯大廈八七號(日本總領事館)
 白岩 龍平 (株式會社取締役) 東京市澁谷區南平臺四六
 白坂 義直 (外務省囑託) 同 芝區西久保巴町四五
 下 村 宏 (法學博士) 同 大森區田園調布町三ノ二二ノ二
 柴野 爲亥知 (陸軍中佐) 金澤市歩兵第七聯隊
 柴田 利藏 英領新嘉坡ベンクローレン・ストリート六六
 柴田 義彦 (辯護士) 東京市麹町區富士見町一ノ一
 城子 十介 同 麹町區丸の内三ノ二
 志柿 謙吉 (海軍少佐) 上海海軍陸戰隊租界部隊本部
 清水 信勝 (明治製菓支店長) 名古屋市昭和區菊園町一ノ五
 清水 新平 (中日實業株式會社取締役) 東京市澁谷區向山町九〇
 廣田 弘毅 (貴族院議員) 同 澁谷區原宿町二ノ一七〇
 平 泉 澄 (文學博士) 同 本郷區曙町一二
 樋口 季一郎 (陸軍中將) 金澤市第九師團司令部
 平塚 廣義 (貴族院議員) 東京市目黒區中目黒三ノ九四六
 平野 英一郎 同 世田ヶ谷區島山町二三〇
 日笠 芳太郎 同 澁谷區原宿三ノ二九二

東 忠 藏 同 澁谷區幡ヶ谷本町一ノ二
 森田 貫一 (海軍大佐) 同 世田ヶ谷區玉川田園調布一ノ三五
 望月 晋五郎 (比島協大亞會) 比律賓マニラ市ヒダルゴ八六一
 守屋 精爾 (陸軍大佐) 東京市豐島區高田本町一ノ三四
 森本 州平 (農業) 長野縣下伊那郡松尾村
 森田 吉太郎 (官吏) 東京府小笠原父島大村
 木村 勝治 (官吏) 上海特別市政府教育局
 千家 尊建 (神道教師) 大阪市北區北島町二
 末次 信正 (海軍大將) 東京市杉並區西荻窪三ノ三三
 角 岡 知良 (辯護士) 同 芝區芝公園第三十二號地八
 鈴木 貞一 (陸軍少將) 同 澁谷區美竹町五七
 鈴木 宗作 (陸軍少將) 同 杉並區關根町一二〇
 末澤 慶政 (海軍中佐) 同 品川區大井山中町三五三
 末次 政太郎 (新聞記者) 中華民國北京京城樓樓第七號
 鈴木 京 (陸軍中佐) 東京市中野區上町四五
 鈴木 當之 (高女教諭) 中華民國施高塔路青莊五號
 吉村 好治 (海軍協同會參事) 神戸市外灘屋北ノ口二〇二

通常會員

- 井上文藏(教員) 山梨縣中巨摩郡鏡中條村
- 石黒利六(教員) 横濱市中區井土ヶ谷小學校
- 飯田作藏(教員) 横濱市中區蒔田町東谷八八
- 飯沼莊一郎(教員) 東京市本郷區東片町一五前田方
- 伊藤敬二(教員) 山形縣飽海郡上由村大字上野會根
- 岩崎良能(教員) 東京市中野區野方町二ノ六三
- 早崎悟郎(教員) 朝鮮慶南昌寧郡高岩公立小學校
- 服部宗治(貿易商) 東京市市神田區小川町一ノ一
- 西島秀之助(教員) 横濱市中區赤門町一ノ一一
- 西川松吉(教員) 東京市四谷區永住町二
- 堀口守(教員) 山梨縣西八代郡山宮小學校
- 堀内延次郎(電氣計器製作所) 東京市芝區濱松町四ノ一七
- 富田房吉(教員) 横濱市中區井土ヶ谷小學校
- 豐島萬龜美(教員) 横濱市神奈川區淺間臺三五
- 小倉隆藏(女學校校長) 靜岡縣志太郡藤枝町鬼若寺(聖)
- 岡田義勇(教員) 廣島縣御調郡向島東村下町
- 若林勤治(小學校校長) 東京市本所區向島町二ノ一〇
- 吉野雄二(教員) 横濱市中區弘明寺町陽明寮
- 吉川雅智(教員) 横濱市磯子區磯子町九一
- 高橋作樂(教員) 東京市澁橋區戸塚町三ノ三六三
- 高垣國松(教員) 同 中野區住吉町四一
- 田畑梅次郎(教員) 横濱市中區間門町二ノ三七六
- 竹内文平(教員) 東京市芝區神谷町一八
- 竹内榮一郎(商業) 同 日本橋區箱崎町一ノ一
- 土屋輝太郎(教員) 横濱市中區打越一五
- 中村勝五郎(吏員) 靜岡縣濱松市市役所
- 長山總一郎(教員) 横濱市神奈川區南幸町三ノ七五
- 永久操六(教員) 廣島縣御調郡向島東村
- 村上節藏(農業) 愛媛縣新居郡泉川村
- 宇井利一(小學校校長) 東京市江戸川區小岩町八ノ二五九
- 内田吉郎(教員) 横濱市磯子區原町八二
- 浦本政三郎(慈惠醫大教授) 東京市世田ヶ谷區成城町八七八
- 上田吉兵衛(東株取引員) 同 澁谷區松濤町五二
- 野口三郎(店員) 同 麹町區九段一ノ八ノ二
- 熊谷千代丸(醫師) 同 增田繁夫方
- 熊澤健兒(華北交通會社員) 同 本郷區湯島町四ノ一
- 黑澤健兒(華北交通會社員) 同 中華民國北京市內一區 棲風樓一六號

- 山田重次(辯護士) 東京市澁橋區角筈町三ノ一四六
- 山澤市衛(會社員) 同 王子區稻付西町六ノ二一
- 山里昌英(教員) 同 王子區神谷町一ノ二六四
- 矢島豪(教員) 同 豐島區西巢鴨町二ノ二四四
- 益田保雄(教員) 片岡方 横濱市中區井土ヶ谷町
- 松井徳也(醫師) 井土ヶ谷小學校
- 府川勝藏(教員) 東京市芝區新門前一六
- 國分正衛(教員) 横濱市神奈川區子安通三ノ三三
- 小坂早五郎(醫師) 東京市四谷區內藤町一大和莊
- 小高典(醫師) 同 板橋區大谷町日本大學病院
- 小寺正義(教員) 横濱市磯子區瀧頭町一三九
- 安倍昌輔(著述業) 同 中區間門町二ノ二四三
- 佐野孝(教員) 東京市豐島區雜司ヶ谷五ノ七〇
- 佐野孝(教員) 横濱市磯子區西根岸下町六九
- 佐久間利平(會社員) 市川市若宮三八三
- 水谷信雄(新聞記者) 東京市目黒區下目黒四ノ九〇八
- 島津正一(教員) 横濱市中區井土ヶ谷中町一〇七
- 重富英純(教員) 中華民國江蘇省徐州公明街白楊金島方
- 澁谷將(教員) 横濱市中區間門町二ノ三七九
- 平本志伸(教員) 同 中區竹の丸九番地
- 廣瀬亘(教員) 同 戸塚區宮澤町七一四
- 森岡繁(商業) 群馬縣伊勢町板垣清平方
- 望月久三(教員) 山梨縣西八代郡豐和村谷八ノ一
- 毛利英男(教員) 滿洲國新京豐樂路一〇五一郡ビ
- 關口健次(教員) 淺草區向柳原一ノ一七
- 鈴木光義(教員) 横須賀市船越六二九
- 伊藤好明(中學教員) 廣島市西觀音町二ノ一〇〇六

各地支部役員及會員氏名

福岡支部

一、支部長 西川虎次郎
 一、理事 (〇印八事務理事)

板垣政彦 伊藤兆司 原田貞吉
 〇星村市平 堀ノ内直 張玄彦
 岡部 繁 高橋清作 谷村 熙
 中牟田辰六 野中秀雄 松本勝次郎
 〇後藤七郎 荒津長七 阿部陽太郎
 〇里屋武夫 酒匂宗次郎
 板垣政彦 (九州帝國大學教授) 福岡市平尾淨水池通八九六
 伊藤兆司 (九州帝國大學助教) 箱崎町社家町二〇四三
 石丸辰一 (陸軍少將) 下養因大銀谷
 今村貞次郎 同 鳥飼本町一ノ三八
 井上喜傳 (陸軍中佐) 同 鳥飼町三ノ二六七
 原田貞吉 (陸軍中將) 同 西新町六ノ三九八
 畑山四男美 (福岡市長) 同 藥院鹽人町
 西川虎次郎 (陸軍中將) 同 西新町三三
 西田 廣 (東邦電力社員) 同 馬出町七五四
 星村市平 (陸軍少將) 同 春吉六月田町一〇一
 堀ノ内直 (陸軍少將) 同 荒戸四番丁二三八
 堀 重里 (福岡高等學校校長) 同 地行町七番丁官舎
 戸上駒之助 (醫學博士) 同 舊柳町六三
 土井彰夫 (太平洋海上火災保險支店長) 同 鳥飼四丁日三三三
 張玄彦 (九州帝國大學教授) 同 地行西町一九
 岡部 繁 (岡部鐵工所社長) 同 馬出町一一二九
 大立目四郎 (日本工務會社長) 同 鏡島町一五
 太田 一郎 (會社取締役) 同 南港町三九
 太田凱夫 (九州勸業專務) 同 藏本町五〇
 渡邊福雄 (渡邊鐵工所社長) 同 妙見町一ノ二

河東卓四郎 (海軍中將) 福岡市新開町三ノ七四
 河野清三郎 (修驗館教師) 同 比惠本町八五〇
 神保 榮 (映畫館主) 同 平尾淨水池通六〇〇
 金生喜造 (福岡造船廠所長) 同 荒戸三番丁一九六
 加藤 清 (福岡造船廠所長) 同 濱ノ町三六
 河上和一 (福岡中學校校長) 同 荒戸町三番丁一八六
 蒲池龍雄 (酒造業) 福岡縣三浦郡城島町
 吉原正俊 (農業) 同 縣同郡大川町小保
 田中次郎 (八幡中學校校長) 八幡市中學校校長官舎
 武内謙介 (字美町長) 福岡市外字美町
 高岡達也 (醫學博士) 福岡市真砂町四七
 高橋清作 (陸軍大佐) 同 平尾本町一一三三
 高津 格 (會社社員) 滿洲國阜新縣阜新炭坑事務所
 谷村 熙 (九州帝國大學教授) 福岡市地行東町二番丁二〇二
 園田房雄 (三洞運輸取締役) 同 平尾淨水池通五四
 網島儀太郎 (元支那稅關長) 同 荒戸二番丁一七五
 津田健二郎 (會社社員) 同 藥院五六五ノ六
 辻 平吉 (工進商會主任) 同 千歲町一ノ七四
 中牟田辰六 (陸軍少將) 同 鳥飼町三ノ一八五
 中牟田 喜兵衛 (岩田屋百貨店社長) 同 新大工町
 中澤 眞吉 (元高女校長) 同 荒戸町三番丁一九二
 中野 蕃 (陸軍中佐) 大分縣隊區司令部
 中野次郎 (中野鐵業社長) 福岡市下養因栗林六四四
 中富福太郎 (齒科醫) 同 市外箱崎町網屋町
 永富貞平 (辯護士) 同 雁林町二七
 永富信太 (空機製作所) 同 市外竹下
 內藤 匡 (福岡高校教授) 同 西新町沙入二〇六四
 上野恒夫 (上野商店主) 同 因幡町三六
 野中季雄 (海軍中將) 同 大濠町八五
 久世庸夫 (前福岡市長) 同 西職人町六八
 栗本武三 (辯護士) 同 中庄町八二
 倉成久米吉 (榮屋旅館主) 同 橋口町一四
 久保雄莊 (洪水會支部長) 同 住吉柳橋一六〇四
 國武高次 (荒津商店取締役) 同 大濠町一〇三
 隈部以忠 (中學修驗館長) 同 地行東町一番丁二二三
 八尋武彦 (博多灣鐵支配人) 同 大濠町八九
 山形信廣 (陸軍大佐) 同 吉塚町三角
 山本定房 (陸軍大佐) 同 城西橋通五七

松本勝次郎 (會社重役) 福岡市鳥飼濱田町三ノ一二四
 前田稔靖 (九大學生課主事) 同 藥院露切町一五
 後藤七郎 (陸軍少將) 同 鳥飼町三ノ一六一
 古賀徹治 (陸軍少將) 同 城西橋通八ノ二
 小西春雄 (明治鐵業重役) 戶畑市明治鐵業株式會社
 許斐宏和 (村長) 福岡縣嘉穂郡額田村勢多
 江口作二 (製瓦會社主任) 福岡市東公園日蓮銅像前
 荒津長七 (荒津商店店主) 福岡市西職人町三一五
 荒津慶太郎 (荒津商店取締役) 同 地行東町三一五
 明石東次郎 (陸軍大佐) 福岡縣粕屋郡香椎村濱男
 阿部暢太郎 (福日新聞編輯局) 長福岡市鳥飼濱田町三ノ一〇九
 青木信 (中央重油會社代表) 同 鳥飼町一ノ七二
 安藤謙治 (有營館長) 同 鳥飼町五ノ四四七
 里屋武夫 (陸軍中佐) 同 西新町一ノ七
 酒匂宗次郎 (陸軍少將) 同 春日六月田町九九
 佐藤博 (九州帝大教授) 同 草ノ口町二八
 佐藤福云 (福岡師範校長) 同 伊勢浦校長官舎
 齋田耕陽 (福日新聞參事) 同 荒戸町二番町
 齋藤新三郎 (沖電氣支店長) 同 警固古小島

清原進 (協調會參事) 同 本庄町三ノ四七
 宮成勝哉 (陸軍少將) 同 春日町三軒屋町二九七
 白坂英彦 (前縣教育會長) 同 地行西町二一
 眞貝貫一 (九水電取締役) 同 新開町二ノ四三
 下川三藏 (海軍大佐) 上海同文書院
 柴田亨 (機械商會主任) 福岡市春日六月田町一〇三
 光安勝 (陸軍大佐) 同 平尾淨水通九四一
 平買衛太郎 (東邦電力社員) 同 西新町一ノ一二三
 盛永俊太郎 (九州帝大教授) 同 平尾町一本木六七
 末松長策 (映畫業) 同 西新町沙人一三五
 末松俊造 (陸軍少將) 福岡縣糸島郡前原町
 鈴木雅男 (第一海上火災保險支店長) 福岡市鳥飼濱田町三ノ一一六

大阪大亞細亞協會

一、理事 (○印は常任理事)

○今井嘉幸 岩井尊文 伊藤眞一
 ○濱崎照道 ○西原廉之助 ○角野久造
 神尾茂 高石眞五郎 高原操

武田鼎一 ○長岡克曉 ○村瀬貞次郎
 ○山本願彌太 遠藤春山 ○秋山愛次郎
 澤村幸夫 由上治三郎 ○鹽澤元次
 ○下地玄信 森下政一

早島喜一 (夕刊大阪新聞) 兵庫縣武庫郡鳴尾村西開八三
 畑野源一郎 大阪市西區榎下通一ノ八
 葉山萬次郎 (大阪外語學校校長) 天王寺區上本町八
 高山章 布施市菱屋西八〇
 林龍太郎 (日本禁酒同盟) 兵庫縣川邊郡西谷村雲雀ヶ丘
 西松友吉 (西松メリヤス) 兵庫縣武庫郡住吉村濱新田九六
 西松長四郎 (西松商店取締役) 同
 西岡勢七 (再製樟腦監査役) 同 武庫郡精道村若屋西新田
 西尾種熊 (フロン製井水) 大阪府住吉區帝塚山西五ノ三四
 西尾謙吉 大阪府吹田町七五三
 西尾廉之助 同 豐能郡岡町幸通

伊藤眞一 (滿鐵大阪出張所) 兵庫縣川邊郡立花村塚口住宅地
 伊藤竹之助 (伊藤忠商事) 下慶長九九五ノ一五
 池崎忠孝 (取伊藤忠商事) 八九 武庫郡住吉村牛神東一五
 飯島幡司 (大阪朝日新聞) 大阪府北河内郡四條村野崎
 飯田重太郎 (辯護士) 西宮市夙川雲井橋北
 飯田直次郎 (高島屋取締役) 大阪市東區南新町一ノ二三
 今井嘉平 (法學博士) 兵庫縣武庫郡若屋平田
 岩井尊文 (辯護士) 神戸市神戶區中山手通四ノ二一
 井上信太郎 奈良市春日野町四
 石田美喜藏 (安全素道會社長) 大阪市浪速區木津川町一ノ二
 一瀬条吉 (三和銀行取締役) 同 住吉區帝塚山西二ノ二三
 市川洗藏 (貿易商) 兵庫縣武庫郡若屋花田
 濱崎照道 (瑞寶鐵業取締役) 同 大阪市北區堂島中二ノ四一
 濱恒次郎 同 北區堂島船大工町三〇
 同 大正區千島町

堀拔義太郎 (堀拔製帽所社長) 同
 本田惠隆 同
 寶上熊之進 同
 土井伊八 (貿易商) 同
 鳥居久吉 (鳥居商店) 同
 藤堂猷三 同
 西村喜一 (西村金商店) 大阪府西區江戶堀南通三ノ三
 西村憲信 (大阪印刷インキ) 大阪府泉北郡濱寺町三光松四番
 堀拔義太郎 (堀拔製帽所社長) 兵庫縣川邊郡伊丹町
 本田惠隆 京都市下京區坊城小路上ル本山
 寶上熊之進 大阪府港區八幡屋元町二ノ八五
 土井伊八 (貿易商) 西宮市相生町一三一
 鳥居久吉 (鳥居商店) 大阪市東區南久寶寺町二丁目
 藤堂猷三 同 住吉區北島中二ノ一八

豐成光夫 (日刊工業新聞) 大阪府豊能郡箕面村櫻井五番通
 近久順彦 (日本セプトン工業) 同 豊能郡箕面村櫻井四番通
 李家弘 (日本齒輪取締役) 京都市中京區河原通三條上ル惠比須町四二五
 岡本剛 (日本活生白土) 兵庫縣武庫郡甲東村下大市五ヶ山七一五
 岡田源太郎 (内外綿株式會社) 大阪市北區堂島北町
 大西耕三 (法學博士) 同 北區堂島、堂ビル三階
 沖津仁三郎 (金物商) 同 東區博勞町三ノ四一
 長部慎三 (酒造業) 西宮市今津字浦風
 小畑忠良 (住友會社) 同 天王寺區小宮町
 小野義夫 (ラサ工業社長) 兵庫縣武庫郡精道村打出寺開地
 尾崎五郎 (五光商會) 池田市東市場三ノ一
 翁長良孝 大阪市西淀川區塚本町五〇二
 渡邊喜三郎 (鹿島組取締役) 兵庫縣武庫郡精道村若屋西新田五二九
 渡部英一 (住吉温泉土地) 天津日本租界須磨街カメノキホテル
 渡邊永重 大阪市東區内淡路町二ノ四二東
 金井勝三郎 (滿洲弘報協會) 同 北區堂島濱通一ノ四四
 金澤利助 (金澤事務所) 同 住吉區天神森二ノ四一
 金子二郎 (大阪外語學校) 同 布施市小阪六〇九
 神尾茂 (大阪朝日新聞社) 西宮市森具字北蓮毛八四七ノ四

角野久造 (日滿實業) 同 產所町
 片岡安 (工學博士) 京都市伏見區桃山町松平筑前
 河村武 (辯護士) 大阪市東區内淡路町一ノ五
 勝本鼎一 (神戸商大講師) 同 西區南堀江通一
 膳末次郎 (大阪農工銀行) 同 西區京町堀上通五ノ一三
 梶彦兵衛 同 北區天神橋筋一ノ三
 加藤直士 兵庫縣川邊郡雲雀ヶ丘
 蒲田政治郎 大阪市住吉區帝塚山中三ノ七
 鹿子木彦三郎 大阪府泉北郡濱寺町宮下
 川本山松 (川本金屬工業) 大阪市東淀川區長柄濱通一ノ四〇ノ二
 米本儀之助 (精華化學工業) 大阪府泉北郡高石町南一三〇四
 吉崎龜之助 (辯護士) 大阪市北區堂島濱通一ノ七三
 吉野美彌雄 (大阪外國語學校) 同 天王寺區上本町八丁目
 吉川清一郎 (吉川化學工業所) 兵庫縣武庫郡鳴尾村小曾根字戶崎
 吉田淳 (大阪朝日新聞) 京都市右京區御室芝橋町一及輪橋
 田中市藏 (近江商會) 大阪市西區靱北通一ノ二一
 田中德松 (日亞製鋼業會社) 同 住吉區晴明通二ノ四七
 田中平次 兵庫縣武庫郡本山村小路一三三八
 田崎仁義 (大阪商大教授) 大阪市住吉區山阪町一ノ一一〇

高尾國男 (浪速高校教授) 豐中市新六七七
 高尾正太郎 (大阪高尾鐵工所) 大阪市西淀川區大仁元町一ノ七
 高原操 (大阪朝日新聞) 大阪府下池田町二〇〇四
 高井留吉 大阪市港區高尾町一ノ三六
 高石眞五郎 (大阪毎日新聞) 大阪府泉北郡高石町羽衣
 武田銳太郎 (武田長兵衛商店) 大阪市東區道修町二ノ二七
 武田鼎一 (武田經濟研究所) 兵庫縣武庫郡甲東園松嶺莊
 武川盛次 (武川商會社) 西宮市今津字濱田四一〇
 多賀二夫 (山發貿易) 兵庫縣武庫郡精道村若屋字城山一八六〇
 竹中藤右衛門 (竹中工務店社長) 神戸市葺合區能内町六ノ五
 大同和藏 大阪市住吉區阿倍野筋五ノ一四
 竹田義藏 (武田長兵衛商店) 兵庫縣武庫郡若屋岸ノ下七八
 竹上正吉 奈良縣磯城郡香久山村面堂
 武田利平 (會社) 兵庫縣川邊郡伊丹町伊丹五四
 津田信吾 (鐘紡社長) 同 武庫郡若屋平田四三ノ八
 津田榮 大阪府岸和田市堺町七七
 辻元謙之助 (大阪帝大工學部) 堺市神石村旭ヶ丘一六一
 辻本天常 大阪市此花區上福島南三丁目
 筒井民次郎 同 港區九條北通三ノ五四九

長澤茂 (長澤商店社長) 大阪府泉北郡鳳町大字大鳥
 長岡克曉 (大阪毎日) 西宮市中濱町三
 內藤熊喜 (日本電力副社長) 大阪市北區宗是町一日本電力氣附
 中村桃太郎 (東亞朝日) 同 武庫郡良元村小林堂前七七ノ二
 中村基次郎 大阪市東區北新町二ノ一五
 中村信太郎 (伊藤商會社) 兵庫縣武庫郡若屋川原一七八四
 中村伊三郎 (大阪屋商店) 大阪市住吉區帝塚山中三ノ四一
 中山太一 (貴族院議員) 同 住吉區松崎町二ノ五二
 中山悅治 (中山製鋼所社長) 兵庫縣武庫郡若屋字法泉寺
 村地久治郎 (大阪商會社) 兵庫縣武庫郡精道村若屋笠ヶ塚一八五四
 村瀬貞次郎 (海軍少將) 同 武庫郡若屋山下二三三
 村田省藏 (大阪商船社長) 同 武庫郡住吉村字高林一八七六ノ五
 村田忠兵衛 (大阪時事新報社) 大阪市南區心齋橋筋一丁目
 村上長舉 (大阪朝日) 兵庫縣武庫郡御影町那家二八五
 村上愛治 (大阪朝日) 同 武庫郡精道村打出字丸山一〇
 武藤貞一 (大阪時事新報社) 大阪市西淀川區大仁東一
 梅村四郎 (豐國自動車會社) 大阪市北區曾根崎上四丁目
 上田義惠 兵庫縣武庫郡精道村若屋大樹八〇九
 大阪府中河内郡大美村池内二〇

上野精一 (大阪朝日新聞社長)

大阪市東區平野町一ノ五

松本一格

大阪市天王寺區悲田院町五七

國松文雄

豐中市新免八四六

前川晃一

大阪市南區心齋橋北詰

草川求馬 (草川商事社長)

兵庫縣武庫郡精道村芦屋字權ノ森

前田哲四郎

西宮市今津字綱引四一

栗本勇之助 (栗本鐵工所社長)

大阪市天王寺區上宮町三五

前田哲四郎

兵庫縣武庫郡鳴尾村濱甲子園二

黑川福三郎 (黑川商店社長)

同 天王寺區小宮四三

藤尾正重

大阪府中河內郡三野鄉村玉井一

倉橋忠次

同 西區新町通一ノ五

藤井滿彦

大阪市西區本田三番町二

山田多計治 (大阪機械製作所社長)

兵庫縣武庫郡精道村芦屋字冠一七三一

藤原義重

同 西區新町通り一ノ七

山本重次郎 (山本インキ社長)

京都府乙訓郡向日町

小松正則

兵庫縣武庫郡魚崎町横屋三三

山本願彌太 (綿布商)

大阪市東區南久太郎町二ノ一九

小山省三

大阪市西區薩摩堀南之町一

山口定亮 (信貴山急行電鐵專務)

同 天王寺區北山町四八

兒玉基治

豐中市新免九五

山岡光盛 (服部時計店支店長)

同 住吉區阿倍野筋五ノ六五

兒山破魔吾

兵庫縣武庫郡魚崎町魚崎七二八ノ三七

山田裕一 (大阪能登會々長)

大阪市西區西長堀南通三ノ二二

河野三通士

同 川邊郡雲雀ヶ丘

山口幸三郎 (内外綿株式會社)

同 北區堂島北町

駒井德三

同 武庫郡寶塚

矢倉寅藏

同 西區新町通一

江崎利一

同 武庫郡魚崎町横屋七六五

麻殖生 德次郎 (製粉業)

同 西區阿波座下通一丁目

遠藤春山

大阪市住吉區阿倍野筋二ノ三〇

松岡潤吉 (貴族院議員)

兵庫縣精道村山芦屋大僧一六二

秋山愛二郎

兵庫縣武庫郡御影町篠坪三〇

松浦 巖 (松浦巖商店取役)

大阪市住吉區天下茶屋一ノ一七

荒川太逸

西宮市櫻谷五九

松村善藏 (丸善石油會社社長)

同 北區會根崎上四ノ六八

荒木金助

大阪市東區北久寶寺町五ノ二六

松代和四郎

兵庫縣武庫郡精道村芦屋平田

芦田享介

兵庫縣武庫郡芦屋字松ノ内

淺田 勇 (鑄物業)

大阪市東區南中道四ノ三〇

木村平八

同 武庫郡精道村打出下宮塚

渥美松榮

同 住吉區山坂町二ノ七二

木下東作

大阪市住吉區住吉町一〇五二

甘田誠三郎 (鈴木商店取締役)

大阪府豐能郡岡町壽通二ノ三〇

喜多市松

大阪府豐能郡津村垂水六八〇

阿部藤造 (又一商會取締役)

兵庫縣武庫郡本山村野寄

北野平一郎

大阪市天王寺區上本町七ノ九

安宅 武 (安宅商會)

同 武庫郡本山村野寄五〇四

北村謙二郎

大阪トヨダ自動車販賣專務

安宅彌吉 (安宅商會)

大阪市東區今橋五ノ一四

木曾隆市

大阪市西區新町通二ノ七

青木忠治

同 西區新町通一ノ一一

木村教俊

大阪府豐能郡南豐島村原田一一二ノ三

足立節治

兵庫縣武庫郡御影町那家上山田一〇四ノ二

木村長四郎

大阪市西區江之子島西之町九

坂井勝一

布施市下小阪

木村禎橋

大阪市西區江之子島西之町九

三田谷 啓 (醫學博士)

兵庫縣武庫郡精道村打出

岸本 雄

同 北區宗是町大坂ビル

三宮清十郎 (太陽商會代表社員)

同 武庫郡精道村打出字野田

由上治三郎

兵庫縣武庫郡精道村芦屋八田八五九

澤村幸夫 (大阪毎日新聞社)

大阪市天王寺區勝山通一一七六

湯川美成

大阪府吹田市豐津垂水一一七二

エ・エム・サハイ

兵庫縣武庫郡魚崎町

飯井定吉

同 泉北郡高石町御羅橋

阪田國三郎 (大阪中外商業新報社)

大阪市東區北濱一丁目

水野利八

兵庫縣武庫郡精道村三條

佐野武彦 (三興社)

東京市日本橋區箱崎町二ノ九

三宅正三

大阪府豐能郡中豐島村大字岡山三〇一

佐多愛彦 (醫學博士)

大阪市北區堂島北町一一

三浦常太郎

同 南河內郡高鷲村字西川二一四ノ五

佐々木國藏 (内外綿株式會社)

同 北區堂島北町

三浦 勉

大阪トヨダ自動車販賣專務

笹岡喜代太 (昭和鐵業會社)

大阪府北河內郡友呂岐村字香里一三八八

溝口忠次郎

大阪府豐能郡津村垂水六八〇

北川與平 (江商株式會社專務)

兵庫縣武庫郡精道村芦屋

南方熊次郎

同 西區南堀江通五

見市清 (陸軍少將) 大阪市西淀川區佃町一六〇
 下地玄信 (計理士) 同 旭區新森小路北二ノ六三
 下村齊次郎 (日米商店取締役) 兵庫縣武庫郡御影町石屋一四五
 島田一郎 (烏田硝子製造所社長) 兵庫縣武庫郡甲子園月見里
 島田德太郎 (帝國製紙社長) 豐中市新免宮山
 首藤守彦 (醫學博士) 大阪市此花區今開町一
 莊田雅雄 (日本郵船神戸支店長) 同 住吉區天王寺町二二八六
 鹽澤元次 (大阪時事新報編輯局長) 大阪市北區會根崎上四
 澁江利之吉 大阪市西區新町南通一
 清水榮 (於勢商店) 大阪市西區本田通三
 平川喜四郎 豐中市新免松葉通三ノ二四五
 平澤俊雄 (大阪外國語學校主事) 大阪市天王寺區小宮町四一
 平尾貫二 (平尾支店) 同 南區南久寶寺町四ノ六
 廣谷誠治郎 (大同殖産取締役) 兵庫縣武庫郡精道村芦屋字寺田一五
 土方雄彌 大阪市港區桂町二ノ三一ノ六
 森下政一 (大阪市助役) 同 住吉區松島通
 森平兵衛 (圓平商會社長) 兵庫縣武庫郡若尾三條寺ノ内四七五
 森下正 (田中會社) 大阪府北河內郡守口町一九六ノ一
 錢高久吉 (代表取締役) 同 泉北郡高石町南七〇八

京 都 支 部

一、理 事
 稻垣孝照 (陸軍中將) 京都市小內河原町四〇
 井上利助 (織物商) 同 新町通六角上ル
 市田彌四郎 (織物商) 同 柳馬場三條上ル
 石川芳次郎 (京都電燈會社) 同 相國寺東門前町
 岩井盛次 (商工會議所議員) 同 北白川小倉町五〇
 岩佐平三郎 同 柴野雲林院町
 稻垣庄三郎 (商) 同 室町姉小路
 磯田菊次郎 (京都電燈會社) 同 下鴨中川原八一

仙波龜次郎 大阪市此花區上福島南町一ノ八
 末松鳳平 (日産化學工業大阪支店長) 池田市八八三ノ八
 鈴木彌三郎 (三品取引員) 大阪市東區北久太郎町二丁目

石川興二 (京都帝國大學教授) 京都市吉田神樂岡町三
 飯田新七 (高島屋社長) 同 本町二十一丁目
 池野藤太郎 同 九條小學校
 今井拾吉 (日本電氣營業部長) 同 下鴨川原町一二
 市野瀨潛 (商工會議所議員) 同 鳴瀧瑞穂町二〇
 隱明寺敬治 (中學校長) 同 山科御陵別所町
 伊吹文次郎 (織物商) 同 烏丸線小路下ル伊吹商店
 六鹿清治 (取引所取引員) 同 烏丸三條上ル
 長谷川市三 (西陣織物組合長) 同 大宮上立賣上
 畑喜代治 (安田銀行支店長) 同 四條烏丸東入安田銀行支店
 西村善三郎 (旅館主) 同 狹屋町姉小路上
 西村久之助 (料理業) 同 東大路安井前
 西田太郎 (日本勸業銀行支店長) 同 烏丸押小路角日本勸業銀行支店
 西澤喜洋芳 (商業學校長) 同 京都第一商業學校
 堀場信吉 (京都帝國大學教授) 同 下鴨北園町七六
 細井恒次郎 (織物商) 同 榊形出町西入
 堀野久造 (酒造業) 同 堺町三條上ル
 大橋理祐 (織物業) 同 室町通今出川上ル
 大井清一 (工學博士) 同 寺町石藥師下

大橋理一郎 (生絲業) 同 下鴨西林町二〇
 大谷光端 同 伏見桃山三夜莊
 大澤德太郎 (貴族院議員) 同 河原町三條上ル
 奧主一郎 (京都瓦斯副社長) 同 御幸町二條下
 押原參吉 (明治生命支店長) 同 小山上板倉町六九
 岡野義治 (會社重役) 同 下立賣智惠光院西
 岡善吉 (京都瓦斯支配人) 同 仁王門廣道東
 大倉治一 (酒造業) 同 岡崎法勝寺町
 小野茂平 (第一工業社長) 同 下鴨藪倉町一〇
 小笠原滿舟 (三越都支店京長) 同 室町二條上ル三越京都支店
 奧田憲太郎 (奧田電機社長) 同 東九條烏丸町三五
 渡邊郁二 (商工會議所議員) 同 錦小路東洞院東
 渡邊嘉平 (商工會議所議員) 同 元警願寺智惠光院西
 若林祥太郎 (織物商) 同 室町通三條上ル
 川上清 (辯護士) 同 柳馬場四條上ル京都ビル二階二〇三號室
 辛島淺彦 (會社重役) 同 岡崎東天王町三三
 龜井亮治郎 (商工會議所議員) 同 笹屋町通千本東
 加賀谷朝藏 (京都市助役) 同 京都市役所
 川上甚兵衛 (織物業) 同 東堀川一條上ル

神前豐三郎	京都市紫野東高麗町五	會野作太郎	(取引所理事長)	同	堺町竹屋町下ル
四方卯二郎	(會社重役)	外山修	同	同	下鴨泉川町
横田永之助	(大日本映畫協會顧問)	津村甚之助	(京都大丸支配人)	同	四條高倉大丸
吉田忠	(吳服卸商)	津田武雄	同	同	問屋町五條南
横田長左衛門	(綿糸商)	津田正一	(住友銀行支店長)	同	烏丸通三條下住友銀行京都支店
米澤美雄	(工業學校校長)	塚本大吉	同	同	岡崎圓勝寺町
吉田弘造	同	中林仁一郎	(百貨店丸物社長)	同	東洞院七條南
谷口吉彦	(經濟學博士)	中野種一郎	(酒造業)	同	伏見肥後町
竹崎嘉德	(京都帝國大學教授)	中江源	(京都中學校長)	同	新橋木町丸太町南入
田中博	(京都電燈會社社長)	中田與兵衛	(綿布商)	同	錦藥師高倉東入
田中久之助	(洋傘商)	野上俊夫	(京都帝國大學教授)	同	下鴨膳部町八八
田中一馬	(貴族院議員)	野橋作兵衛	(商工會議所議員)	同	兩替町三條上ル
田中新一郎	(商工會議所議員)	久野寧	(京都帝大講師)	同	上御靈前烏丸東入
田代哲太郎	(帝國生命支店長)	倉内吟二郎	(京都帝國大學教授)	同	淨土寺馬場町五五
田島順	(京都帝國大學教授)	熊谷直之	(鳩居堂主)	同	寺町姉小路上
竹上藤次郎	(商工會議所頭)	久保田庄左衛門	(商工會議所議員)	同	京都市西院洞通五條下ル
谷澤幾次郎	(商業)	矢野仁一	(文學博士)	同	田中飛鳥井町一三
谷政二郎	(會社重役)	八木芳之助	(京都帝國大學教授)	同	北白川小倉町五〇
瀧野德右衛門	(取引所取引員)	山田茂助	(生絲商)	同	大宮今出川上

山田啓之助	(大日本製水社長)	京都市河原町今出川下ル	郡場寬	(京都帝國大學教授)	同	鞍馬口烏丸東
山田就將	同	大宮通今出川上	近藤金助	(京都帝國大學教授)	同	小山堀池町一
山田九藏	(商工會議所議員)	同	近藤庄助	(雜貨卸商)	同	富小路五條上ル
山中次郎	(貿易商)	同	小松美一郎	(錢屋商會社長)	同	嵯峨大門町
山地卯三郎	(織物業)	同	圓城留次郎	(織物業)	同	東洞院高菱上ル安藤商店
矢代仁兵衛	(西陣織物業)	同	江見濱五郎	(大同生命保險重役)	同	大將軍鷹司町
山本仁三郎	(商業會議所議員)	同	寺本婉雅	(大谷大學教授)	同	新町頭市營住宅東四二
矢守治太郎	(織物業)	同	安藤榮藏	(商工會議所頭)	同	平野宮本町三八
正路倫之助	(京都帝國大學教授)	同	阿部惠水	(大谷大學教授)	同	日暮樺木町上
松尾喜七	(鹿ノ子校商)	同	淺山忠愛	(醫學博士)	同	室町通下長者町下
前田鼎	(京都帝國大學教授)	同	齋藤太郎	(第一銀行支店長)	支店	烏丸三條角第一銀行京都支店
前田龜千代	(辯護士)	同	澤木清次郎	同	同	姉小路千本東入
前川嘉三郎	(貸家業)	同	北尾伊三郎	(名古屋銀行重役)	同	四條堀川西入
松居庄七	(婦人服販賣業)	同	木田勝造	(生絲業)	同	京都市智惠光院今出川上ル
松山基範	(京都帝國大學教授)	同	湯淺七左衛門	(湯淺電池社長)	同	五條通柳馬場西入
牧健二	(京都帝國大學教授)	同	三上正之助	(織物業)	同	西陣較屋町
福村久郎	同	同	宮本男也	(會社重役)	同	西ノ京原町四
福地久吉	同	同	下村正太郎	(大丸社長)	同	烏丸丸太町上
藤安三之助	(會社重役)	同	白崎榮次郎	(吳服商)	同	東洞院綾小路上ル

名古屋支部

一、監事

- 林 正男 大塚堅之助
- 大隈 榮一 宅間重太郎
- 長 戶 儔 櫻木俊一
- 森 越太郎

- 六戸 二郎 (商工會議所議員) 京都市土手町竹屋町上ル
- 島津 源藏 (烏津製作所社長) 同 東洞院御池上
- 松風 嘉定 (會社重役) 同 清水坂二丁目
- 松風 憲二 (會社重役) 同 今熊野南日吉町
- 平井 仁兵衛 (織物商) 同 清水町三丁目
- 平井 小太郎 (會社重役) 同 小山堀池町二三
- 平田 保太郎 (會社重役) 同 小山堀池町二三
- 森口 繁治 (商工會議所理事) 同 北野紅梅町四ノ五
- 守屋 孝藏 (辯護士) 同 市洞院丸太町下ル
- 千宗 保 (茶道家) 同 小川寺ノ内上ル
- 隅田 保 (京都瓦斯會社長) 同 上靈南橫通寺町西入
- 鈴木 益三 (三菱銀行支店長) 同 烏丸四條角三三菱銀行支店
- 須磨 勘兵衛 (商工會議所議員) 同 北小路通新町西入
- 菅野 力 (菅野病院院長) 同 新町今出川上ル
- 杉原 辨太郎 (辯護士) 同 烏丸今出川下ル

- 伊藤 次郎左衛門 名古屋市西區茶屋町三ノ一
- 池田 増太郎 (東邦瓦斯取締役) 同 昭和區松榮町一ノ七七
- 井東 敏夫 (東邦瓦斯調査係) 同 中區武平町一ノ一一
- 伊藤 喜兵衛 (書畫骨董) 同 東區鍋屋町一ノ二四
- 伊藤 織藏 同 中區元田町一ノ一
- 伊藤 佐平 (醫師) 同 西區東萬町二ノ一〇
- 伊東 秀雄 (會社員) 同 昭和區豐付通六ノ一七
- 岩沙 清八 (織物商) 同 中區南辰巳町二八

- 今岡 正一 (金城鑿岩機社長) 名古屋昭和區龜山町二ノ三四
- 林 正男 (海軍少將) 同 昭和區櫻井町一ノ五一
- 西野 瀧三郎 (田代自動車社長) 同 千種區田代町月見坂一四
- 富田 孝造 (神宮殖産會社役員) 同 東區白壁町四ノ一五
- 豐田 利三郎 (豐田紡績社長) 同 東區白壁町二ノ五
- 千葉 上 (滿鐵案內所) 同 中區榮町一
- 岡谷 惣助 (岡谷商店社長) 同 中區蛭子町五〇
- 岡本 松造 (岡本工業會社長) 同 昭和區東郊通り七ノ一五
- 岡本 藤次郎 (豐田紡績取締役) 同 東區德川町一ノ二七
- 岡田 清三郎 (名古屋醫科大學教授) 同 東區主稅町四ノ七
- 大澤 重右衛門 (澤重商店) 同 中區鐵砲町
- 大澤 吉五郎 (ジャパントイムス支局長) 同 昭和區永金町一ノ一
- 大隈 榮一 (大隈工業所社長) 同 東區富士塚町三ノ一二
- 大島 一郎 (新愛知新聞總務) 同 東區德川町二ノ二一
- 大塚 堅之助 (陸軍中將) 同 中區正木町一八
- 大矢 史朗 同 中村區米野町中田一五一
- 奥田 清兵衛 (金物商) 同 西區茶屋町一ノ一四
- 長田 甚次郎 (中央木材社長) 同 昭和區山脇町二ノ一二
- 蟹江 冬藏 (陸軍少將) 同 千種區田代町御柳妻七六
- 加藤 泰次郎 (名古屋銀行監査役) 名古屋市西區臺所町三ノ一
- 加藤 勝太郎 (加藤商會社長) 同 中區南榮名町五ノ四
- 加藤 鍊五郎 (醫師) 同 東區高岳町一ノ六
- 加藤 久右衛門 同 中區伊勢山町一六三
- 加藤 眞一 (陸軍大佐) 同 千種區田代町二ツ池四
- 神野 金之助 (福壽生命保險社長) 同 昭和區川名山町三
- 神田 純一 同 昭和區菊園町二ノ二四
- 横井 濟 (好生館院長) 同 東區榎木町三ノ一七
- 高橋 彦二郎 (米穀取引所理事) 同 西區和泉町一ノ二二
- 高橋 鐵五郎 (印刷出版) 同 中區南吳服町二ノ二一
- 高松 定一 (肥料商) 同 中區納屋町一ノ三
- 宅間 重太郎 同 東區車道東町一三三
- 田村 春吉 (名古屋醫科大學學長) 同 中區南鐵治屋町二ノ二四
- 田 中 齊 (新愛知新聞主幹) 同 東區德川町七ノ一〇
- 瀧藤 治三郎 (瀧藤商店社長) 同 東區東芳野町二ノ七六
- 竹崎 律太 (大福海上火災保險株式會社支部主任) 同 東區水筒先町四ノ六
- 辻 浦鶴松 (醫師) 同 中區内屋敷町四二
- 恒川 増太郎 同 西區牧野町八ノ三五
- 恒川 義夫 同 西區江中町一ノ二

津田次郎 (陸軍大佐)	名古屋千種區田代町字北畑三	山田勝康 (陸軍少將)	昭和區廣路町中山三〇
長戶 儔 (名古屋銀行)	中區大阪町三ノ四	山田虎夫 (陸軍中將)	昭和區吹上町一ノ一〇
中川哲四朗 (瀧實業學校長)	中區西川端町三ノ一五	山本英忠 (山本病院長)	熱田區熱田東町新宮坂八
中村賢之助 (日本硝子會社)	西區南押切町三ノ二四	山森正雄	中區中村町五ノ七九
中尾五郎 (一誠社社長)	中區正木町七三	矢田 績 (公衆圖書館)	東區榎木町二ノ五
那須太三郎 (陸軍少將)	愛知縣愛知郡天白村八事	八木富三 (三星デパート)	東區車道町八ノ六
村岡嘉六 (大隈鐵工役所)	名古屋東區德川町一ノ三四	築 鈴三郎	中區西境町四ノ一七
村手彦增 (陸軍大佐)	中區白山町一八	松岡嘉右衛門	中區矢場町五ノ五三
浦田芳朗 (陸軍大佐)	東區相生町三ノ一八	松山兼三郎 (愛知縣農會)	西區光音寺町六二
牛田國五郎 (陸軍少將)	京都市烏丸通丸太町	福谷 榮七 (福谷商店)	東區東芳野町二ノ一二八
桑田吉郎 (名古屋鐵道)	愛知縣海部郡八開村赤目	深田 源六 (醬油釀造業)	東區東芳野町二ノ一二六
黑田忠讓 (一開張漆器商)	名古屋市昭和區龜城町三ノ三	船橋 定吉	西區下園町三ノ五
久保太四郎 (湯ノ島館支配人)	愛知縣益田郡下呂湯ノ島館	後藤 增平 (後藤殖産)	中區車道町八ノ八
久米朝夫	名古屋市昭和區龜城町六ノ一七	後藤 富太郎 (名古屋株式)	中區千早町二ノ三五
國 松 豐 (名古屋高商校長)	昭和區陶生町二ノ二三	後藤 幸三 (愛知土地社長)	昭和區御器所町字東寺一
楠 太 (楠病院長)	昭和區中山町五ノ一二	兒島豐三郎	市外西枇杷島町
山本權次郎 (山本運動具)	中區末廣町二ノ二	小林龍二郎 (愛知淑德)	千種區田代町堀割五ノ八
山田平十郎 (東邦電力取締役)	中區南武平町一ノ一〇	幸田銈太郎 (海軍大佐)	東區東榎木町七
		寺本喜三次 (福壽生命取締役)	中區松ヶ枝町一ノ四

青木鎌太郎 (愛知時計社長)	名古屋東區富澤町一ノ一	白石信明 (陸軍大佐)	東區東畑町一ノ四
青山善之助 (昭和無盡取締役)	中區伊勢山町一六七	柴田秀生 (會社社員)	昭和區鶴羽町一ノ一二
淺野信一 (商業)	中區鐵砲町二ノ一一	志水準平 (會社社員)	千種區田代町月見坂六八
天野榮十郎 (電話局長)	西區白旗町三ノ二	清水信勝	昭和區菊園町一ノ五
天野 廣	中區常盤町一三	廣瀬久彦 (廣瀬商會)	東區清水町五ノ三八
阿部萬平 (愛三商船社長)	昭和區櫻井町二ノ二五	菱田尙一 (名朝社社長)	昭和區天池町三ノ二五
朝川 順 (朝川病院長)	中區南武平町三ノ七	平松愛之助 (扇屋商店)	中區鐵砲町二ノ三八
櫻木俊一 (新愛知新聞理事)	西區江中町二ノ六	森 越太郎 (海軍中將)	熱田區熱田東町高藏六四
坂本 暢	東區平田町二一	森 一兵 (名古屋新聞社長)	昭和區五軒家町一七ノ六
佐藤伊兵 (東洋經濟新報支局長)	千種區田代町坂上五八	持田賢士 (大每名古屋總局局長)	中區大池町一ノ四九
佐藤銈之助 (佐橋鋼鐵店主)	中區古渡町三ノ四	鈴木廣二 (名古屋銀行)	千種區田代町北畑一〇
佐藤忠雄 (佐橋鋼鐵店主)	中區下前津町九〇	相山正式 (相山高等女學校校長)	東區富士塚町二ノ三〇
鬼頭幸七	西區皆戶町一ノ四		
木村定二 (名古屋起毛會社)	中村區日比津日赤南門前		
木村石丈	中村區島居西通二ノ九ノ一		
木村定三	東區主稅町二ノ一七		
木村諄助	中川區下一色町字中ノ切		
三原吉裕 (醫師)	西區菅原町二ノ三		
水谷銻造 (陸軍大佐)	昭和區丸屋町四ノ三二		

神戸大亞細亞協會

一、理事 (〇印は常任理事)

○今井嘉幸 井手元治 奥村拓治
 小田萬藏 小野雄作 勝田銀次郎
 加藤源次 〇竹中藤右衛門 〇田中卯三郎

田中金之助 田中正之輔 田崎慎治 五十川直市 (辯護士) 同 灘區船寺通一
 村井常三 村上 蕃 牛尾健治 今城高太郎 同 神戸市元町通三ノ一四〇
 黒瀬弘志 山下太郎 柳原恒治 伊村榮助 (海事協同會社員) 同 灘區中郷町二ノ八
 ○松尾忠二郎 ○松村善藏 藤本和夫 鑄谷正輔 (川崎造船所社長) 同 神戸區山本通四ノ九七
 古川虎三郎 小林義道 古宇田 實 早川大濤 (歴史畫家) 同 湊區湊山町四一九
 ○菊池吉藏 ○末高與次郎 原 淳一郎 (辯護士) 同 灘區上野通八ノ四
 同 灘區北野町三ノ一三

今井嘉幸 (法學博士) 福江市神戸區中山手通四ノ二一 林田敏義 (三菱銀行支店長) 同 神戸市湊東區相生町
 井手元治 (海軍協會兵庫支部長) 同 須磨區離宮西町二 速水寅一 (範多商店社長) 同 灘區大和町四ノ一七
 池田徳治郎 (十合神戸支店長) 兵庫縣武庫郡精道村芦屋二條字寺ノ内 阪野信夫 同 兵庫縣武庫郡若屋
 池本喜三夫 (鐘紡農務部長) 神戸市灘區上野通八ノ三 西川 礪吉 (獨逸政治經濟學士) 同 武庫郡住吉村空邊字古寺
 一井平治郎 (商業) 同 灘區上野通八ノ三 西本政弘 (九西商會代表) 同 神戸市須磨區天神町一ノ三八
 伊藤定敏 (日本生命保險株式會社) 兵庫縣川邊郡立花村塚口九六二 西田恭三 (市會議員) 同 神戸區中山手通二ノ二三
 石田明治 (神戶新會社) 同 同 西村一夫 (別府製紙所代表) 同 兵庫縣武庫郡御影町石屋字旭ノ
 井關英雄 (井關物產洋行) 神戸市葺合區磯邊通五 西田賢三郎 同 神戸市神戸區北野町四ノ八五
 伊藤新三郎 (製作所) 同 林田區梅香町二ノ九五 堀口由己 (海洋氣象技師) 同 神戸區中山手通七
 伊藤新三郎 (監査事務所) 同 灘區上野通八ノ三二 堀内長榮 (日本海員組合長) 兵庫縣武庫郡魚崎町魚崎七三一
 入江千壽 (建築材料商) 同 葺合區宮本通二ノ一九 法橋廣三郎 (町會聯合會長) 神戸市林田區吉田町二ノ四二三
 岩瀬太七 (陸軍大尉) 同 神戸區北野町三ノ九二

幣 修 (神戸新聞經濟部) 神戸市林田區東尻池町一ノ四三 渡部恒次郎 (三井物產) 神戸市神戸區海岸通三
 富永三四郎 (副) 同 葺合區上筒井通六 勝田銀次郎 (神戸市長) 同 灘區上野通七ノ二七七
 徳田作太郎 (商業) 同 葺合區磯邊通二ノ三四 加藤源次 (加藤物產社長) 同 須磨區離宮前町一三三
 近森晴海 (大鯊汽船取締役) 同 葺合區篠内橋通五ノ五七 川西清兵衛 (日本毛織社長) 同 須磨區東細澤町一五
 奥村拓治 (陸軍少將) 同 須磨區天神町一ノ五八 榎野 赴夫 (榎野商店支店長) 同 灘區高羽橋丘八八
 小田萬藏 (旭シルク社長) 同 葺合區籠池通二ノ八 片岡洋治 (支竹中工務店) 同 湊區千鳥町二ノ九
 小野雄作 (大丸神戸支店) 兵庫縣武庫郡魚崎町横屋六二八 加藤恭太郎 (三越神戸支店長) 兵庫縣武庫郡精道村芦屋權ノ澤
 岡崎忠雄 (神戸海上火災保險) 神戸市須磨區水野町 河東利男 (河東本家商店) 同 武庫郡御影町字上東六六
 大江賢了 (貝島炭礦支店長) 神戸市葺合區籠池通三ノ四 河原政勝 (同志社大學教授) 神戸市灘區城內通一
 岡田定信 (神戸日日新聞) 同 須磨區離宮前町一五 川崎芳熊 (川崎造船所專務) 同 神戸區中山手通六ノ一二
 岡見潤吉 (商工會議所課長) 同 林田區池田上町一一 嘉納徳三郎 (大同信託社長) 同 神戸區再度筋町四一六
 小畑種吉 (兵庫縣水産會長) 同 林田區駒ヶ林町五ノ九七 神田兵右衛門 同 兵庫區出在家町九
 太田直三郎 (縣社七宮神社) 同 兵庫區北宮内町一二 金光邦三 (辯護士) 同 林田區長田町五ノ五四
 大村信一 (第一商業學校長) 兵庫縣明石郡垂水町 川邊盛秀 (神戸商工會議所) 同 兵庫區永澤町三ノ一七五
 岡田重義 (神戸保險部) 神戸市湊東區橋通四ノ一七五 龜井重太郎 (神戸取引所) 同 神戸區浪花町六〇
 大垣光次 (證誠神社司) 同 須磨區權現町 吉川小三郎 (日産汽船取締役) 兵庫縣武庫郡御影町石屋字旭ノ
 小倉要作 (日本無線通信社) 兵庫縣明石郡垂水町西垂水 橫山平太郎 (國際汽船支店長) 同 武庫郡魚崎町横屋字石田
 和田一次 (神戸地方裁判所) 神戸市湊東區楠町五ノ一九一 米澤貞二 (神戸銀行顧問) 明石市材木町四一
 渡邊重吉 (大阪商船支店長) 兵庫縣武庫郡御影町但馬口一二 吉川市三 同 神戸市神戸區元町三ノ四三八

吉川丑太郎 (神戸市保険部) 神戸市神戸區下山手通七ノ六九 津田信吾 (鍾紡社長) 兵庫縣武庫郡精道村芦屋字平田
 横山善太郎 (日本海員組合庶務主任) 同 湊區馬場町三三 土持邑治 (成東商會主) 西宮市川東町四六
 横尾忠愛 (池田合名代表者) 同 葦合區磯邊通四 辻常治 (遠洋漁業、瓦商) 兵庫縣武庫郡本庄村深江一二〇
 竹中藤右衛門 (竹中工務店社長) 同 葦合區熊内町六ノ五 經谷孝道 (華中印書局總務) 支那上海思威路八一〇號
 田中卯三郎 (五光商會取締役) 同 湊區五宮町一〇九 鶴谷忠治 (鶴谷商會取締役) 神戸市神戸區山本通四ノ六ノ一
 田中金之助 (三菱倉庫取締役) 東京市牛込區若松町七七 辻村善治郎 (賀易商) 同 神戸區山本通五ノ九五
 田中正之輔 (大同海運社長) 神戸市須磨區潮見臺町五ノ八九 中井一夫 (辯護士、代議士) 同 神戸區中山手通四ノ一三
 田崎慎治 (神戸商業大學長) 兵庫縣御影町西平野字平野 中島岳良 (中務取組) 廣東市越秀地路一三三號瑞園
 瀧川儀作 (神戸市取引所理事) 神戸市須磨區關守町二ノ三 中島富造 (專務取組) 神戸市須磨區關守町二ノ八
 田宮嘉右衛門 (神戸製鋼所社長) 兵庫縣武庫郡精道村芦屋字平田 中新定雄 (海正同) 兵廣縣明石郡垂水町東垂水三〇三
 竹馬隼三郎 (竹馬商店社長) 神戸市須磨區離宮前町二〇 檜崎角一 (明和汽船) 神戸市須磨區稻葉町三ノ三四
 大知新太郎 (辯護士) 同 神戸區下山手通七ノ一七 奈良忠智 (總務部長) 同 湊區石井町二ノ一四九
 田口政五郎 (垂水町長) 兵庫縣明石郡垂水町鹽屋二八五 中務葦陽 (賀易商) 同 灘區深田町二ノ五七ノ七
 竹本喜三 (竹本商會代表) 同 明石郡垂水町東垂水三三七 長田滋利 (海員組合) 廣島市宇品町北通四
 田中岩雄 (商工會議所議員) 神戸市林田區御船通二ノ五 長井武治郎 (大阪放送) 大阪府布施市大字金岡一二
 高井武兵衛 (神戸市衛生組合) 同 兵庫區宮内町一五 奈良山勉治 (洋服商) 神戸市神戸區元町通三ノ四四一
 高橋茂雄 同 湊區雪御所町一五 村井常三 (濹原化學工場) 兵庫縣明石郡垂水町東垂水
 瀧川勝二 (カネキ商店取締役) 同 須磨區寺畑町一〇 村上蕃 (神戸行印刷) 神戸市須磨區板宿町三ノ七三
 瀧川清一 (青島マツチ社長) 同 須磨區天神町三ノ九一 向井勘兵衛 (神戸新聞專務) 同 湊區下三條町一二ノ二

向井富太郎 (神戸中央市場長) 神戸市神戸區下山手通四ノ一二 山川宗杉 同 須磨區關守町三ノ三八
 野田文一郎 (代議士) 同 神戸區中山手通六 山本利壽 (關西學院文學部) 同 兵庫區會下山町一ノ五八
 野村秀雄 (日本港灣從業員組合支部長) 兵庫縣明石郡垂水町西垂水ノ下五三 松尾忠二郎 (笠戶船渠社長) 同 灘區高尾通四ノ八
 野瀬 讓 (柴仁商店常務) 同 武庫郡魚崎町新堀八一 松村善藏 (丸善石油會社社長) 同 灘區上野青谷園
 野瀬秀一郎 (小林海運社員) 同 武庫郡住吉村鴨子原八八 松本博邑 (神戸商船會社社長) 同 神戸區山本通四ノ二三
 黑瀬弘志 (神戸有馬電氣鐵道社長) 神戸市葦合區中尾町四九 前田勇 (神戸瓦斯) 同 灘區八幡町二丁目
 桑原太郎 (商會) 同 兵庫區魚欄町三五 牧野正雄 (醫師) 同 兵庫區小物屋町四九
 桑田正一 (硝子商) 同 湊區多聞通四ノ二二 増田政吉 (神戸ホテル) 同 神戸區中山手通五ノ二一
 久仁野又之 (町會聯合會書記) 同 兵庫區上澤通三ノ三九 松井久男 (柏木合資會社) 同 葦合區熊内橋通五ノ五五
 熊野惠賜 (神戸衛生實驗所) 同 湊區神田町二〇二 松村小琴 (南畫家) 同 林田區大塚町八ノ一四
 山下太郎 (山下汽船專務) 兵庫縣武庫郡住吉村坊塚四六四 松末盛計 (神戸新聞編輯局長) 同 須磨區磯馴町六ノ三一
 柳原恒彦 (大信貿易社長) 同 武庫郡住吉村九郎左衛門新田 松岡潤吉 (松岡汽船社長) 同 神戸區播磨町一七
 八馬兼介 (神戸銀行頭取) 西宮市久保町二八 藤村和夫 (辯護士) 同 神戸區中山手通四ノ一三
 山本金次郎 (石炭鑛業) 神戸市神戸區中山手通七ノ二五 古川虎三郎 (三井物產) 同 須磨區潮見臺町一ノ二
 山本 登 (辯護士) 同 神戸市中山手通六ノ二四 藤井忠兵衛 (藤忠商店社長) 同 神戸區加納町二ノ一一
 山澤春治郎 (神戸新聞主筆) 同 須磨區稻葉町四ノ四一 藤本義亮 (商工會議所理事) 同 灘區上野字城下山八三三
 山内佐太郎 (明石中學校長) 明石市太寺一丁目 福井文雄 (辯護士) 同 兵庫區水木通七ノ三ノ二
 山口 亨 (富島組神戸支店支配人) 兵庫縣武庫縣御影町字掛田一一 福島嘉平 (商工會議所課長) 同 葦合區旗塚通四ノ九
 山崎敬榮 (三菱倉庫支店長) 神戸市神戸區下山手通八ノ四二 福井拾一 同 葦合區熊内町三ノ六九

福田金藏	(新日本社長)	神戸市湊區雪所町一三	荒木爾郎	(新興土地)	兵庫縣武庫郡山田村鈴蘭臺
舟橋靜一	(神戸新聞社)	同 灘區德井小田中一三	安藤眞一	(辯護士)	神戸市湊東區楠町三ノ三八
藤田靖二	(滋原化學)	同 須磨潮見臺町三ノ五	赤崎寅藏		同 兵庫區東山町三ノ三九
福崎致廣	(池田商事社長)	尾道市土堂町八〇九	荒卷純一	(商)	同 葦合區磯部通三ノ九ノ四
淵上寅男	(海事協同會)	神戸市林田區池田村字谷川一	坂本雅則	(阪神貿易聯合會)	同 湊區千島町二ノ三二ノ一
小林義道	(東極樂寺住職)	同 葦合區生田町二ノ四五	榊原康吉	(商)	同 神戸區下山手通六ノ一三
古宇田實	(神戸高工學)	同 須磨區御幸町三ノ九一	堺芳雄	(神戸市場)	同 兵庫縣明石郡垂水町西垂水高丸
小曾根貞松	(神戸瓦斯社長)	同 須磨區櫻木町三ノ二七	佐野榮一	(著述)	同 神戸市湊區熊野町三ノ六二
小畔四郎	(石原産業)	同 神戸區山本通四ノ一二二	酒井正之助	(政治)	同 須磨區明神町三ノ一八ノ三
小寺謙吉	(船舶部長)	同 神戸區中山手通五ノ三	佐々木種三郎	(貿易)	同 須磨區天神町二ノ一
小松二郎		同 葦合區中尾町五三	作道宗作	(國際汽船支店長)	同 神戸區西町三六
小林太郎	(石油店)	廣島縣沼隈郡千年村	猿丸吉左衛門		同 兵庫縣武庫郡若屋
近藤五輔		兵庫縣武庫郡住吉村古新田	佐藤謙一	(富士商會社長)	同 神戸市湊區大同町三ノ九一ノ一
榎並充造	(神戸商工會議所)	神戸市須磨區櫻木町一ノ二六	菊池吉藏	(東和汽船社長)	同 神戸區北野町二ノ二五
秋田信太郎	(辯護士)	同 湊東區楠町七ノ六二	木原仙松	(神戸物産)	同 兵庫區入江通二ノ八
秋山斧助	(神戸商工會議所)	兵庫縣明石郡垂水町西垂水	北村治憲	(陸軍憲兵曹長)	同 兵庫區入江通二ノ八
阿部八郎	(昭和鋼鐵工業)	神戸市葦合區上筒井通五ノ三九	岸野菊太郎	(上組合資頭取)	同 兵庫縣武庫郡多紀郡篠山町
麻生政一郎	(神戸貯蓄銀行)	兵庫縣垂水町高丸	北山亮	(辯護士)	同 神戸市神戸區中山手通三ノ六八
淺田實	(羅紗加工商)	神戸市葦合區中尾町五三	三島正雄		同 神戸區中山手通一ノ二四

南陽二郎	(縣會議員)	神戸市兵庫區今出在家町三ノ〇	關浦藤五郎	(關吉組回漕部)	同 葦合區生田町二ノ四〇
宮本卯一	(神戸新聞局長)	同 神戸區再度筋一八六	關口雄三	(關口合資代表)	同 兵庫縣明石郡垂水町東垂水六四三
三木五郎	(土木建築業)	東京市小石川區關口町二〇四	關口進次	(關口汽船社員)	同 武庫郡御影町那家字庄田
進藤信義	(神戸新聞社長)	神戸市須磨區大手町七ノ二	末高與次郎	(官部末高合名)	同 灘區篠原本町四
鹽見清	(神戸新聞委員)	同 須磨區飛松町三ノ五三	菅谷寬	(菅谷株式會社)	同 須磨區離宮前町一六六
進藤悅夫	(大日本農道新聞)	同 須磨區大手町七ノ二	須賀藤五郎	(須賀商會社長)	同 神戸區北野町三ノ六六
鹽津英薰	(大窯汽船取締役)	同 灘區篠原本町三ノ八七一	菅藤太郎	(菅園主)	同 湊東區多聞通三
嶋谷勇	(鳥谷汽船取締役)	同 須磨區高倉町一ノ一	杉野晶造	(神戸ホテル)	同 神戸市神戸區山本通二
篠崎昇	(神戸瓦斯取締役)	兵庫縣武庫郡精道村若屋字津谷	鈴木丈之助	(二松學會教授)	同 神戸區中山手通七
柴吉一	(柴仁製油社長)	神戸市神戸區小河通八	鈴木啓久	(神戸聯合區)	同 灘區上野芋ノ谷
下村幸太郎	(山下汽船社員)	同 湊區上三條町四二	杉村伸	(神戸社會教育課)	同 林田區和田ノ岬
平佐三郎	(辯護士)	同 神戸區下山手通四ノ三七	普通會員		
平松力松	(神戸穀肥取引所)	同 兵庫區魚棚町八	井澤傳兵衛	(日本食鹽總代理)	同 神戸市林田區前原町一ノ二六
廣瀬永造	(兵庫縣警察部長)	同 神戸區中山手通四	戊亥忠一	(神戸檢事)	同 湊東區楠町六ノ二六五
平尾善保	(日本電建社長)	同 灘區備後町二ノ四〇	長谷川觀山	(詩書家)	同 兵庫區會下山町二ノ七一
平尾淳太郎	(神戸社支配人)	兵庫縣武庫郡若屋岸ノ下八〇	林時天	(神戸合同運送)	同 林田區御藏通六ノ一一七
森本清	(森本倉庫重役)	神戸市須磨區關守町二ノ一四	花木太郎	(敏馬神社)	同 灘區岩屋町二
守屋磨瑛夫	(神戸市助役)	神戸市須磨區離宮西町一ノ二二	西木翔藏	(扶桑海上)	同 神戸區榮町一
森本保		同 湊區梅元町七六			

西田恭三 (會社兄弟) 神戸市神戸區下山手通七ノ七
 丹羽吉之助 (關吉組回漕部) 同 灘區德井弓木町二三
 堀井勝吉 兵庫縣明石郡垂水町東垂水三三
 戸田寅之助 (商業) 神戸市兵庫區北仲町七
 富永三四郎 同 葦合區上筒井通六ノ一六
 戸田源太郎 (三菱銀行支店) 同 須磨區月見山本町一
 小川隆平 (神戸海上) 同 灘區備後町四ノ三五
 小畑清吉 (運送業) 同 神戸區江戶町九四
 大浦虎八 (神戸投資會社) 同 兵庫區富屋町二ノ一
 河井正雄 (伊吹商店) 同 大阪市東區東町三
 米澤義市 (丸善組) 同 神戸市兵庫區東出町三ノ二七五
 武田二郎 (園藝技師) 同 灘區上野通六ノ二
 谷岡暉夫 兵庫縣武庫郡魚崎町横屋
 中野藤作 (若宮警防團長) 神戸市須磨區磯調町一ノ一五
 中山喜一 (神戸市保險部) 同 兵庫區上澤通三ノ一
 長山幸夫 (松尾稻荷神社) 同 兵庫區東出町三
 右近良明 (日本海上保險) 同 灘區八幡町三ノ三二〇
 山名貞則 (中學教諭) 同 須磨區村雨町六ノ二ノ三
 山崎進一 (共同火災保險) 同 神戸區中山手通三

山 森 要 (一宮神社々掌) 同 神戸區山本通一
 松尾益太郎 同 神戸區中山手通七ノ二〇
 増井克己 (八幡神社々掌) 同 兵庫區湊町一
 福島光三郎 (長谷川商店) 同 林田區片山町一ノ一六
 藤井定之助 (神戸取引所課長) 同 葦合區宮本通一ノ一七八
 福地 劍吉 (京都地方裁判所) 同 京都市上京區下立賣通烏丸角
 小谷朝太郎 同 神戸市灘區大和町一ノ六
 古賀嘉男 (兵庫縣社會課) 同 神戸區山本通四ノ九九
 網谷才一 (聯合青年團主事) 同 林田區前原町一ノ一七
 岸本靜秀 (萬福寺住職) 同 神戸市外山田村小部
 柚木秀雄 同 神戸市灘區赤坂通八ノ二七
 弓削十藏 (灰谷商店) 同 兵庫區會下山町二ノ一四五
 城谷寅一 (スプリング製作) 同 兵庫區上澤通六ノ一四七
 柴田英二 同 神戸區三宮町二ノ二六一
 日和孫吉 (大阪商船社員) 同 神戸區中山手通七ノ七
 平野藤額 (富島組社員) 同 神戸區下山手通八ノ三三
 森藤定一 (會社社員) 同 林田區駒榮町一ノ九〇
 瀨尾政廣 (協和商會) 同 葦合區旗塚通六ノ一八

北陸大亞細亞協會

一、顧問 樋口季一郎 石黒傳六 金澤市尾張町 同 石浦町五五
 一、會頭 横山隆良 今越理作 同 英町九
 一、副會頭 岡本規矩雄 今村貞吉 同 長町河岸町七七
 一、評議員 石原堅正 小倉周六 米山清次 林 長太郎 同 石浦町二〇ノ二
 安達十六 木内茂正 西谷庄八 同 木町一ノ一〇〇
 星野彦松 (東洋建物會社) 同 長町四番丁五七
 星野俊彦 同 下本多町四ノ八
 堀謙三 同 北京國隆運輸會社北京支社陸運課
 富山縣高岡市堀上町一〇六二
 石川縣石川郡野々市町 同 石浦町千代田ビル三階
 金澤市上堤町一九 同 長町二番丁二三
 一、理事 英 安 吉 星野彦松 乙田鐵三郎 戸澤勇次郎 岡本規矩雄 (金澤醫大教授) 同 長町二番丁二三
 中林貞治 中野藤一郎 北尾幸一 鳥島德次郎 同 石浦町千代田ビル三階
 會 員 石原堅正 (本願寺輪番) 金澤市五寶町 西別院內 同 堅町
 井村德二 同 里見町 同 池田町立町一七
 岩井隆盛 同 彦三町一番丁一三 同 下片町一一
 岩倉大祐 同 滿洲國ハルビン道裡斜路五道街 同 下柿木島二ノ一
 岩井甚吉 同 富山縣高岡市宮脇町九二〇 同 櫻島五番丁六

尾本謹治	金澤市南町八四	中川正重	同	西町四番丁一七ノ四
渡邊麗	同 上石引町七二	中與俊	同	南町四八
割澤亮太郎	同 木町一番丁二五	中村友吉郎	同	殿町五一
川越義一	同 木綿町五〇	中村智義	同	廣坂通り六一
上谷虎次郎 (陸軍大佐)	同 中鷹匠町	村野德嗣	同	野田寺町一ノ三三
鍛冶正雄	同 泉野町	牛園重二郎	同	兼六園内甲九號
釜本三郎	同 富山縣高岡市金屋町一二一	宇田外次	同	榮町
吉川友吉 (商)	同 金澤市片町	野村文作	同	芳齋町九ノ二
横山隆良 (男爵)	同 上柿木島一	野村和英 (會社員)	同	備中町
吉本玖式 (商)	同 新堅町三ノ二一	久保田可全	同	長町一番丁二四
吉田貞治	同 富山市總曲輪町八四	山口行盛	同	石川縣能美郡國府村字八重
吉田嘉一	同 金澤市長町一番丁三三	山本孝之	同	富山縣高岡市末廣町一〇一五
米山清次 (商會議所議員)	同 彦三町一番丁六〇	松村長次郎 (會社員)	同	金澤市上堤町一五
辰村米吉	同 滿洲國新京老松町辰村組	松本三太郎	同	上笠舞町六ノ五
田中清次	同 金澤市古寺町四〇	松田才一郎	同	廣坂通り一一二
夫馬良吉	同 神戶市須磨區須磨町二ノ三六	的場侃兒	同	北安江町二七一
津田鐵喜知	同 金澤市木ノ新保五番丁二九	藤澤熊吉	同	櫻島町一番丁四
中野藤一郎 (東洋建物社長)	同 川端町七七	每田周治郎	同	上弓ノ町七一
中林貞治 (陸軍大佐)	同 穴水町二ノ一九	荒木幸次郎	同	高岡町三五

赤倉彌太郎	同 早道町六一	宮澤政二	同	富山縣縣東岩瀨町
安達十六 (陸軍少將)	同 第九師團情報部内	宮野良一	同	金澤市上柿木島三七
齋藤稔	同 石浦町	島崎善吾	同	備中町一六
櫻井久光	同 森町三番丁五ノ二	志良以環 (第三中學校教諭)	同	長町二番丁七
嵯峨久二	同 中川除町八五	廣中進造	同	南町二〇
定木加賀里	同 滿洲國興安省滿州里電氣區	關戸寅松 (辯護士)	同	賢坂辻通り五
坂尾正近	同 金澤市南町八三	奥田安治	同	富山縣井波町井波三〇〇六
木内茂正 (陸軍少佐)	同 茨木町六六	宇野藤作	同	金澤市茨木町六五
北尾幸一 (第三中學校教諭)	同 彦三町六番町一八	三島理保	同	同 仙石町二七ノ一
清村正一	同 味噌藏町裏町二五	曾野正彦	同	同 尾張町九
木村文一	同 又五郎町二〇	祖父江辰之助	同	同 小將町中丁一二
岸澤正喜	同 味噌藏町間ノ町一五	津山玄道	同	高岡市宮脇町一八九
由田直次	同 石川縣河北郡森本村字南森本下	越野義久	同	金澤市尻垂坂通り一丁日八
三崎綱一郎	同 金澤市西町一番町一九	白川繁二	同	福井縣吉田郡森田町稻多
水野宗次郎	同 金澤市西町釜ノ内通四〇	爪生法賢	同	同 縣同 郡東藤島村藤島
三由鐵雄 (藥物問屋)	同 十三間町五二	白坂與吉	同	金澤市野田寺町一丁日三十
宮田治三郎	同 水溜町一一			

臺灣大亞細亞協會役員並會員氏名

役員 (イロハ順)

- 一、名譽顧問 松井石根
- 一、顧問 森岡二郎 三好德太郎
- 一、理事長 河村徹
- 一、理事 池田又四郎 貝山好美 竹藤峰治 郭廷俊 佐藤佐
- 一、監事 土居政次 大澤貞吉
- 一、常任評議員
 - 池田又四郎 石井龍猪 今村完道 土居政次 陳清波
 - 大澤貞吉 河村徹 貝山好美 揚漢龍 竹藤峰治
 - 中島道一 牛尾竹之助 郭廷俊 許智貴 佐藤
 - 白鳥勝義

會員 (イロハ順)

- | | | | | | |
|-------|------------|-------|-------|-------|-------|
| 池田又四郎 | 石田貞助 | 和泉種次郎 | 松本大輔 | 松本晃吉 | 福田定次郎 |
| 今村完道 | 井出松太郎 | 井田憲次 | 深川繁治 | 福元岩吉 | 古山昌雄 |
| 岩田此一 | 石井龍猪 | 石坂莊作 | 船橋寬一 | 甲賀三郎 | 後藤曠二 |
| 花香伯貞 | 北條熊人 | 土居政次 | 近藤滿夫 | 近藤時次郎 | 郭延俊 |
| 戶田謙一 | 張清港 | 張園 | 小林長彦 | 小林惣次郎 | 黃純清 |
| 陳振能 | 陳清波 | 林熊光 | 有馬昭彦 | 荒井賢次郎 | 後宮信太郎 |
| 林熊祥 | 李天賜 | 劉乘衡 | 有田勉三郎 | 姉齒松平 | 青山公亮 |
| 大澤貞吉 | 大場辰之助 | 大磐誠三 | 安座上真 | 佐藤佐 | 佐藤吉次郎 |
| 汪明燦 | 翁瑞春 | 小川浩 | 蔡彬惟 | 三卷俊夫 | 姜鼎元 |
| 金子光太郎 | 河村徹 | 貝山好美 | 許智貴 | 木原圓次 | 木村泰治 |
| 揚漢龍 | 臺北中央市場株式會社 | 高橋猪之助 | 魏清德 | 水間位彦 | 宮島靖 |
| 玉理三造 | 谷河海人 | 竹藤峰治 | 三宅捷 | 白鳥勝義 | 重田榮治 |
| 常見秀夫 | 中辻喜次郎 | 中西旭 | 肥後誠一郎 | 廣松良臣 | 森平太郎 |
| 中島道一 | 長岡寬 | 羅萬俤 | 守滿亦八 | 須田一二三 | 田邊誠一郎 |
| 樂滿金次 | 梅野清太 | 上田光一郎 | 郭邦光 | | |
| 楠井隆三 | 熊谷外茂吉 | 山下樵曹 | | | |
| 山根甚信 | 山岸金三郎 | 矢野謙三 | | | |

大亞細亞協會

東京市麴町區內幸町二ノ一
大阪ビル新館六階六五三號

大阪大亞細亞協會

大阪市北區船大工町一堂ビル 九階清交社内

北陸大亞細亞協會

金澤市南町第一徵兵ビル 東洋建物株式會社内

神戸大亞細亞協會

神戸市神戸區榮町二西日産館内

大亞細亞協會名古屋支部

名古屋市東區車道東町一二三番地(宅間重太郎方)

大亞細亞協會京都支部

京都市烏丸通夷川上ル 京都商工會議所内

大亞細亞協會福岡支部

福岡市藥院堀端七 福岡縣教育會館内

熊本縣大亞細亞協會

熊本市熊本縣廳學務課内

臺灣大亞細亞協會

臺北市表町二ノ一一

朝鮮大亞細亞協會

京城府大和町二ノ一〇二(庄司秀雄方)

中國大亞細亞協會

天津日本租界伏見町協昌里五十五號

比律賓大亞細亞協會

比律賓マニラ・ヒダルゴ八六一號(望月方)

14,5
345

昭和十五年四月二十日 印刷納本
昭和十五年四月二十五日 發行

(非賣品)

東京市麴町區內幸町大阪ビル
大亞細亞協會

編輯兼
發行印刷人

中 谷 武 世

東京市王子區神谷町一丁目四八二

印刷所

東京印刷株式會社

東京市麴町區內幸町大阪ビル新館

發行所

大亞細亞協會

175
345



